大正八年九月十四日（第三種郵便物認可）
大正十五年四月一日發行（毎月一回一日發行）

建築と社會

（第九輯第四號）

第九輯
第四號

日本建築協會
大正十五年四月一日



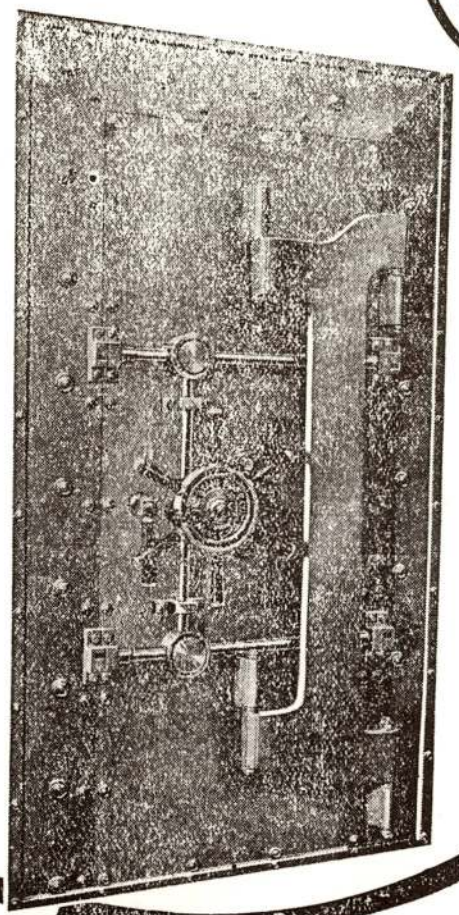
OTANI SAFE CO.



大谷製金庫室鉄扉

舶來型クランク式クラインダー仕上

本邦金庫界之權威



最近之御用命先

横濱正金銀行大阪支店殿
日本勸業銀行大阪支店殿
株式會社大林組本店殿
株式會社大阪ビルデイング殿
日本勸業銀行綾部支店殿

大谷金庫

東京 新富町
京都 松原通
大阪 淀屋橋
神戸 楠町六

日米板硝子株式會社

本　社　大阪市西區阿波堀通一丁目
工　場　九州若松市外二島（鐵道省指定工場）
大阪販賣店　本　社　內
東京販賣店　東京市丸ノ內ビルディング七階
九州販賣店　門司市大毎ビルディング三階

製品解說

製造方法　世界最新コールボーン式自働連續板狀伸延製造法ト稱シ幅六呎ノ板硝子ヲ長サ無限ニ連續製出ス

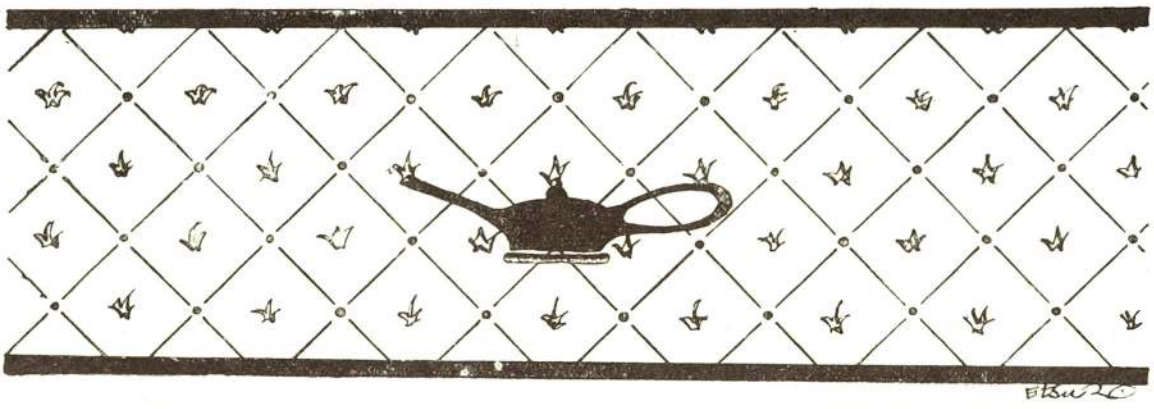
特　徵　精密ナル機械ノ標準ト硬化作用ニヨリ板面ハ反リ歪ミ無ク厚サ整等一シテ質强靱ナルヲ以テ破損ノ虞少シ

厚　味　二十四オンス品　並板（十六オンス）ニ比シ二倍ノ破壞强度及耐久力ヲ有スルヲ以テ學校病院工場會堂ビルディング等ノ高級建築及シヨウウインドウ用トシテ最適品ナリ

三十四オンス品　汽車電車等ノ窓硝子トシテ賞用セラル

加工品　摺・結霜　春霞

和洋建築窓・家具等ニ使用シテ頗ル優美ナリ



〔口繪〕

野村證券株式會社建物

- 建物外觀
- 營業室
- 階上、階下平面圖
- 地階、屋階平面圖

■表現……（一）

▽構造美の實際問題……伊藤正文…（二）

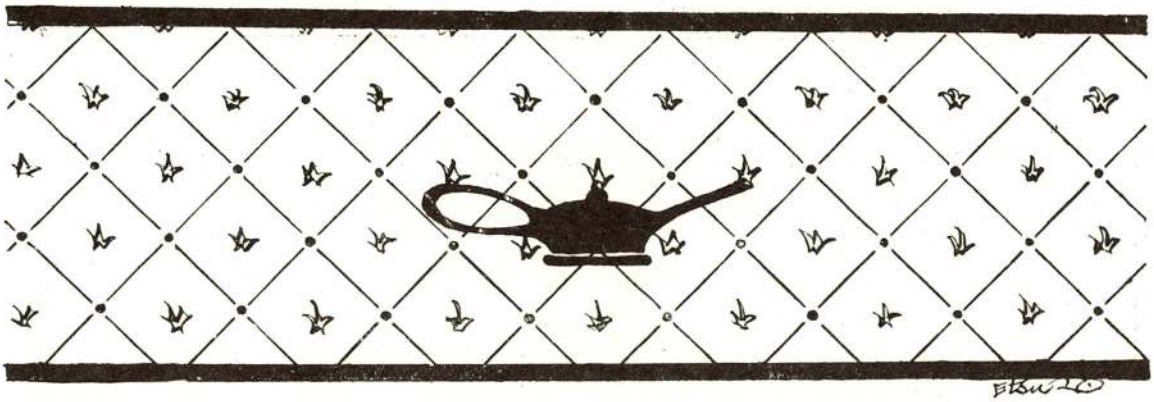
■「住」の？……（の一）……鶴見左吉雄…（五）

▽研究すべき法隆寺論……中尾保…（六）

■「住」の？……（の二）……（一〇）

▽法隆寺五重塔と空洞の調査研究……池田谷久吉…（一二）

■「住」の？……（の三）……（二元）



九輯第四號目次

▽民家の研究……津田鑿…（三七）

■江戸時代の建築……伊東忠太…（五八）

▽家白蟻の豫防撲滅法に就いて……城島徳市…（三〇）

■建築法規の話……建築法規研究會寄…（七五）

▽都市と現代的墓地園……椎原兵市…（五九）

▽街頭に美を探す……都市病患者…（六二）

■俳壇陽炎、猫の戀……齋藤溪舟選…（七七）

▽「火事の裁判」……芳野薫…（六七）

■俳話主觀客觀のはなし……齋藤溪舟…（七八）

▼會報……

新革之料材「壁」



特許　専賣

アサダセメント、プラスター

特長
- ○施工迅速　○色澤高尚
- ○安全堅固　○工費低廉
- ○耐濕耐火　○防錆防腐



乞御試用

特許　専賣

アサダ・白色ポートランド・セメント

特長
- ○高尚ナル純白色
- ○強力甚大、膨脹龜裂ノ虞ナシ
- ○緩結性ニシテ使用容易
- ○凡テノ性狀普通「セメント」同等以上

兵庫縣飾磨港

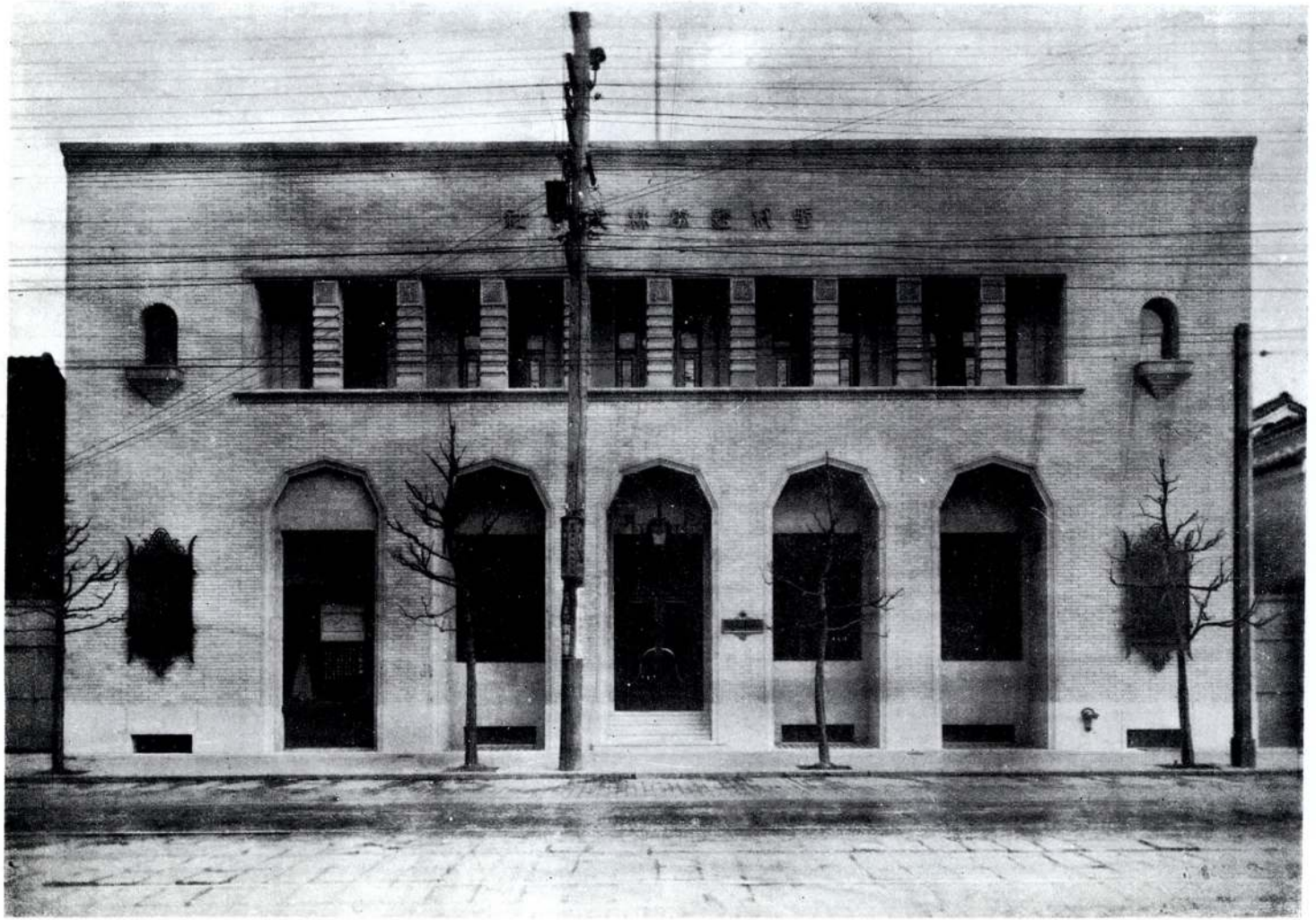
飾磨化學工業株式會社

東京販賣所　東京市日本橋區本町三丁目山口ビルヂング五階

建興社

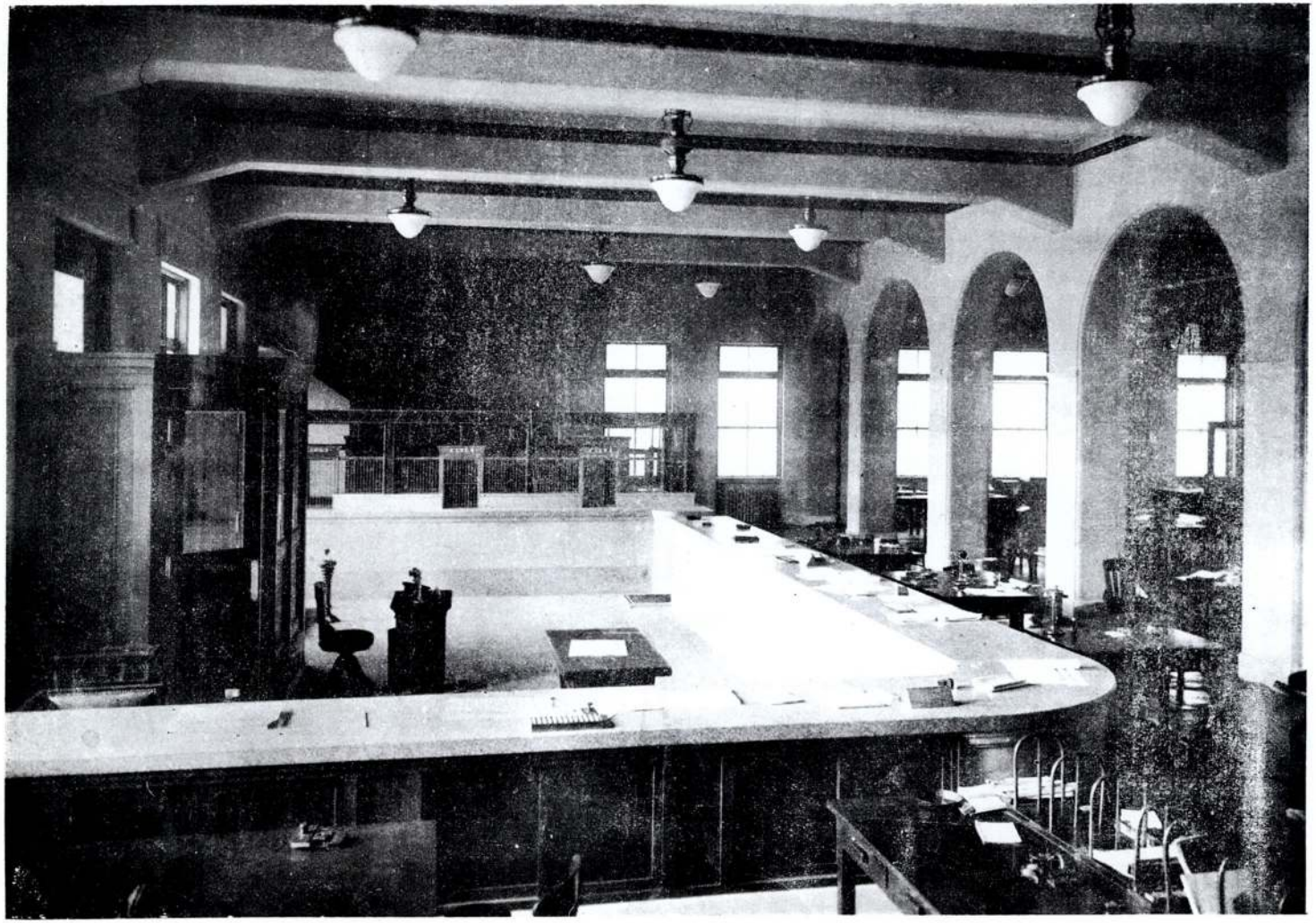
電話飾磨（一〇一六番）

電話大手（自九七五七番　至五七九番）

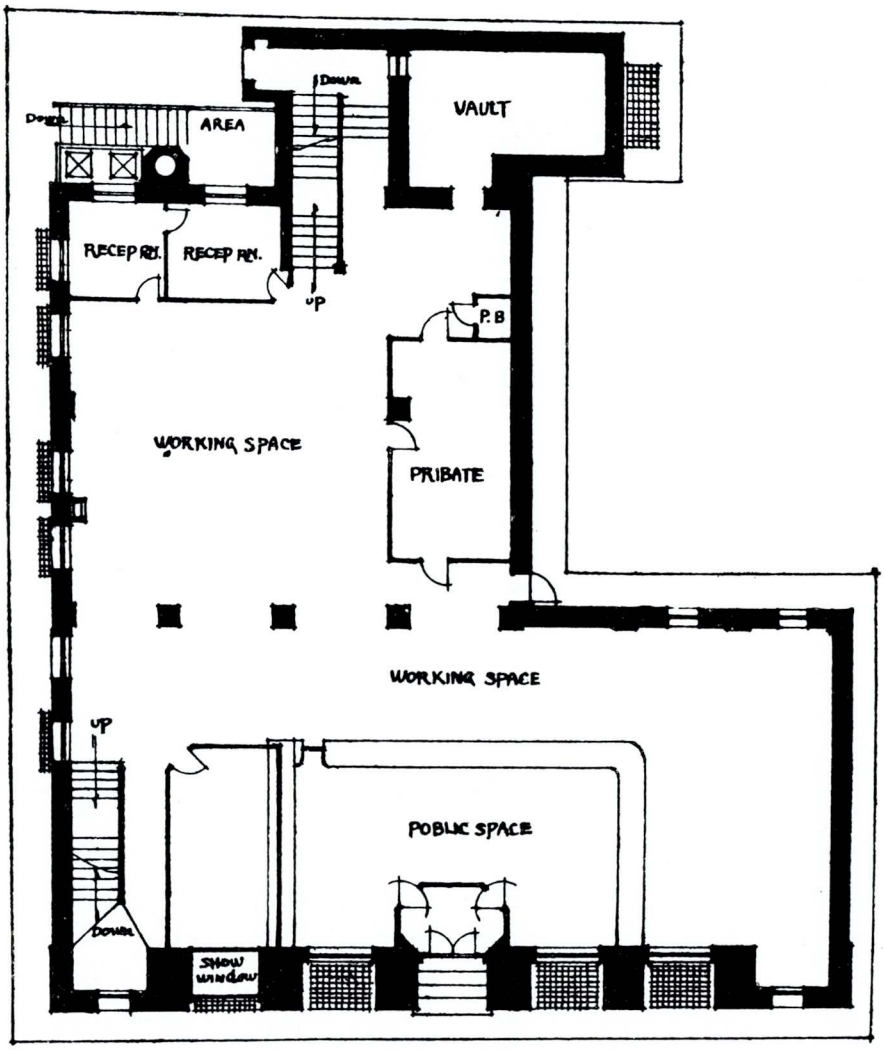


社會式株券證村野

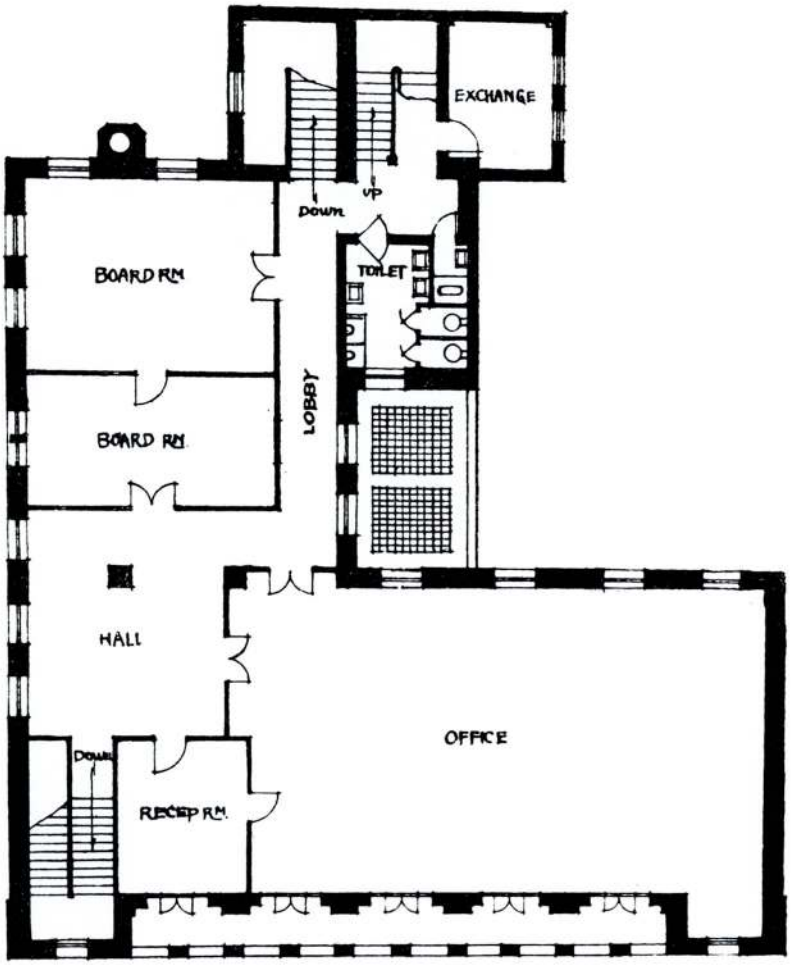
所在　大阪市瓦町　（設計—安井武雄）



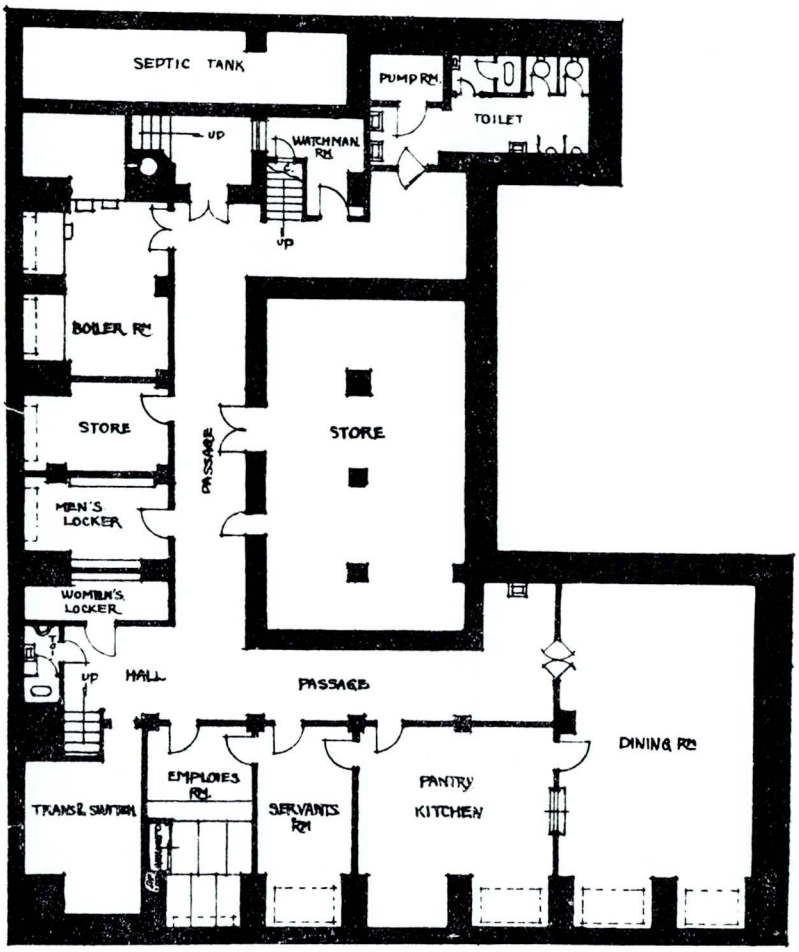
野村證券株式會社營業室


VAULT
AREA
RECEP RN.
RECEP RN.
P.B
WORKING SPACE
PRIBATE
WORKING SPACE
POBLIC SPACE
SHOW WINDOW

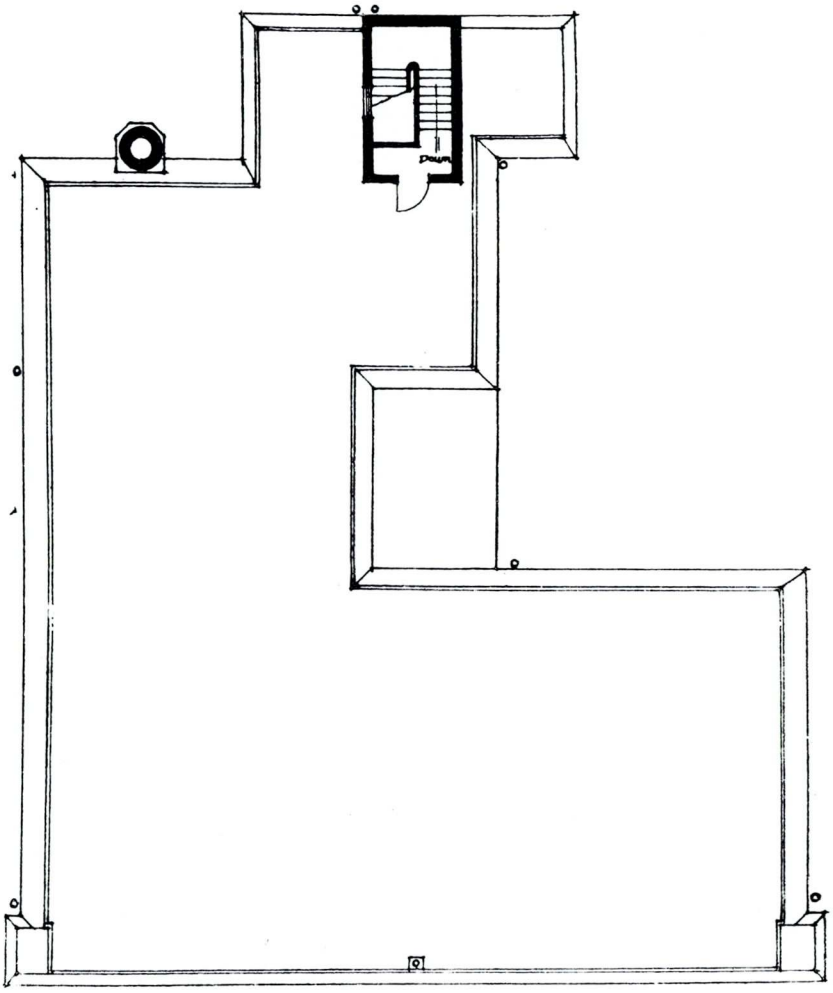
FIRST FLOOR



SECOND FLOOR



BASEMENT FLOOR

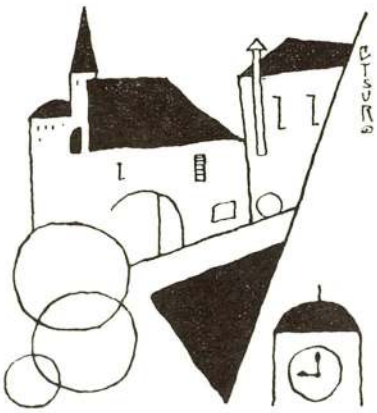


ROOF



吾人、通常、圓には圓の表現があり楕圓には楕圓の表現があると云ふ。而して按ずるに、それは、決して、表現ではなく、性質である。抑も、圓は圓いと云ふと以外の何を表はすか、楕圓は楕圓であると云ふ他に何を表はすか。表現と云ふ、而して何物をも表はしてゐないではないか。それは飽くまで印象である。勿論かゝる印象と他の印象との間類似は有する。吾人は、香、色、音樂等が相互に暗示し合ふを許す、が、その場合の類似は極めて可感的なる性狀に依て動かされたる添附的魅力であつて、決して其の感覺の根本的價値を組織しない。彼等の表現なるものは故に相互の感情が類縁ある性質を有してゐると云ふ偶然に負ふて居る。反之、圓の場合の性質は、相寄れる範圍に於いてそれが再現循環すると云ふ知覺から全く獨立して、感覺に對する自らの有効勢力を抱懐して居る。されば、形式の本質的性質なれば、全く表現と引き離して、それ自らの感動的味質乃至特殊價値として之を論究すべきである。

表現



構造美の實際問題

伊藤正文

建築美に就いて、フエルガツソン氏の所謂 Ornamental Construction（裝飾的構造）と、Ornamented Construction（裝飾されたる構造）との字義的説明を學んだことは古い過去の事であるが、近代の經濟狀態と科學的構造法の進歩が現代建築のあらゆる方面に半ば以上決定的の Formula を與へてゐるかの感がある。具體的に云ふならば、鐵筋コンクリート構造、鐵骨構造が所謂オーナメンタルコンストラクシオンによる建築美を要求する、それ以上にオーナメンテッドであるべきことを經濟的に限定され、時に拒否される。即ち又經濟的に無駄のない美しいものを要求するそれは尤なきわめて理論的な要求である。

そしてしば〳〵此立場から我建築家諸氏の論議を聞いたがその主張される所は理論の上から當然であり、たとへ反對の意見を挿む餘地があつても、此主張の方が社會の實狀から又科學的見地から出發したあまりに強い根據を持つために、か弱い嘆美的の主張は問題にもならぬのは當然である。しかしそれは批評家の意見ではなく建築家の主張する意見であつたが爲に、私等後輩はその主張される諸家の作に於て教へられる日を待つた。澤山の條件にとりかこまれた建築と云ふものではあるが、一貫した主張がたとへ雜然とした内にもほの見えることはあり得ると思はれるからであつた。

しかしながらそれは我々にとつてあまりに緊急な實際問題である。

日々設計され、建てられつゝある建築の構造體が果して何れ程我々の神經に惡い結果を與へずに進められてゐるのだらうか。

例へば梁一つと柱一本の交叉した形、それは柱と梁の强度的考察の單なる結果にプラスタアを化裝した鐵筋コンクリート體に過ぎない。鋭いハンチが壁紙を破つて梁を受けてゐる形、素直なスラブの面を縱横に無遠慮に走つて、アバラ骨の樣に見える小梁、梁間を間仕切で中斷されて梁の片端のみにハンチの見える不均衡の天井、此等は構造のなり行きにまか

せてその表面にプラスタア、リシン、アラバスタア等々々と化粧されたに過ぎない。

多くの現場を見て常に構造の局部的な些細な點から構造美を研究されて行くことの當然さと必要とを感ずる。

うねつた曲線形のプランやバラボラ形のヴオウルト屋限や鐵骨の大架構美のみに構造美を求める前に、日常極めて平凡視されてゐる鐵骨や鐵筋の建築の細部に就て注意を拂ふことが、構造美を研究する第一歩となるべきであつて、又實際問題として當面の必要事であると思はれる。即ちエキスペンシヴなオーナメレトを付ける要のない最も簡明なフルムの美を得る方法の研究であつて、誰にも明かな、わかり切つた事柄であるが、又一面實際には等閑視され勝ちなのであるまいか

鐵筋コンクリート建築の構造細部にしても只強度計算のみを基とした結果可成りに裝飾的努力を後から附加されて、殊更に化粧され乍ら却て不快な形が露出する結果を見る事がある。此等は最初構造設計に際して少しばかりの心遣りを惜まないであつたならば化粧されずとも裝飾されずとも已に形のみに於て快適なるものを得ることは困難でない筈ではなからうか。

間仕切と柱の交叉、梁の配置と天井の面の割合、柱と梁の交り、窓面積と壁面積との對照、或は柱形と壁面の面積關係等は構造設計の計算に當り第一にアッサンブション出來る事柄であるのだ。

尚局部的な點では階段の交叉狀態と踊場の天井の狀態、材質の異る巾木羽目等の接續點或は見切り、等極て微細な事柄であり乍ら、結果から見て等閑視されてゐるものが數限りなく多い事であらう。

高價な大ビルデイングや住宅にのみは細部に迄注意が拂はれ一般の多くの建物に對しては安價である事の理由が口實となつて此等の研究が疎かにされ勝ちである。しかし此等は決して工費の多い少いに關する問題ではなくて單に構造設計上の注意の行屆く程度から起る結果である。又斯く如くして構造細部の形態が建築の仕上の安易に關係することは明かなことであるが、複雜なる形は不快な感を透ひ易い爲に高價な手間を多く費して却て不首尾な結果に終ることがある。

又我々の感覺に訴へて、その限定された構造の範圍内で最も美しいと思はれる形態を假定して構造されたものであればそれは構造理論からも最適の方法に一致する効果を納め得る事が多い。

一言にして云へば構造體が最も素直な無理のない簡明な形であることが構造美構成の要件である。

現在に於ては事實上構造の爲の構造と、裝飾の爲め裝飾との分割された過程を通じて建築が出來て行く場合が多くはないか。

設計者はある motive からある Form を是非にも作るべく建築の各部の形態を決定してしまつた上で構造計算を適用させようとするか、或は强度の關係から、なり行き通りの形を何處迄も守つて外皮を出來るだけ上手にかぶせて仕上ようとするかの二つの過程の何れかによる事が多いのではないか。

前者による時は『裝飾の爲の裝飾』的結果となり、構造はあくまで裝飾の從であるために構造美は滅却される。

後者の傷合には單なる構造計算からの成り行きに從つた構

造材の積重ねと見える結果になる場合があらう、故に構造美を望むことはむづかしい。

構造の爲の構造でも裝飾の爲の裝飾でも、共に片輪である裝飾されたる構造――と云ふものは排斥す可きではなく、要は裝飾されずとも尙構造美として見らるべき構造體であるべきものが望ましい。

例へば衣裝をつけてのみ美しく、衣裝を去つては美しくないものでは初めから美しいと見えたのは錯覺に過ぎぬことになる。裸のまゝで美しい形を保持するものは、金があり美しい衣服化粧を附加すれば更に効果が表れることゝ同じである裝飾がごまかしと混同されてはいけない、ごまかして見せようとすることは裝飾にはならない。

構造體が構造上止むを得ぬ場合の形で不快なものである時之にあるものを補足し修飾して不快なる形を變改する爲に裝飾の目的が存在する。しかしながら、建築美として考へられる迄にすでに構造美として完成されてゐることは、裝飾を必要とするもの以上に成功である。或は現時の建築の大多數について必要事である。

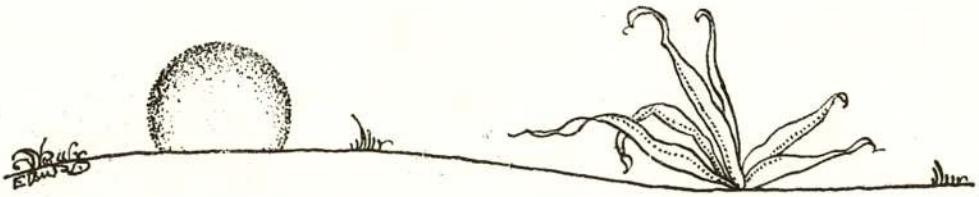
構造と裝飾とが明かに分立して相殺しつゝある例は橋梁設計に於て著しく眼立つ。橋梁の設計者は構造設計を完成した上で裝飾せんが爲に裝飾を附加しようとする場合が多い爲に裝飾と構造形式の分立相殺が生ずるのであらう。

流れに架せられた橋が、その構造自體如何にも安全な豊かさを表現しるならば其上に何等の附加的裝飾を要せぬ筈であるが、橋梁設計者としては單なる構造體だけでは物足らぬ不安を感ずるのであらうか――寧ろ無くもがなの所謂裝飾を附する事を計畫のプログラムを入れるのを常とする。

建築と橋梁とは使用上の意味こそ異るが構造美の點については同樣の事柄が云ひ得る筈である。

建築の實務に際して最も必要なる當面の事柄であり乍ら、理論の上にのみ止まつて等閑視されてゐるのが構造美の局部的研究であらうと思はれる。

×　×　×



『住』の？……（の一）

鶴見佐吉雄

私は建築の方に付ては全く專門外のことであつて、又特に建築のことに付て研究をしたこともなく建築政策などゝ云ふことに付て意見を述べると云ふことは甚だ僭越な感じがするのであるが、折角の御要求であるから、唯平素目撃して、こんなことはどう云ふものであらうかと疑を有つて居るやうなことの一二を述べて、專門家の御參考に供して見たいと思ふ、そんなことはもう疾に研究し盡されたことで、定めて下らない幼稚なことを言ふと云ふやうなお考も起るであらうと思ふけれども、マア他山の石として寛大に見て戴きたい。

近時殊に歐洲の大戰を一紀元として、日本の建築界も非常な進歩を示し、到る處に大建築物が出來又内容の充實した立派な建築物を見るやうになり、從て市街の狀況も一變したやうな觀があつて、私共は非常に歡ばしく思ふ、東京は震災後で、まだ區劃整理の定まらぬものがあり、大體の方針が決しないい以上建築も遽まないと云ふことは止むを得ないことであらうと思ふが、一部區劃整理も着々と進んで行くし、道路の如きも非常な勢を以て鋪裝されて行つて、何となく隔世の觀があるやうに感ずる蓋し復興計畫が確立し、建築の如きが着々進行して行つたならば、十年か十五年後の東京は世界中に於ても比類稀なる立派な都市になりはしないかと云ふことを想像して、私共は非常に愉快に感ずると共に、一日も速くさう云ふ狀況の實現する事を希望せざるを得ない。

それで東京を首め我國の大都會の所謂都市計畫なるものが定り、建築條例のやうなものも出來、家屋建築の制限其他の取締も行はれ或は之を計畫し施工される人々の努力に就て種々の立派な建築も出來るであらうし、又現に出來つゝあるのであるが、私が第一に注意しなくちやならぬと思ふのは、街角の建築物である、現在の東京其他の都市に付て考へて見ても、此コーナーに當つて居る建築物に付ては、何とかもつと適當な方法を講じなくちやならぬのではないか他日市街が綺麗に整理されても、其最も必要な位置を占める街角の家屋が貧弱で、適當なものでないと云ふことであつたならば、市街の美觀を損ずるのみならず、都市計畫上甚だ遺憾な點が多いであらうと思ふ、巴里の如きは言ふまでもなく非常によく出來た都市であるが、殊に此街角の建築物に付ては餘程注意して、唯單り宏莊なものを置くのみならず、其美觀を保つ爲に構造の上から云つても、甚だ間然する所がないやうに思ふ。聞く所に依ると、奈翁三世が巴里の市區改正を斷行した際に特に其コーナーに對して多大の注意を拂ひ、是が爲に補助金まで出したと云ふ事であるが、今日の巴里の市街を見ると、私は實に當時の用意の宜かつたことを感ぜざるを得ない、仍ち我國に於ても此都市の街角に付ては最も注意を拂つて、其建築物に於ても積極的制限でなく、小さな醜いものを建てることは出來ないとか云ふやうな或程度の制限を設けることも必要ぢやないか、又都市計畫上さう云ふ主要な部分の建築に對しては相當な補助金でも與へるとゝふやうなことも必要であらう、出來上つてから、それを改良させやうと云ふことは、甚だ困難なことであるから、其出來上らざる前に於て豫めさう云ふ考慮の下に計畫をして行くことが適當な方法ではあるまいか、無論街角に家を建てる者は、其事に於て所謂形勝の位置を占めることになるのであるから、自然特に注意を拂つて建築するには違ひないと思ふけれども、之を無制限に、獨力で經營させると云ふことは、今云ふが如き適當な制限を加へ、補助金を與へて、是が建設をなさしめると云ふことに比して、劣ることは言ふまでもない、故に何とかさう云ふことの考慮が必要でないかと思ふ。

第二に東京に於て云へば、下町の方は勿論であるが、所謂山の手方面の住宅地の建築に付ても何とか特に取締つて貰ひたいと思ふことは下水のことである、近來頓に地價が向上し、適當な土地を得ることが困難で、尺寸の地と雖も非常に貴重になつて來たものであるから、從來相當の空地を有つて居つた人も經濟上の必要から、段々庭園を割き、門の内を狹くしてまで、其處に建築をするやうになつて來た、殊に私の居る附近はそれが多い、所が初から或一定の計畫の下に建てられるのでなく、後から、下水が非常に惡くなつて困る大事な座敷の前に隣家の湯殿や便所が出來て、種々の汚水や汚物が流れ出て來ると云ふやうなことが往々ある、從て土地が高燥で樹木も多く、住宅地として最も衛生的で、理想的であると云はれた地方が、段々樹木は伐られ、小さな家が澤山建つて、下水が惡くなつた爲に、衛生的に非常な惡影響を及し、曾ては傳染病等がないと云つて誇つて居つた土地に望洋斯が流行つて來ると云ふやうなことが始終ある、甚だ遺憾であるが、我國ではまだ望洋斯とか虎列拉とか云ふやうな傳染病が大に流行することがある、亞米利加其他歐羅巴の先進國に於てはさうした病氣は既に傳染病にあらずと云はれ、慢性病とされて居る位であるが、我國に於ては今猶ほ家屋が前述の通り不注意に計畫なく無制限に建てられるが爲に、下水が惡くなつて、其處に種々の黴菌の養成所を造り傳染病の流行を助け、或は流行病を發生しないまでも、其土地が不健康地となつて、直接惡い空氣を吸ひ、又常に不愉快な濕氣を感ぜなくちやならぬと云ふやうなことは甚だ遺憾なことではないか、今にして建築をする場合には何とか此下水道の如きに付ては一定の取締をして、必ず大下水に疏通せしむるやうな方法を執られねばならぬと思ふ、恐らくさうなつて居るのであらうけれども、それが實際に行はれて居らぬことを私は甚だ遺憾とするのである、尤も更は建築其ものに對する希望ではないけれども、建築をするに付ては是等のことも十分考へて置かなくちやならぬ重大な事柄ではあるまいか。



研究すべき 法隆寺論

中尾保

法隆寺の五重塔心柱下に空洞のあることが發見されたので二十年來の論爭未だ解決を見ぬ再建非再建論はこれによつて或は解決は得られるものではないかと識者ならずも一般世人が多大の興味をもつて居るところである。

該空洞と云ふのは心柱下にあつて深さ九尺九寸、巾三尺七寸、底二尺位は塵で埋もれて居るのでその下を堀つて見ると直徑九寸九分位の銅板の蓋があり更にその下には握拔き礎石があると云ふことが各新聞紙上で發表せられたことであるが實に意外な新發見と云ふべきものである、空洞の中からハネサックル模樣入りの唐草が出たと云ふがそれも面白い材料となることであらう。尙この銅板の蓋を開けることは信仰上に多大の影響を及ぼすものであり又それ以上の調査は現狀を破壞される恐れがあると云ふので四月一日伊東、關野兩先生の來觀を待つて改めて調査に取かゝることになつて居るが果してこれによつて何事が立證されるか、銅板の蓋の中には何物が藏されて居るか（或は佛舍利かも知れないが）極めて興味深き問題である。

右に關しては吾人はたゞ學者の研究に一任するより外はないが、今日まで論爭され來つた再建、非再建論に就いて改めて一考して見ることは强ち無意味な事でもなく且又本邦最古の建造物否世界最古の木造建築物の遺蹟として建築史上或は美術史上、立派な參考物たる法隆寺に關し吾人建築に關係する者の等閑に附すべきものではない、そうでないにしてもこの樣な面白い問題に趣味を持たぬものは所謂玉の盃の底なきに類するものであらう。

扨て法隆寺は用明天皇の御願に基き推古天皇が聖德太子と共に建立せられたので推古の十五年に落成したものである、ところで推古二年より十五年までの間に經營完成したと云ふのと同元年より十五年と云ふのと二つの說があるが何れにしても十五年には完成したことは事實らしい、法隆寺は（斑鳩）（イカルガ）（鵤卿）（イカルガデラ）に（イカルガホンジ）あつたので時の人が呼んで斑鳩寺、伊河留我本寺、或は鵤（イカルガ）ノ僧寺とも云ひ、又聖德太子が特に學問所に當てられ

たので『法隆學問寺』とも稱へられたのである。

配置は所謂百濟樣七堂伽藍の制で(伽藍とは梵語の Sangarama より出た言葉で後には寺院の配置を差して云ふ)その壯麗無比なることは一世の人目を驚かしたことであらう。

この法隆寺が天智天皇の時一度燒失して和銅年間に再建したと云ふ記錄が見ねたので所謂再建說が起つたのであるが「日本書紀」の天智八年の條下に『干ㇾ時災二班鳩寺一』の記事あり引續き同九年の條下に『夏四月癸卯朔、壬申、夜半之後、災二法隆寺一、一屋無ㇾ餘』とあり又「七大寺年表」に「和銅元年戊申詔に依り筑紫の觀世音を造り又法隆寺を作る」の記事あり又「伊呂波字類抄」にも「法隆寺七大寺の內和銅年中之を造る」とあり是によると天智九年の四月に法隆寺は一屋も餘すところなく全燒したのを和銅元年に再建に着手したことになる、尙法隆寺緣起流記資財帳に

合塔本肆面具　一具涅槃像土、
一具彌勒佛像土、
一具維摩詰像土、
一具分舍利佛土、

右和銅四年歲次辛亥寺造者。

合金剛力士形貳軀在中門

右和銅四年歲次辛亥寺造者。

とあり即和銅元年に起工して同四年には全部落成し塔の塑像や中門の仁王が備へつけられたものとなる、大體右の記錄によつて再建論者は強く主張するのであるが、右に對して非再建論者は建建物の實施を調査し一々證據を列擧してこれは燒けて居らぬと反駁して居るが尙一部學者間には右記錄についても他少の疑點ありとして大略次の如く述べて居る。

一、書紀の「一屋餘す無し」と記したは法隆寺村の事ではあるまいか、若し伽藍が燒けたのなら「一宇餘す無し」とあるべきである、即宇の字を用ひずして屋と書いてあるところはあやしい。

二、天智九年に法隆寺の燒けたことは日本書紀にだけあつて他の書物に一向に出て居ない「扶桑略記」には天智八年に斑鳩寺に災ありと出て居るが肝心の九年の條には一屋餘すところ無い程の大火のことは少しも見えず又古今目錄抄にも出て居ない、勿論扶桑略記は延曆寺の皇圓の著書、古今目錄抄も後嵯峨天皇時代の書物であるから或は信じ難いとしても天智を去ること七十年和銅を去ること僅か三十年の天平十八年の作と云はれる同寺の資財帳にこの大事件の事は一つも記載されて居らぬとは一體何うしたことであらうか。

三、この頃の「作る」とか「造る」と云ふのは必ずしも新築又は再建を意味するもと限つて居ない、七大寺年表や伊呂波字類抄にある「作る」「造る」は必ずしも再建と解し難い理由はある。

例へば法隆寺の資財帳に推古天皇の十五年に四天主寺を造るとあるが四天王寺は用明天皇の二年の建立であつてこの場合には修繕を意味するものである。

又「筑紫の觀世音寺を造りまた法隆寺を作る」と云ふのを見ても觀世音寺はこの頃は既に出來て居つたのであるからこれも修繕と解すべきである。して見ると法隆寺も矢張り修繕と見る方が至當ではあるまいか、尙日本書紀には觀世音寺を造ると云ふ詔は天平の頃までにも數回出て居るがこれ等は勿論修繕の事である。

四、若し七大寺年表等の「作る」が再建の意とせば何故法隆寺の資財帳に載つて居らぬか。

即資財帳には燒けたことも再建したことも共に見えぬは一體何うしたことであらうか、この様な重大事件は資財帳に出て居らぬとは不思議な次第である。

五、資財帳に左の記錄のあることも亦一つの疑點とすべきである。

佛分壹面、塔分壹面、合鐘貳口、合磬貳口、合錫杖貳枝。云々。

右癸巳年十月二十六日　飛鳥宮御宇天皇、爲仁王會納賜者

又

合蓋壹具、佛分肆具、法分漆具。

右癸巳十二月二十六日　仁王會、納賜飛鳥宮御宇天皇者

又

合通分繡帳貳帳、具帶廿二條、鈴三百九十三。

右納賜、淨御原宮御宇天皇者

飛鳥宮御宇天皇とは持統天皇、淨御原天皇は天武天皇の事で右は天武、持統の二帝は如上佛具を法隆寺へ御下賜になつた記錄であるが天武、持統の二帝は何れも天智の後、元明の前であつて天智九年に一屋も餘すところなく燒失してそのまゝ元明天皇の和銅元年まで廢墟となつて殘つて居る法隆寺へその様な夥多の寺具、佛具を御下賜になつたなどとは何うしても考へられない又そんなことは有り得べからざることである

右は記錄に對する一部學者の反駁論であるか、これによつて吾人は次の如きことを想像する。

書記の天智九年に燒けたと云ふことは或は事實かも知れぬがそれは法隆寺の村一屋も餘すところなく燒失せたか或は伽藍の一部は燒けたものか何にしても何處かゞ燒けたに違ひない、しかし少くとも金堂、塔、中門等には及ばなかつたのであらう、一屋餘す無しとは所謂漢文古調の誇張式ではあるまいかとも思はれる。

それにしても「一屋無レ餘」の語を何故「一屋も剩す無し」の意にとるのであらうか、私は漢學の方は一向に解らぬが常識で考へるに若し「一屋をも餘すところ無し」と云ふことを漢文に改めると『無剩一屋』或は『無餘一屋』でなければならぬ。即無の字は一屋をも剩す」を打消すべきである若し「一屋無餘」と書けば或一軒の家が何も殘らず全燒したと云ふ意味になる、それで日本書紀にある「一屋無レ餘」とは或家屋一棟が何物も殘さず全燒したことを書いたのではあるまいかとも思はれる、しかしこれは私一己の意見で或は誤つて居るかも知れないが、たゞ漢文の法則に從ふと「無」が上へ來なければならぬ。勿論此時代の漢文は本處の漢文體でないからそれをかれこれ云ふことは野暮かも知れぬが考へ様によつてはさうともとれるのである。

又この頃の「作る」「造る」は或は學者の云ふ修繕の意味かも知れぬ。して見ると再建論の根據は極めて薄弱なものの様にも思はれるが、しかし再建論者も何れも斯界の泰斗であり記錄にも勿論深い根據あつての事であらうから、此際再建論者から吾人の得心の行く様な說明が聞き度いものである。私は非再建論者たる伊東博士の敎へを受けた者であるから自然

非再建を信じて居るが吾人はたゞ双方學者の云ふところを常識をもつて判斷するより他に途はないのである。

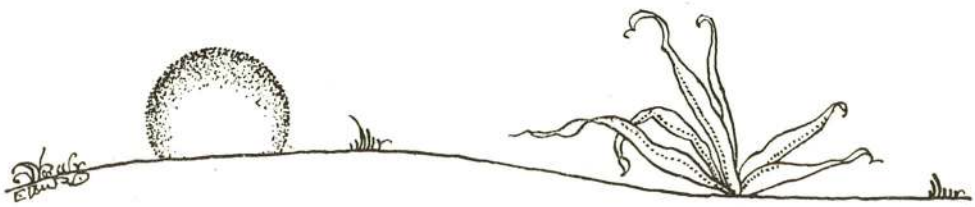
尙關野先生等の實地調査の話については本誌先々號、岸熊吉氏の話の中に記載せられて居る又新聞その他にも出たことゝてこゝに繰返すことを止めるが、最後に若し再建論が勝つたとすれば他の問題は兎も角として次の四つの問題を如何に解決するかと云ふことを考へさせてもらい度い。

一、何故唐尺を用ひずして高麗尺に據つたか、礎石が殘つて居るからその上に建てたと云ふならば礎石に燒けた痕蹟がなければならぬ。若し礎石を取替へたとすればその際唐尺を用ひるは當然の事と思ふが何を苦しんで高麗尺を用ひたか、殊にエレベイションにまでそれを用ひて居る、これは或は建初當時の設計圖が殘つて居て、そのディメンションが高麗尺で入れてあつたから唐尺に換算するは面倒だからそれによつたのか、それならばその事實如何、

二、金堂、塔、中門等の樣式は推古式の標範なることは斯道學者の固く認むるところであるが學者ならずも常識ある者なら誰しも解るものである、法起寺法輪寺の三重の塔や、玉虫厨子、天壽國曼陀羅等は立派にこれを證明して居る、ところで和銅時代の工匠が百餘年前の建初の古式に準據したことは或は有り得べきことでもあらうが、そのディテイルに至るまで自己の好尙を沒却して忠實に模倣したりとは何うしても考へられない、各時代の修繕毎にその時代のディテイルの手法が何處ともなく入つて居るのを見ても獨り和銅の時にのみそれはなかつたとは不思議と云ふべきである、又金堂や塔の裳階は和銅頃の作であるが、これだけを推古式にせなかつたのは何故であらうか、その邊の解釋如何。

三、金室内にある釋迦三尊は鳥佛師の作なることはその光焰背銘によつて明であり又金銅藥師佛は背銘に作者の名はないが聖德太子が御父君用明天皇の病にかゝられし時の祈願を履行せられんが爲に造られたもので推古天皇の十五年の鑄造で何れも建初當時のものであるが、これ等は和銅四年まで何處に安置してあつたのであらうか、勿論金堂内にあつたものに相違ないと思ふが、それならば如何にして天智九年の一屋餘す無き火災を免がれたのであらうか、持ち出すにはあまりに大きく且重いものである。

その他にも疑點は多々あるが、大體右の三つについて明確な說明が聞き度いものである。兎に角何れにしても近く學者は何事か發表されることと思ふから我等は興味をもつてその日を待つことにする。（三月五日投稿）



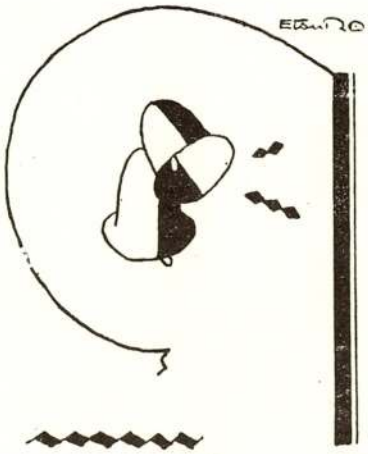
『住』の？……（の二）

鶴見佐吉雄

次に矢張り住宅區域に於て起る問題であるが、住宅も段々郊外に延て發展して行く狀態である、關西方面の殊に大阪の如きは最も激しいやうである、東京の如きも非常な進歩發展を見て居る、而もそれが漸く荷車を通ずるに過ぎない位の狹隘な道路に直面して建築されて居る、斯の如くにして郊外が發展し住宅が殖えて行くならば必ずや近き將來に於て交通の必要上道路の幅員を擴げなくちやならぬことは識者の俟つて初て知るまでもなく分り切つたことである。然るにそれは裏に空地がないから止むを得ず道路に近接して建てるのかと云ふと、さうでない、裏には多くの空地があるにも拘らずさう云ふ風にして居る、是等も他日發展の曉には必ず道路の幅員を擴げなくちやならぬと云ふことでは其處に家を建てる人の不利益でもあるし、一般の交通上非常な不利益であるから、爲政者は今より何とか適當な建築取締の規定を設けることが必要ではないか、縱令法令を以てさう云ふことの取締をするまでの必要はないとしても、其處の行政の任に當る市町村に於てそれ等の所有權者と協議をして、豫め其邊の用意をしてやつて行くべきものではないか、聊かの親切と注意を拂つて行つたならば、公益の爲にもなり、又他日道路の幅員を擴げる爲に其家を改築しなければならぬと云ふやうな不利益もなく、又市町村がそれに對して要する經費も節減せられる譯で、私は市外の住宅地、殊に郊外發展の狀況を見る毎に、何とか斯う云ふことも考慮する必要があらうと思はぬことはない、恐らく所感を同じくせらるゝ人も澤山あらうと思ふ。

次に感ずることは所謂漏電の問題である、近頃學校劇場等の大建築物にして火災に罹かるものが多い、其原因は種々あるけれども、大抵の場合は漏電だと云はれ、昨秋議院の燒けたのも漏電の爲だと云ふ說もある位である、巨額の經費と非常な努力を要して造つた建築物を一朝にして烏有に歸せしめ、其損害の莫大なことは云ふまでもないが、中には大切な書類で、再び得難いものを燒いてしまつたり貴重な藏品を灰燼に附してしまふと云ふやうなことは實に遺憾千萬なことである、而も私はそんなに大きな建物漏電の爲に燒けると云ふやうなことはあり得べからざることのやうに思ふ、私の家は燐寸箱のやうな殊に古い建物であるが曾て電氣の線を取替へたことはないが、漏電の爲にさう家が燒けるものならば、私の家などは疾くに燒けてしまひさうなものだが、幸にして未だ厄に罹からない、然るに大きい立派な建築物が度々漏電に依て燒ける、最も德川公爵の御新邸が燒けた、是等は恐らく非常な注意を以て建築されたものであらうと思ふが、それが建築後間もなく漏電で燒けると云ふやうなことに付ては我々素人ながら如何にも疑なきを得ない、併し實際漏電の爲であると云ふことなら致方ないことであるが、國家經濟の上から云つても、亦其家屋の所有者の立場から云つても、斯の如く度々漏電の爲に多大の損害を受けると云ふことは何としても遺憾なことで之に對する取締が甚だ必要でないかと思ふ、そこで私は之に付て豫々主張してゐることであるが、此頃は大抵の大建築物に對しては火災保險會社が保險契約をして居る、從て其建築物が燒失するやうな場合は、其所有者の損害は勿論であるが、又其火災保險會社の非常な損害であるから、此火災保險會社等と能く協調をして、保險に附し居る家の電氣引込線に對して時々檢査をすると云ふやうなことにすることが大に必要でないかと思ふ、先年私が在職中に、保險業者と電燈會社が提携してさう云ふことをやるやうに、逓信省の電氣關係の當局と相談をして、何とか方法を講じたらどうかと云ふことを勸奬したことがあるが、何れも異存はなく、外國でもさう云ふことは種々やつて居るのであるから、大に必要だと云つて居たのであるけれども、今日まで何等進行を見ない、其爭も私は一日も早く、火災保險會社、電氣會社、家屋の所有者、並に內務省なり逓信省なりの關係當局等の間に於て能く協議をなし、此漏電と云ふことに付き相當の方法を講じ、是が爲に生ずる多大の損害を未然に防ぐやうにすることが必要であらうと思ふ。

次に私の常に感じて居ることは日本の家屋の規格の不統一な點である、同じ八疊の部屋だと云つても家々に依て大小があり、其疊の如きも大小不揃ひで、大掃除の際などに疊を干して、後から入れやうとする事、どうしても元の通りうまく嵌らない、止むを得ず特に疊屋を聘んでやつて貰はなければならぬと云ふ風に、總てが區々になつて居る、單り疊のみならず、戸障子でも皆同樣であるが、是は非常に損なことゝ、私は最近亞米利加などで盛に行はれて居る組立家屋のやうなものが日本にも流行することが必要であらうと思ふ。假にそこまで行かぬにしても、少くとも家屋建築に規格が統一されたならば、家屋の建築も餘程經濟的になり、襖は勿論、戸障子、雨戸の如きも建具屋にて造らなくとも、常に一定のものを用意して置きさへすれば、共通的に何時でも必要に應じて適宜に使用することが出來て、餘計な手間と時間が省けるのみならず、甚だ經濟的でないかと考へる、近頃は都市の到る所で家屋の不足が感へられ、住宅難の聲が聞えるが、單り都會の住宅難ばかりでなく、田舍に於ても今日の所謂百姓家と云ふ如きもので滿足せらるべきでない、世の進歩に伴ひ經濟力の增進に逓つて、地方農民の家屋も漸次改良されて行かなければならぬのであつて、要するに安くて良い家が出來るやうにしなければならぬのである、之に對する一方法としても、建築の或部分に付て出來得る限り規格の統一を圖り、それに依て建築をすやうにして行つたならば、蓋し經濟上非常に有利であることは勿論、又甚だ便利な點も多からと思ふ、固より富豪等にして特に家屋に付て贅澤を盡したいと云ふ所から、種々の工夫を凝すことは更に書のないことであるが、一般の建築を發達させる上から云へば是等のことはとくに研究されて居らなければならぬ問題であつて、今日までそれが行はれて居ないとは寧ろ私の不思議に感ずる所である



法隆寺五重塔と空洞の調査研究

池田谷久吉

(一) 序言……一一
(二) 法隆寺の略沿革……一二
(三) 法隆寺の伽藍配置……一三
(四) 五重塔の構造……一四
A 塔婆に就いて……一四
B 塔婆の沿革……一四
C 塔の構造……一六
D 九輪……一八
E 塔の心柱……一八
F 塑像に就て……一八
(五) 空洞調査の動機……一九
(六) 空洞の構造……一九
(七) 空洞に就いて……二二
(八) 發堀品に就いて……二四
(九) 再建、非再建論……二五
(一〇) 更めて非再建を論ず……二五
═附 錄═
現實と夢幻の境……二六

序言

我が國が常に世界に對して誇り得るものは『奈良法隆寺の堂塔伽藍建築の美である』といふも決して過言ではあるまいと思ふ。

法隆寺は千三百年の古い歴史を持つと共に木造建築の特有性を十二分に發輝せるのみならず、あらゆる自然の暴虐にも屈せずして今日に迄その巍然たる雄姿を美の權化かの如く現存せるは一の奇蹟ともいふべきである。

吾人が法隆寺にその杖を曳くとき感ずるものは建築の韻律美、建築の音樂的表現と一面推古期の時代思想の直感である然して法隆寺は日本建築史の生きた百科辭書であり、人文史の繪巻物であり、我が國唯一の博物館である。

法隆寺の起源は實に今を去る千三百餘年前の古き昔、聖德太子の御手に依つて建てられたものであるがその後六十餘年

の後出火に罹災したために燒失し、以來再建說と是に然らざる非再建との二派に分れ考古學、建築學の兩方面に於て各對立して現今に及んでゐるが今にその論爭がつきない、今迄に發表された法隆寺に關した研究論文の數が九十六を數へられ今は『啓示下』と『啓示上』との二つの方面に大きな渦を卷き起してゐる事は亦斯界に興味ある問題である。

ところが本春早々端なくも法隆寺五重塔心柱下に空洞のあることが發見さるるに至り勃然として日本建築史の構造學的方面に一大改訂を施さるゝに必要なる資料の提供されたる事は誠に慶賀すべき事である。

法隆寺の建築の詳細に就て述べることはこゝには避け五重塔に就ての研究の卑見を述べ併せて空洞に就ての餘の調査の顚末を記せん。

法隆寺の略沿革

法隆寺は奈良縣生駒郡法隆寺村に在り、古來法隆學問寺、斑鳩寺、鵤寺、鵤大寺、伊河留我寺、又は伊河留我本寺、伊河留我大寺、鵤僧寺等と稱されてゐる。

法隆寺の創草年代に就ては未だ詳細に記述されたものとしては見ない樣であるが、同寺金堂に安置されてある藥師像光背の銘によると

池邊大宮治二天下一天皇大身勞賜。時歲次丙午年。召三於大王天皇與二太子一而誓願賜。我大御病太平欲レ坐、故將二造レ寺藥師像作仕奉一詔。然當時崩賜。造不レ堪者。少治田大宮三天下一大王天皇。及東宮宮聖王。大命受賜而。歲次丁卯仕奉。

また『用明紀』二年の條には

夏四月乙巳朔。丙午。御新二嘗於盤余河上一。是曰。天皇得レ病還二入於宮一。拜臣侍焉天皇詔群臣二曰。朕思二欲歸一三寶一。鄕等議之。群臣入レ朝議。物部守屋大連與二中臣勝海連一。違レ詔議曰。何背二國神一敬二他神一也。由來不レ識二若レ斯事一矣。蘇我馬子宿彌大臣曰。可二隨レ詔而奉レ助。誰生二異計一。於レ是皇弟皇子引二豐國法師一入二於內裏一。物部守屋大連邪睨大怒。即ち用明天皇の元年に天皇御病氣の爲め皇后及厩戸皇子に詔して寺塔を造立し佛像を作らしめられたが遂に天皇崩御のために遂げ果さず推古天皇御即位の後十五年『丁卯』その遺願の業を完成されたのである。

現在の法隆寺は東西兩院に分れてゐるが本篇に於て論ずるのは西院のことで東院は最初聖德太子の斑鳩宮のあつたところで入鹿が山背大兄王を殺して直ちに之を燒失し後、天平十一年に行信僧都が建立したものである。

尙『古今目錄抄』によると

推古天皇元年春正月、太子詣二鵤鄕一給立二法隆寺一。とあり『法隆寺緣起流起資財帳』の卷首に

戊午年四月十五日請二上宮聖德法王一。令レ講二法華勝鬘等經一一岐。其儀如レ僧。諸王公主及臣連公民信受無レ不レ嘉也。中略播磨國佐西地五十萬代布施奉。此地者他人口人犯事波不レ在止白而布施奉止白岐是以聖德法王受賜而。此物波私レ可甲物爾波非レ有止爲而、伊阿留我本寺。中宮尼寺。片岡僧寺。此三寺分爲而入賜岐。

此れ等によつて西院の出來上つたのは推古天皇の十五年であることは『古今目錄抄』等に現はれてゐることであるが、着手しかけたのは先づ元年頃かと思はれる。

其の後、貞觀元年僧道詮の請によつて平群郡水田七町四段を寄進して修理の用に當て、同十年には維摩會最勝會を再興してゐる。

後源平兩氏の爭亂を經て甚しく衰頽し文治二年十二月二十三日の法隆寺文書に

『抑當寺者、上宮太子建立、放世觀音聖跡、佛法最初伽藍、日域精舍與基、積二六百ケ歲之星霜一、破壞顚倒無レ據、纔留二所太子拳內御舍利、幷妹子將來妙典安置之精舍一許也』と記されてゐる　即ち鎌倉時代に大修繕を加へられ、後慶長九年、片桐且元の普請奉行となり諸堂を修理し、次いで元祿九年將軍德川綱吉の生母桂昌院、願施主となりて大修繕を加へ今に至つたものであつて創建以來實に千三百二十年の古き歷史を持つてゐる。

法隆寺の伽藍配置

法隆寺は百濟樣七堂伽藍の制になり、伽藍とは梵語の僧伽藍（Samg harama）にして衆園又は衆院とも譯し七堂とは完備せる意味であつて決して七といふ數量的のものではない。

法隆寺の伽藍の現在配置を見るに南大門を入ると中門があり、中門の左右に東西步廊が延びて凸字形をなしたる一廊を作り中門の中には右に金堂、左に五重塔が東西一直線上に立ち其の奥に大講堂がある。

東西步廊は東に鐘樓、西に經藏を連絡して大講堂に連なつてゐる。

併しこの配置は大講堂再建の時に變更されたものであるが最初の配置は大講堂はよほど前方にあり步廊は現在の如く左方に曲屈せずして一直線上に在りて大講堂を含みその後方に上御堂あり、鐘樓と經藏とは何れも步廊外に位置してゐた。

實に法隆寺の伽藍の配置は整然たるものにて殊に飛鳥時代に於ては伽藍の主要なるものは塔婆にて金堂と共に相列び、質と量とに於ては兩者よく釣合を保つてゐる。即ち金堂塔婆は宗教上の信仰の中心であり講堂は學問的であり共に佛堂建築の眞髓を發揮し正面中央に講堂を置きたるは學問寺としての意義を十分に發揮したものである。

今此の時代に草建された四天王寺の配置と比較するに法隆寺は金堂と五重塔とは東西の一直線上に在るに對し四天王寺は南北の一直線上に在り餘程其の趣を異にしてゐるが、塔婆が主要なものとして扱はれてゐることには相違がない。爾後漸次變化し終には塔婆は一の裝飾化された感があり、伽藍の中心から遠ざかりつゝあることも注意すべきである。

法隆寺創建當時の模樣を案ずるに天年十九年の『流起資財帳』によると

敷地一百丈角
南大門、中門其の他僧門三ヶ所
高さ十六丈の五重塔一基
二層の金堂一棟
廻廊一棟

以下食堂、鐘樓、經樓、僧房、温室、大衆院屋、倉庫等幾多の建築物が配置されたことが示されてゐる。

五重塔の構造

(A)塔婆に就て　塔婆の起源は梵語のスツウバ(Stupa)より出で、卒都婆、蘇偸婆、私偸簸、浮圖、抖擻婆等ともいひ、土饅頭の如きものから漸次發達したものである。

玄應音義第七に『寶塔、他盍切、諸經論の中、或は藪斗波に作り或は塔婆に作り或は兜婆と云ひ或は偸婆と言ひ、或は蘇偸婆と言ひ或は脂帝浮都と云ひ亦支提浮圖とも言ふ。皆訛略なり。正しくは窣覩波と言ふ。此を譯して廟と云ひ、或は方墳と云ふ。此は義翻なり。或は大聚と云ひ、或は聚相と言ふ。石等を累ねて高くしたるを以て相と爲なり。案ずるに塔の字は諸書に無き所にして、唯葛洪の字苑に塔は佛堂なりと云へり』といつてゐる。

摩訶僧祇律第三十三には『舍利ある者は塔と名づけ、舍利なきものは枝提と名づく』とあり、即ち佛舍利を藏するところの墳墓である。五重塔は地水火風空の五輪の意を表はし、偶三重、七重九重十三重のものもあるがこれ等は五輪の變形である。

塔婆の目的

1. 墳墓の標として
2. 靈蹟標識の爲め
3. 追福供養のため
4. 佛舍利を藏する爲め

塔婆の種類

A 相輪塔
B 寶塔
C 多寶塔
D 層塔
E 龍塔
F 五輪塔
G 寶篋印塔
H 板塔
I 角塔

我が國に於ける佛塔建築の濫觴は蘇我の馬子が佛舍利を藏する目的のために大野の丘に建立されたのであるがその形狀規模等は詳かでない。

(B)塔婆の沿革　塔の草創は金堂、中門と等しく推古天皇の十五年に完成したものであるが裝階のみは堂塔内塑像と等しく和銅年間の附加のものであつて尺度に於ても前者は高麗尺を使用せるに反し唐尺を用ひてゐる。其の後慶長、元祿兩度の修繕に對する資料を記せん。

今回空洞中より發見されたるものに檜材にて厚四分位長さ八寸六分、巾三寸五分位のものにてその表面に墨指の尻にて墨書せるところによれば。

『一此時天下をおさめたもうに御主ごうはひでよりさまと申ける

一ほうりう寺御こんりう被成候時のねんがうは慶長九年たつのとしとうの内の屋まくすれ申候お津き申候、そうじぬり取斗申しさくにんはさかへの孫一郎と申すものとうりよ内孫兵衛』

裏面に

『此もんせんの新町にやどをとりいづみのさかへのきたのし



法隆寺五重塔

よほねや丁の孫一郎とうりよう仕候内孫兵衛』

之は最も確かな證據として信ずべきものである、此の時の修繕は多年の頽廢にも依るが慶長元年閏七月十二日の伏見の大地震に大破したまゝその後九年を經て修理に及んだものと考へられる。

次に元祿九年に至り再度大修繕を加へられた、今其の記錄に依ると

古今一陽集

『特至寶塔者大樹公母儀從一位 諡號桂昌院殿 懇在再興美麗如新造』

亦日記抄に

二月廿九日

寶塔中門入札開之金銀之員數修覆方記之

三月十五日

寶塔修覆に付中井主水正、仕樣帳裏書願に大工上京に付出狀相添也

三月廿一日

中井氏より寶塔修覆の裏書の□□返事來事

九月十八日

京都代官大柴清左衛門出張工事檢分之際右の言あり

(前略)今日一見仕候處に大分伽藍御再興殊に五重塔結構之御修覆珍重に存候云々

九月二十日

五重塔九輪供養有之學侶堂方皆參西之廻廊南の方に着坐仁王講修行上棟儀式棟梁筑後和泉茂太夫勤之衣冠也仕丁大工瓦師鑄物師等出仕諸參詣群集作法殊勝也南坐裝束にて出仕也儀式相澄以後一献有之御酒頂戴但供物餅御酒樽赤飯等悉く寺中より用意出之棟梁中三人へ金子五百疋大工三人へ鳥目三百疋其外役人共鳥目二十疋三十疋宛遣別に記之

九月二十一日

塔の九輪邊足代の竹木取置申附候

九月二十六日

金堂塔之廻之、犬走石仕置候樣仕樣帳申渡候

十月三日

早朝妙音院へ參五重塔銘金物吟味之上申附打せ候京都新之丞參り候故金堂之柱之龍申附候尤中院相談也

十月四日

五重塔の力士之事新之丞に可申附段相談有之並五重塔仁王門土居葺代銀相渡云々

十二月七日

南都奉行所へ届出たる修繕建築の目錄左之如し

覺

一五重之塔　一御祈禱所　一金堂

一大講堂　一上ノ堂　一食堂細殿

一鐘樓　一經藏　一仁王門

一廻廊　一護摩堂　一御靈屋

一觀學院　一八足門　一四ツ足門

一東院廻り築地　一同所總門

一總社宮　以下略

以上の記錄に依つて大體修繕の模樣を想像するに難くはない。

(C)**塔の構造**　高さ五尺の二重壇上に建ち四面に石の階段あり平面方三間(二〇尺七寸)第五層のみは方二間(一〇尺六

寸）の五層にて中央に心柱あり最上層迄貫通して九輪を受け、四圍に四天柱あり之の周圍に上壇を設け心柱を圍んで塑像がある。

屋根は方形の瓦葺、初層には裳をつけ（三十五尺八寸）上部に九輪を頂いてゐる。

總高一〇五尺二寸、九輪の高さ三十一尺九寸塔身、七十三尺三寸京都東寺五重塔や、奈良興福寺の五重塔に比較して其の規模に於て及ばざるところ遙かであるが形式の自由、構造の妙、美的なることに於ては恐らくは之に越したものはあるまいと思ふ。

九輪と塔身との比に就ては漸次時代を新らしくなるに從つて九輪が短くなり法隆寺五重塔が全高一〇〇に對して三〇に相當し京都八阪塔が二六、京都仁和寺の塔は一九にしか相當しない。

今、塔の各層平面に就て柱間の比を見るに

層數	中の間	脇の間	脇と中との比
第一層	八、八	六、二	〇、七〇
第二層	八、〇	五、三	〇、六七
第三層	七、〇	四、三	〇、六二
第四層	六、二	三、四	〇、五五
第五層	五、三	五、三	一、〇〇

中の間と脇の間との比は實に〇、七にして古代希臘、ローマの殿堂とその範を共にしてゐる。

亦屋根の軒の出に就て考察するに五層と四層、三層と二層との各差小にして三層と四層、一層と二層との各差大なれば屋根の外部は一つの折線を描き微妙な形狀を整へてゐる。

各層共屋根の勾配低く反轉少く、然かも軒の出大なり爲めに非常に安定よく各層の遞減の比が甚だ大なるか故に云ひ知れぬ美しさを示してゐる。

柱　圓柱にて比較的太く大斗下に皿板ありてエンタシスありドリアン範に似てベースなく

組物　三ツ斗を用ひ、雲斗、雲形肘木の上には出し桁ありて尾垂木を受けその上に斗及丸桁を受けてゐる、手法古拙ではあるが

高欄　卍字形の組物を用ひ反りなく各層共三間宛にて之も元祿年間に附加されたものとの説もあるが奈良三月號須彌壇にも同樣の手法のものが用ひられてゐる點から矢張り創建當時のものであることは疑はない。

軒　一と軒にて大膽に出で

屋根　勾配緩く各層隅木下端には風鐸を下げ第五層の四隅には裝飾的支柱を建てゝゐる、これは力學的方面から屋根の垂下を防ぐために設けられたものであるがその形面白く奇妙なものなるが故に或は印度邊のものではなからうかとの一説もあるが創建當時には斯かるものの必要を認めず何れにしても後世に附加されたものである。

裝飾　柱、高欄、垂等の木部は丹塗にて木には黃土を塗り其の他垂間等は胡粉を塗つてゐる。

天井は組入天井にて組格太く間隔割合に狹く格間に

は葵花模様を描いてゐるがこれは德川時代に桂昌院の修繕當時書替へたものである。

窓の蓮子には綠青を塗り、元祿時代の大修理の際、高欄、樋鼻等に金鍍金の金物を用ひてゐる。

(D)**九輪**　塔の最も主要なところにて塔本來の意義は相輪にあると考へられる三重、五重等の建築物の附加は第二義的であり單なる裝飾的のものである。

佛舍利は多く寶珠に納むるか亦は心柱下礎石のところに納められてゐる。

九輪とは露盤より上を稱し其上に覆鉢受華がありその上に九ケの銅輪があり水煙がある、水煙はその形火焰を意味したものであるが火を忌む爲めに水煙と呼び、二ケの珠を頂き上を龍舍、下を龍宝といふ。

法隆寺五重塔水煙は唐草模樣の透明にて銅輪には風鐸を下げ美しいものである。

尤も現在の九輪は元祿の際修理されたものであつて

擦の一部には

錺屋

宇右衞門

大阪住人森

久左衛門

元祿九　作之

子ノ九月吉日

の銘がある。(略沿革の項參照)

(E)**塔の心柱**　是は最も構造上重要なもので在て塔の中部中央にあり第一層より九輪迄貫通し普通四圍の構架と全然獨立して建つてゐる。扨て法隆寺五重塔の最下部の構造に就てはその周圍に和銅年間に作られた塑像があるために未だ且て何人も之を研究するの機なく徒らに推定のまゝに今々に及んでゐた、勿論、これ迄に一般に發表されてゐるものは殆んど筆を揃へて異議なく『中心柱は礎石上に樹立す』と斷定されてゐるが只一人伊東博士の『法隆寺建築論』には『中心柱は通常の如く中央に樹立す、其の末端は地盤に接するや或は遊離するや之を知るべからずと雖も其最初の計畫は之を遊離せしめたること疑ふべからず』と論じられてゐる。

この中央に樹立すの意味は只單に中央に位置するの意に解して可なるべきものにして末端の構造の不可解なる事を述べられてゐる。然し博士の塔婆建築論及同斷面圖に依れば中心柱の下部は凸凹をつけ礎石に凹穴を穿ちて樹立せるものの如き構造に示されあるに依つても構造としては礎石上に樹立することが普通であることが一般に肯定し得るところである。

ところが此の度の調査に依り心柱下は礎石と思ひけるに意外にも空洞であることが分明するに至り、これ迄等閑視されてゐた心柱の第二層第三層に於て周圍の構架に連結してゐることなども今回の空洞と共に大いに注意すべきものとしてこゝに一つの研究資料が提供されるゝと共に今迄の先輩學者諸氏の論說は空文となり終つたのである。

(F)**塑像に就いて**　寺傳には「以天竺唐土我朝三國之土爲佛師塑之」とあるが天平十九年二月『法隆寺緣起流記資財帳』に

『合塔本肆面具擗一具涅槃像土　一具彌勒佛像土

一具維摩結像土　一具分舍利像土

右和銅四年歲次辛亥寺造者』

とあり、即ち

北側――涅槃像（塑像長三尺三寸）
南側――彌勒像（一尺八寸）法菌林、大妙相の二菩薩脊屬二天王等の曼荼羅
東側――維摩像、羅漢像
西側――釋迦分舍利、金棺（一尺八寸）寶塔（高さ一尺二寸五分）羅漢

其の他五十餘の像を安置してゐる。

何れも塑土を以つて須彌山を作り岩窟狀を作り彩色を施し寫生風にして各像共一尺五寸内外の小彫塑にてこれ迄に破損盜難の厄等に遭ひ現在のものは鎌倉時代や德川時代に補修されたものも多くあるが創立以來そのまゝのものもずいぶんある天平時代の彫塑としての好遺物である。

空洞調査の動機

余の調査せしは實に大正十五年二月四日午前九時五十分より午後二時三十分に至る五時間半に渉り行ひたるものにしてこの問題に對する研究の興味を懷きたるは今より十餘年前にして、當時主として伊東、關野博士のを研究論文閱讀するうちこゝに大なる疑問を持つに至れり。

即ち伊東博士は心柱下の構造は不明のものとしてこゝに疑問を投げられたるに對しその他の學者は凡て礎石上に樹立せりと斷定されてゐる、この間愈々懷疑を深くせしめたのである。

この二點間の距離に對して測定の機を期待してゐた矢先、二月二日の某紙上にて『法隆寺心柱下空洞』云々の記事を見てこゝに調査を思ひ立つた、時も折、二月三日は追儺會の會式にて余も亦これに加ふるの絶好機を得、翌二月四日寺僧の案内を乞ひ内陣に這入り其の緒に付いたのである。

空洞の構造

塑像壇下には各邊に二ケ宛の方形の入口あり（約一尺二寸に一尺六寸角）都合八ケ所あり。

何れも當時練土と稱せしものにて作られ辛うじて人間の出入し得る程度のものである。

空洞は上部、即ち心柱下に接する部分は花崗岩及黑耀石の長方形のものにて不等邊三角形をなし其の合端には黑耀石の野石を用ひ穴の一邊約二尺あり。

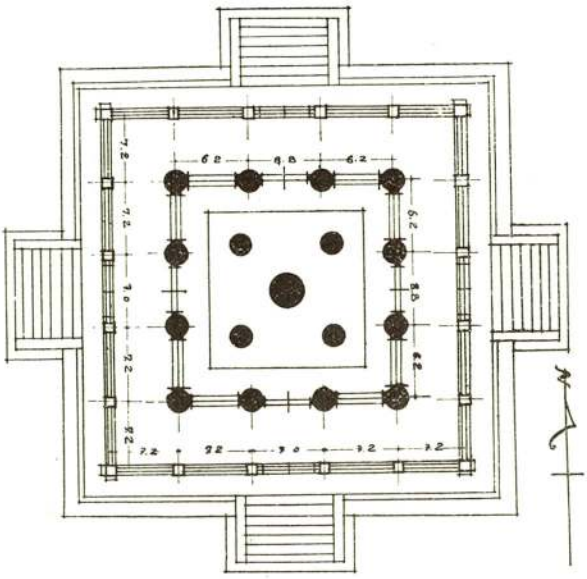
上部より二尺位は約三段積にて何れも不正確なる形にて使用の材料も自然のものを用ひ余り加工せるものとは認め得ずそれより下は約六尺五寸は直徑三尺七寸より三尺八寸の正圓形をなし然も周圍の斷面は齒車形になり垂直に筋彫を施した様に出來てゐる。是れ等は凡て粘土にて搗き固められ極めて硬質に出來てゐる。

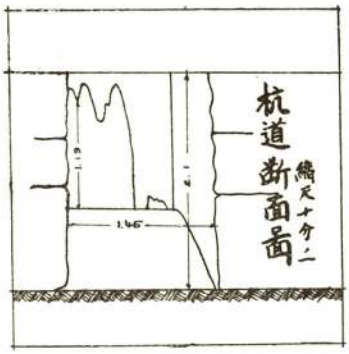
二月四日現在に於ては深さ六尺二寸のところより以下二尺ほどは木屑、心柱の腐蝕屑、塵埃等を以つて深く埋まつてゐた。

其の後、奈良縣當局の調査せしところによると、それより以下一尺七寸位のところに大なる石ありて中央に直徑九寸九分の銅板ありて、粘土を以つて密閉せるとの發表があつた。

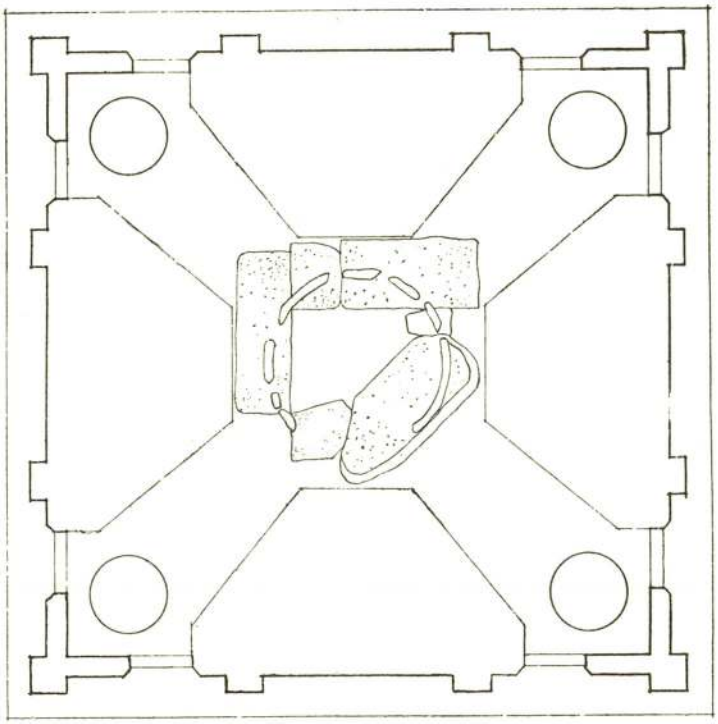
（斷面圖中點線のヶ所）

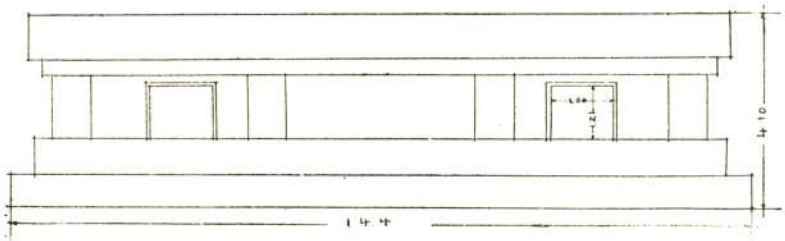
今此の空洞の周壁の構造を考へるに現在用ひらるゝ混凝土工事と同一の施工であつて最初適當の間隔に柱を建てて圓形



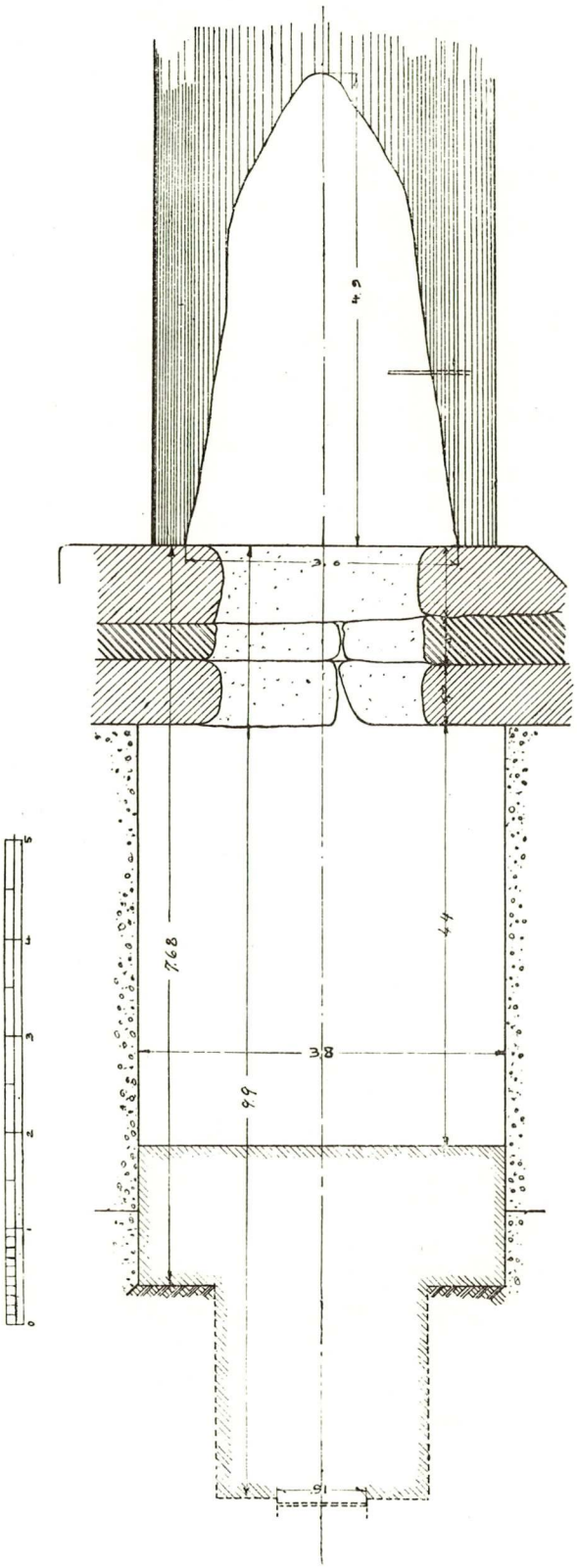


空洞平面及須弥壇正面圖





法隆寺五重塔空洞實測斷面圖



大正十五年二月四日調査

となし内部より板を打ち付け柱と柱との間には支柱を横に架け渡し粘土を充分に練り固めたるものを搗き固めたるものである

千三百年を經たる今日に於て周壁には木理が明瞭に殘存し所々蚯蚓の穴の樣なもののあるのは現今の豆板の如きもので水泡の跡である。

余りに斷定は輕卒であるかも知れないが深く信じて疑はない次第である。

空洞に就て

心柱下部は圖に示せるが如く、高さ四尺九寸位の乳狀形に腐蝕し其下部に於て現存せるもの極めて一少部分にて殘存せる部分と雖も腐蝕してボロ〳〵となり指を以つて押しても毀損する程度のものである。

殊に南側に於て損傷多きは大に故あることにして余は之を濕氣の關係と見るのである。

これと共に塑像壇下周圍の入口も目的は通風の爲めに設けられたものである。

即ち我が國の氣候は夏季濕氣多く時として空中の水分は飽和となり、殊に黑潮の關係より南風甚しく温暖にして、石材硝子、混凝土の如き硬質にして熱導體の物質に對しては水滴をさへ見ることがある。

これが爲に木造建築の柱が礎石に接せる部分に於て最も濕氣を多量に吸集し菌類の生育を助長し終に腐蝕に至れる例がたくさんある。

古來、木造建築の特殊なるものの中には柱の下部に小孔を穿ち又は礎に小溝を堀りたるものなどその例少くはない。

これ等は極めて科學的方面から周到なる注意のもとに行はれたものであつて柱の內部と外部との乾濕交々來る不均等を除外して常に一樣ならしめるために外ならないのである。

この意味から法隆寺五重塔の心柱下部に於ても最初は適當なる一定の小孔を穿ち相當空氣の流通を圖つてゐたが周圍に塑像があるため反つて腐蝕に便なる狀態にあり。終に現在の如く甚しきに至つたのである。また南方の側腐朽の程度著しいのはこの理論からである。

然しながらこゝに一つの問題は何のためにこうした深き空洞を直造つたかと云ふことであるが、我が國の建築史上に於て柱の直下に斯の如き構造の空洞の設けられた例を未だ且て耳にしたことはない。全く此の度こそは白紙のものが提供されたのである。來月には東大から斯界の權威者たる伊東、關野兩博士の來寧の筈につき其の調査を俟つて余の無智の目を開かるべき日を大いに期待してゐるが只見たまゝに就ての卑見を述べ併せて先輩諸氏の鞭韃を得ば光榮である。

此の空洞の構造は何といつても矢張り堂塔の創建當時のものであることは疑ふ餘地はない。何故ならば建築後に於ては心柱下の堀穿は到底不可能なる工事と共に斯く迄にして穿つほどの必要もあるまいと思はれる。

尙後年に於て屈穿したとすれば斯かる難工事を施すは塔全體の改築に等しい大修繕の場合以外には恐くはやれないだらう、同時に大修繕の際のものとすればこれ丈のものに對しては何等かの證據が記錄等の上に現はれてゐそうなものである多くの文獻に於てそれらしいものもないのは矢張り創建當時のものだからである。

塑像の出來たのは和銅年間であつて其の後慶長九年に塑像の修繕記事があるがこの當時も須彌壇上の岩窟及彫刻のみの修理でありて心柱下には誰も注意しなかつたのである。

尤も空洞の發見はこの度であるが、これ迄にも恐らくは千三百年來調査しなかつたことが伺ひ得られる何となれば現在心柱下の腐朽甚しく下部末端の接地部分が極めて僅少なるものを見れば余程古くから腐蝕しかけてゐたことが想像出來るそこでこの心柱が單に空洞の上にのみ重量を集中させてゐたとすれば果して創建以來空洞が大なる重量に對して支へられてゐたかが非常に疑問である。殊に土壇を築き上げたものなれば四天柱の側壓もかなりこれにかゝり、數十度の地震時には余程危險が伴ふべきであつたと思はれる。

また、たとへ今日迄安全であつたとしても一面反對に心柱が現在の程度に迄腐朽してゐたとすればこれ迄傳へられてゐた樣に礎石の上に樹立すといつた樣な簡單なものでは行かなかつたであらう。

若しこれ迄に斯樣な狀況を知悉してゐたとすれば何とかの應急手當の修理は施してゐるに相違あるまい。

余は植物學に對しては何等の豫備智識を持たないが斯くまで腐蝕するには三百年や五百年ではあるまいと思はれる。慶長、元祿再度の修理も要は構架の方面であつて、さのみ根本的にやつたものではないことが主張されるのである。

以上の如く創建當時のものとして出來上つた空洞上に果して心柱は樹立してゐたかが餘程疑はしい、心柱が上部に樹立しないとしてもあの構造から考へても隨分四天柱の側壓に對して耐へて來たことが最早や奇蹟的である。また現在の空洞上部石積の上に心柱が建てられたといふ假定に基けばあれだけ進歩してゐた建築術に於て心柱を受ける礎石の意味としては現在のものは餘りに粗雜であり材料が貧弱であり過ぎる。

恐らくは心柱は塔の構架に連結して懸垂してゐたもので恰も逆振子の如きものであつたことゝ思ふ。

尤もこの時代の塔婆はもとより江戸時代に至る迄のものにはこうした手法は絶對に異例であるが第二層、第三層の構架を見れば合點がゆくことである、勿論現在施せる第三層目に用ひられた方杖などは最近修理に際して用ひたものである。

次に心柱の斷面上部は八角形にして四隅に補强工事としての側柱を用ひてゐる下部も恐らくは八角形であると思ふが腐朽のために不明である。これも最初から用ひられてゐたもので、あれだけのものを中世に於て施工することは餘程困難である。施されたとすれば前述の空洞及心柱下の腐蝕に就て必らず注意し適當なる修繕を施したに違ひない。現に心柱と支柱とを繼ぎ合せのために用ひられた鐵釘は心柱腐朽のために空洞内に落ちてゐたものや又腐朽の一部分に殘存してゐるものもある。釘の長さ約一尺五寸、頭の大きさ約九分角もあつてなか〳〵丈夫なものである。

さればこの空洞は建築學的構造の必須なものではなく目的は他にあるべきである。

即ち空洞最底部の銅板を以つて埋められたところがこの主眼ではあるまいか。

尙此の心柱に就ては去る二月十六日大毎紙上に於て黒板博士の說として『斷言は出來ないが心柱は現狀より長く空洞を通して基底迄達してゐたものと想像されるがそれが蝕損の爲切

り取つて現狀の如くして空洞の上で花崗岩の切石を三角形に組んでその心柱を支へ持たしたものらしい」。と記載されてゐるが恐らくは此の考へ方は全然的外れの事かとも思はれる何故なれば柱の下部の構造に就ては當時已に研究されて居り決して斯様な最も腐り易い構造とする様な事はあるまい。また後年腐蝕のために切斷するとしても樹立せるものを横斷して切石を積み込みなどといふ様な事は到底實際上の施工として不可能なことである

塔婆に就ては已に述べた通り佛舍利を藏することが主要なる目的とすれば塔中いづれかにこれを納めてゐなければならぬ。普通は九輪の寶珠に納むるか亦は心柱下に藏するか、何れかになつてゐる。即ちこの塔は心柱下のこの最底部の銅板内に舍利六粒を埋藏されてゐるものと考へられるのであるが未だその蓋を開かないのでその證據とてはないが先づ間違は無いことゝ思はれる。

然し舍利を埋藏するにしても斯くも深きところに然かも大げさな構造のものに何故に作られたかといふ疑問があるがこれは當時聖德太子を初め高僧連が兎も角地下に埋沒せば凡てに安全であるといふ様な考へ方から來たものと考へて差支がない。



發堀品に就て

空洞内堆高い塵の中には割合新らしい木屑がたくさん入つてゐたがこれ等は元祿年間修理の際誤つて投入されたものである。次に薄い書き塔婆これも餘り古いものではない。扇の軸、經軸等もあつたがこれ等と同一のものは心柱と塑像壇とのスペースにたくさん介在してゐる。

時代は鎌倉前後位のものである。別段これといつて貴重なものとては現在までには發見されなかつたが只一つ推古時代の唐草瓦の破片が二枚塵の中約一尺五寸位のところから出て來た、意外にも二つの破片を繼ぎ合すと一ケのものである。(上圖參照)その後亦一枚發堀された様である。これ等の瓦は忍冬模様の入つた完全な飛鳥式のものである。

その他塑像佛の頭とか手とかいつたものも發掘されてゐる。これ等は心柱の腐朽せる場所から何かの動機で落入したのである

最彼に銅板が出た様であるかこれこそ一つの謎を解くべき鍵ではあるが學問と

宗教とのデレンマに於て或はこのまゝ祕められるゝかも知れぬそうである、何とかこの銅板によつて若し法隆寺問題が解決することが出來れば我が學界の爲め慶賀すべきことである。

然し金堂の伏藏が今に開けられない樣にこの銅板もまたこの轍を踏むかも知れない。

再建、非再建論

我が學界の大問題は何といつてもこの法隆寺論である、爭ふこと約三十年、今も互に論爭を鋭く續けてゐる。

余は淺學卑才と雖も非再建を論ずるもの〻一人であるが、今こゝに已往に於ける兩者の顚末と併て卑見を述べる。

再建論者は

「日本書紀」天智天皇の九年の條に「夏四月壬申、夜半之後災二法隆寺一一屋無レ餘」の記事を論據として後名古屋眞福寺所藏「七大寺年表」に。

「和銅元年戊申依詔造大宰府觀世音又作法隆寺」伊呂波字類抄卷二「法隆寺七大寺内和銅年中造られ寺緣起云々」の記事及「資財帳」の「合塔本肆面……和銅四年……寺造者」との記錄によつて今より約四十年前川田剛氏を切め小杉、黒川の兩博士も之に加はり提唱してゐたが、明治三十八年に至り、建築雜誌に於て關野博士は「法隆寺非再建論」を掲げ大要左の反證を擧げられてゐる。

一、法輪寺、法起寺等と共に構造樣式を比較するに決して新しいものではなく創建の儘既存せり。

二、金堂内、鳥佛師作、藥師、釋迦三尊の金銅佛が現存してゐる。

三、金堂、天井の推古時代の天蓋が現存してゐる。

四、金堂、五重塔共礎石は花崗石を用ひ、火氣には弱いが火にあつた形跡がない。

五、金堂内壁畵は白鳳期のものであるがこれは二重層になつてゐて下には古いものが殘つてゐる。

六、金堂、五重塔共附加されてゐる裳階の樣式は白鳳期のものにてその樣式に於て堂塔はより以上古いものである。

七、五重塔内の塑像は和銅年間に寺にて造られたものであるが堂塔も此の時代のものなれば勅願の寺に於て塑像だけ寺で作る理由がない。

八、尺度の問題である。これは最も實地研究の上にて建築に使用したる尺度が大化以後の唐尺にあらずして大化以前の高麗尺なることである。

以上は極めて概略であるがこの問題には餘りに有名であり周知の事であるから詳述を略した。

更めて非再建を論ず

世間の人達は餘りに當然すぎることを無理に理屈を付けて論爭を續けてゐるものであるが法隆寺問題もその一つであると思ふ。別段今更筆を新にする必要もなく非再建のものではあるが昔から論より證據といふ俗諺があるが今亦此の例に洩れず此の度の五重塔の空洞發見に依つて吾々は非再建に關する新しき確證を得たことをこゝに發表することを光榮とするものである。

一、若し天智記の記事の如く燒失したものとすれば今回發

見の推古式唐草瓦（挿圖參照）が斯かる空洞内にあるべき筈ながい、これは先年金堂修繕の際天井裏より發見のものと同一のものであつて純然たる推古式のものである。

或は再建論者は新らしい時代に古い時代のものゝ出る事は當然の事であると云ふかも知れないが當時多少共時代を異にするときは凡て藝術上の形式を異にするものであるから必らず和銅時代には和銅時代のものを作ることは自明の理である

二、空洞内の亂石積の中に花崗岩を使つてゐるが水に強く火に弱き花崗石を一度火災に遭ひながらその非を知りて再び使用するの愚は重ねないだらうと思はれる。

三、亦若し燒けたとすればあれだけ深い空洞内には燒失した何物かの痕跡が發見されそうなものであるがそれらしいものとしては一物も發見されないことに供しても再建のものでないことは確かである。

また此の度防火栓の布設工事に就て寺院境域内の所々を堀り返してゐるが五重塔や金堂の附近からは飛鳥時代の瓦等の燒失したものが發見されないことも一つの絶對な證據と見ることが出來る。

一部の人達は一つの敷地に於て火災に罹つた際後日之に再築する場合には燒土をすつかり取り除いて終ふものであるとの立場から、燒土の層は何等研究に就ては無價値であると論じてゐるが、現に講堂の前面及廻廊が北隅に於て北折する邊には地層に燒層が歴然とあるが金堂、塔婆の附近にはそれらしいものが見當らない。これによつても且て火災に罹つたことのない確證である。

何といつても非再建は事實であることを斷言しておく

【附錄】 現實と夢幻の境

（日記帳より）

入口は塑像須彌壇四周の小さい穴であつて各邊に二個宛、即ち八個あるが悉く小さいものであつて、決して人間などの自由に出入出來るものではないのみならず人並に肥大な體軀の持主であるだけにシャツとズボン一枚とで只懷中電燈をたよりに東南隅から須彌壇下をくゞつた。

尤も此の入口は古來存在はしてゐたのであるが現今迄誰も之に注意も向けないばかりでなく何人もこのマンホールの入となつたものはなかつたのである。

丁度體が全部這入つて終つたと思ふ頃（約奥行八尺）ふと頭を上げて眞向を見ると心柱の下部が腐朽して側面に人間の頭だけしか入らぬ位の穴が見えた、この刹那、狂喜せんばかりの興奮を覺えた。

とかけの這ふ樣に一と足、二と足と入口の側にある四天柱に足をかけて踏み張ると漸くに心柱に手が屆いた。

そこからすぐに洩れる電燈の光りは心柱内を照してゐる。想像以外の不思議な事實は一再ならず頭の中へドシン〳〵と大なるショックを與へずにはおかない。

心柱下は上部三角の洞穴になつてゐて深さ約六尺位と覺ゆる圓筒である。現實を超越した世界、幻想の世界は我々の眼前に横つてゐる。

うす氣味惡いむしろ凄慘さを持つ靜寂の内に、或る良心のひらめきは鋭敏に火急にこの心柱下に突入することを促したのであつた、だが、どうしても體の自由が利かないのみか入口が小さく腐朽した部分が針の樣に尖つて垂れ下つてゐるの

で思ふ様には行かない、然しこのまゝ斷念することは何としても殘念であり忍び難いことである。

こうしてゐるうちにふと心柱の上部を見たとき高さ約四尺八九寸の乳狀に腐朽した中央に然かも入口の眞上部に長さ五六寸、太さ四五分角の釘の頭が目に映つた。

これだ!!と思つて右手で釘を握つて少し腰の方をゆすぶつてゐるとふとした動機から腰の全體が入つたのである。

全く機械體操の樣である。

締めたとばかり雀躍したが、此時卑怯の樣だが若し出るときに困つてはと思ひ返して二度三度出入の稽古をやつてゐたが少し考へてやつとうまく自由に出入が出來るコツを覺えた

漸く心柱下に入ることが出來たので空洞の緣石の上に坐つたまゝ穴の底を見つめてゐたがいつしか兩手は緣石を强く支へて體は穴の中へ宙にぶら下つてゐたそして二三度足を振つてゐた瞬間、千三百年來祕められてゐた謎の如き不開の大地に足を踏み入れたのであつた。

なまぬるい地熱のうるほひと黃褐色の塵挨との中に己れの姿を見出したとき靜かに千三百年以前の靈との交通を感じられた。

折柄今一つ南西の穴から首だけを出してゐた佐藤君は實にけゝん相な面持ちで覗き込んでゐた、ふとひとみとひとみがピツタリと視線が出會つた時二人は何等の言葉も發し得ず危惧と滿足との感情が交錯して無言でゐたが直ちにアツと驚嘆の辭に代つた。

そして直ちに曲尺とスケッチブックとが用意されて法隆寺の森山師と佐藤君と二人共引き續いて同じ樣な方法のもとに空洞の人となつた。

三人は互に非常なる感激と希望とを以つてなるだけ現狀を維持する範圍に於て調査にとりかゝつた。(中略)

調査を終へて日光の下に出たとき、丸で夢から覺めた樣な氣持がした、自然の色彩はすつかり異樣に映つた。

多くの友達を初め周圍の人々から到底不可能とされてゐた調査を可能ならしめたことの讃辭を浴びせかけられたとき一種のプライドと愉悅に滿たされた。

或る友達は云つた、君には惡瓦斯だとか亦は毒虫などの危險さとか、その深さ等に就ての豫測と今一つは安全だといふ自信を持つてやつた?と聞かれて初めて理智の己れに遷つただが凡ての神祕の扉を開くには一切の科學と理智は現實に於てこそ考慮の餘地もあるがこの場合には何等の權威もなければ、また感情の國への旅立には不必要である。

また、若し理性にのみ覺醒してゐたとすれば恐くは誰しもこうしたところへは絶對に入ることが出來なかつたであらうと信じ得られる。

或は自分はこうした冒險を敢てしなかつたならばこの問題はまたこのまゝに永久に謎として葬られてゐたかも知れぬ。

何はともあれ、自分のやつたことによつてたとへ僅少とは云へ學界に研究資料が提供されたことは嬉しいことである。

(二月四日の稿)

參考文獻

法隆寺建築論　伊東博士

日本佛塔建築の沿革　同

法隆寺建築裝飾論　塚本博士

佛教美術概論　小野　玄妙
元祿年間に於ける法隆寺伽藍修繕の眞相　伊東　博士
大和法隆寺再造說につきての疑　平子　鐸嶺
法隆寺　高山林次郎
法隆寺草創考　平子　鐸嶺
法隆寺金堂塔婆及中門非再建論　關野　博士
法隆寺伽藍主要建造物の非再建に關する記錄的論證　平子　鐸嶺
法隆寺金堂復舊圖說明　天沼　博士
害菌と古建築物に於ける柱の下部の構造　川村　博士

淺學卑才をも不顧こゝに貴重なる誌面を冒瀆して潛越なから愚見を以つて法隆寺五重塔の如き大問題に對して一文を草し先輩諸卿に捧げた非禮を深謝すると共に鈍頭の及ばざるところ御指敎の勞を垂れ給はん事を俟つて筆を擱く。

（大正十五年三月二十四日）

咲く花はうつろふ時あり

あしびきの山菅の根し長くはありけり

『住』の？……（の三）

鶴見左吉雄

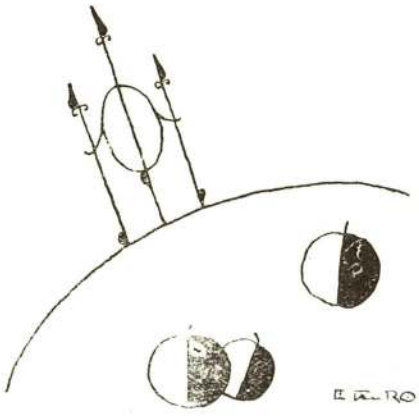
先年私が山林局長をして居た當時、東京の建築學會などに對して是等の問題に付て考慮されんことを希望したこともあるが、何れも其必要は認められて居たやうであるけれども、今日も猶ほ依然として何等是が發現を見ない、是等も建築界の專門家が能く〳〵考慮研究されて、何とか適當な方策を立てられることが現下の必要事であり、聽て非常な公益を齎すべき一問題でなからうかと考へる

又近頃は段々と高大な建築物が殖えて來たが、それ等の建物に於てエレベーターの數が甚だ少いやうに感ぜられる、尤もエレベーターを本位にせず、澤山の階段を造ると云ふならば、格別であるけれども、階數も多く、廣さも大きい大建築で、割合に階段の數も少ければ、エレベーターの數も少い、是が例を擧げやうと思へば、幾らもあるが、それは其建物に對する批難にならから、之を避けるけれども、一般にエレベーターが少い無論さう云ふ建築をされる場合には、其階數面積に比して幾何の階段があり、エレベーターがあれば可いかと云ふことは能く調查されて設計されて居ることゝは思ふがどうも唯平常のことばかりを考へ或は徒に地震の少い亞米利加あたりの計算に基いてやつたものでないかと疑はれる節が多い、私は日本は特に地震の多い國であるから寧ろ過多であると思はれる位にエレベーターがなくちやならぬのでないかと思ふ、エレベーターは平日の運用上相當金の要るものであるから、經濟上に付ても考慮しなくちやならぬのは勿論であるが、又一面大きな建築物を造つて、或は貸事務所にするとか、多くの人を集めると云ふやうな所では、責任上どうしても其位の用意はして置かなければならぬのではないか私は近頃出來る大建築物に於て、其處に動いて居るエレベーターを見る毎に、如何にもまだ物足らぬやうな感じがしてならない、是が私の考へ違ひであれば幸であるが建築家諸君の御一考を煩はしたいと思ふ。

其他日本ではまだ西洋家具が一般の家具家財に比して値段が高い椅子卓子の如きものは寧ろ贅澤品のやうに考へられて居るが、日本の家屋も段々進歩して、殊に西洋建築が盛に行はれんとする今日、木材も豐富な我國に於てはもう少し廉價で良い家具が出來なくちやならぬのではないかと思ふ、私も外國で箪笥や種々の家具を買つたこともあるが、それは贅澤なものになれば、隨分高いのは勿論であるけれども、普通一般の家庭用の家具に至ては、餘程安値に手に入いる、是は家具業者の一考を要することであると共に、建築界に於ても研究されなくちやならぬことではなからうか又或は建築に要する金具、ドアのハンドルであるとか、蝶番であるとか、鍵とゝふやうなものが日本製のものは遺憾ながらまた甚だ良くない、國産奬勵が大に叫ばれて居る今日であるから、それ等のものも段々盛に造られて行くだらうと思ふが、我々は努めて內國產品を使ふことに自分もして居るし、他にも奬めて居るけれども、今猶建築物に用ひられる、さう云ふ部分品が甚だ不完全である。箪笥や卓子其他の家具に於ける鍵の如きものも日本製のものは殆ど一定して居つて、合鍵を用ひれば、直ぐ開く、甚しきに至ては、火箸一本あれば、開けられると云ふ風で、甚だ不安心なものが多い、是等は單り建築方面ばかりの問題でもなく、日本の家屋には錠り鍵を掛ける部屋と云ふやうなものもないけれども、西洋建築には殊更に其改善の必要を感ぜざるを得ない、殊に家具の金具がどう云ふものか非常に不完全で、而も同じものが少い、私は自分の事務所に用ひる戶棚を必要に應じて漸次注文をしたことがあるが、數回注文をする度に、從來在るものを見せて、それと同じ戶棚を造らせるのに、曾て一遍も同じものが出來たことがない、金具も違ふしデコレーションも皆違ふ、其構造の工合や金具を付けてある位置の如きも決して見本通りに出來ない規格の統一されて居らぬことは驚くべきものである、私は斯う云ふ工業に付ても相當整備したものが我國に出現することを希望せざるを得ない、恐らく建築界に於てもこれに對する要望は最も切なるものがあらう。

斯んな細かいことを擧げて來れば幾らでもあるだらうと思ふ、恐らく實際の局に當つて居られる建築專門の方々の間には我々が感じて居る以上にそれ等の點に付て不滿を感じ改善を希望して居られることであらうと想像するが、各方面でも步調を一にして是が發達に努力して行かなくちやならぬと考へる、即ち建築の發達を圖らんとすれば、どうしてもそれに要する材料の工業の發達を期して行かなければならぬし、衞生其他種々の點を考慮して、共に〳〵發達して行くのでなければ、跛つこの發達になるのであるから、一致の努力と發達を要することだらうと思ふ。

以上擧げ來つたことは豫めお斷りして置いた通り、甚だ平凡なことで、自分の氣の付いた儘を唯倉卒に述べたのに過ぎないのであつて、專門家の眼から見れば、甚だ幼稚なことを言つて居るとお感じになるであらうと思ふけれども、素人の一人が斯う云う觀察をして居ると云ふことを知つて戴いて、若し取るべき所があつたならば、一步なりとも、其方に進んで行くやうに努力して貰つたならば、獨り私のみの幸ではないと信ずる。



家白蟻の豫防撲滅法に就いて

―神社佛閣名勝名木の保存は急務

城島徳市

氏は多年白蟻に就いての研鑽深く、現に、城島白蟻研究所々長として蟻害の防除に研究を進められつゝあり、今我誌のため本篇を寄せられて、その研究の一端を發表せらる。蓋し、建築に資する處鮮なからざるを信ず、敢て薦むる所以也―編者

緒言

白蟻の被害は何人も此を知る、知りて而も其の被害益々擴大し激甚を極めつゝあるは何ぞや

（一）白蟻の性狀として絶對に日光及通氣を嫌忌し地中或は物質中にて生活し人目に觸れざること

（二）豫防及撲滅に關する科學的並に實際的研究が共に至難にして世人は其の何れも不可能事として只姑息偸安の處置に甘んじ居たること

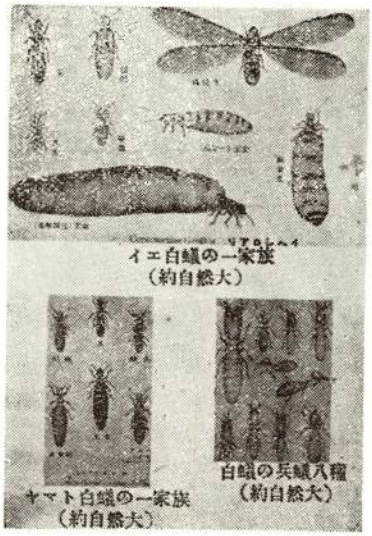
右の二點を主なる原因とする、

私が白蟻に對して注意の眼を拂ふ樣になつたのは顧れば十餘年前長崎在遊中の事である。ふとした事から研究の歩を進めて居る中に研究の國家的價値の甚だ大である事を知つたのである。私の興味は募り努力は倍加してあらゆる文献を漁り或は實際的の體驗を重ね學術的の研鑽を進めたのである。斯くて今日に於ては之れを吾人の敵として豫防、撲滅を期すること可能なりと斷言するに足る幾多實驗的データを確持するに至つたのである。

然しながら私の此の信念は一般の諒解を得る事によつて國家的貢献の時代が來るのである。白蟻の被害を蒙むり又は此れが脅威を感じて居る人々は、白蟻に對する知識を持つ事が先決の問題である。

扨て白蟻は何故に恐ろしく何故に豫防撲滅しなければならぬか云ふ迄もなく人類生活の要素たる衣食住就中住居を脅威するからである。茲に更めて述べる迄もなく、世界に於ける

木材の消費量は人類文化の進歩と共に年々增加して居るのである然も木材は人類生活に必要缺く可らざる貴重なる材料にして土木、建築、電機、鐵道、船舶、鑛山等より燃料として勿論製紙及乾餾工業等に必要缺く可らざるものである。されば吾人は一面此の貴重なる木材の利用法を攻究すると同時に亦其消費量を輕減し以て人文の發達に貢獻しなければならぬ、之が爲めには積極的に植林を行ふと同時に、亦木材の保存年限を延長せしむる方法の考究達成に勉める事の必要が起つて來るのである、果して然りとして其の植林を行ひ、又は保存年限を延長する方途如何、私は茲に植林の事を全然抜きにし保存年限延長についてのみ語るのであるが、扨て其の保存年限を長むること、此れは一に木材敗壞の原因を取り除くにあるのは云ふ迄もない。茲に木材敗壞の原因を案んずるに物理的及化學的現象によるのである。



物理的敗壞因としては

（一）磨損によること

（二）動物の蝕害によること

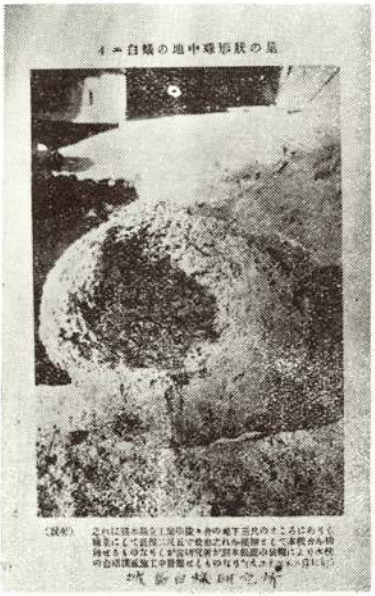
化學的敗壞因としては

（一）火災によること

（二）風化及腐敗作用によること

歐米に於ては夙に此等敗壞の豫防研究に留意し既に經濟的事業として着々成果を收めつゝあれど我國に於ては未だ甚だ等閑に附せられて居るのである。專門家の調査したところによれば、今や本邦の木材は年々伐採量を增加し國内の需要を充たすに足らず、年々三割強の外材輸入により漸く其の不足を補ひつゝある現狀である。先年農務省獨立の論據の一として此の外材輸入の一例を擧げられた位である。

今試みに本邦に於ける年々木材敗壞量を見るに磨損による量は僅少なるも動物の蝕害による量は年間約三百萬石位に達し、此他立木の蝕害量を加算せば優に五百萬石に達すべし、而も其の過半數は實に白蟻の蝕害によると云ふ事實を知るに至つては何人と雖も愕然たらざるを得ないであらう。白蟻被害の豫防又は撲滅の必要は此の一事を以て甚だ痛切なる事が判るのである、まして況んや白蟻被害狀況の調査研究を進むるにつれ其の被害範圍も殆んど本邦全土の過半に亘り其の蝕害狀況は實に凄慘を極め、單に建築物のみならず鐵石以外殆んど其の害を被らざるものなく實に人類文化の發展を阻害する一大々敵たること明なるに至つては吾



人が國家的重大問題となし當面喫緊の解決を期す可きものたることを力說する所以亦實に茲にあるのである。

白蟻の蝕害狀況

(1) 建築物の被害

白蟻が建築物に及ぼす害は頗る大であつて殊に熱帶に於ては人類文化を阻害する一大原因をなして居る。溫帶寒帶に至るに從つて漸次其の害は輕減するのである、前述の如く白蟻の被害は實に鐵石以外は殆んど其の蝕害と有害なる分泌物の害を被らないものはない。其の被害の狀況は外見甚だ不明瞭であつて既に容易に其の實狀を認め得るに至れば最早や慘害を極め居るものであるから甚だしく危險なる狀態にありと云はなければならぬ。勿論加害の程度は種類により一樣でないけれ共も一因に白蟻の種類は世界に六百三十種あり、本邦産種も二十種に近い、就中被害激甚を極め屋根墜落の危險を釀生するものは數十年前印度より移住せし家白蟻と稱するものであつて、既に近畿地方にも分布擴大し漸次不測の災害を構成しつゝあることを記憶せざる可らず。此れ余が本稿を草し特に識者の一考を煩はさんと欲する所以である。その主食物が木材であるが爲め最も慘害を被むるのは常に木造建築物であつて市街にあると野外にあると山上にあるとを論じない、而して其の蝕害の經路は主として土壤に近接せる柱、土臺等の下部周邊より心部に蝕入り漸次蠶食して僅に周邊の材のみ殘し內部は悉く空洞となすのである、此れ畢竟前述の如く白蟻が光線と外敵を避くる爲め必ず外面を薄く保存するものにして一見被害明瞭でないのも此の爲めである、されば不測の災害を被ることも少くないのである。彼の高壓電柱倒壞の如きは人命に關する危險を釀生し又學校、病院、工場、官衙、宮殿、神社、佛閣等の被害は勿論其の蝕害激甚なれば屋根墜落の不祥事を見るのである、晩近學校等の腐朽倒壞などゝ新聞で散見するもの其の眞因を究むれば殆んど白蟻の蝕害に基因せるものにして實に寒心に堪えざる次第なり。此れ全く被害の狀況が外見不明瞭に因る爲めであつて白蟻被







害の有無調査又撲滅の緊急を要する所以である。本邦に於ても本土、四國九州、以南の學校、病院、工場、神社、佛閣、兵營城塞等にして被害を被らざるものは稀である、殊に熱帶に於ては甚しく甞て印度カルカッタ宮殿は破壞せられ歐洲に於ては『ウイーン宮殿の溫室も侵蝕せられ、北米ワシントンの國立博物館も蝕害せられ、南米に於ては被害激甚にして五十年以上圖書の保存は至難なりと云ふ』又『アフリカ』に於ては一夜アラビヤ人が白蟻巢上に眠り翌朝眼覺めし時に裸體なりしと云ふ珍談さえあり、又管司中の衣服が一夜中に全部粉碎せられたる例もあり然かも其の蝕害は單に木材のみならず紙類、殼類、革類、綿糸、ゴム類にも及ぶのである。白蟻一度倉庫を襲えば其内に堆積せる綿糸、米麥等を蝕害し桶類を蝕害しては其内容物を空くし又船舶其他海底電線の被覆物をも蝕害するものである。

(ロ) 野外植物の被害

白蟻の被害は又野外の立木にも多く近年特に顯著なるを見るのである、此れ家白蟻の襲來によるが爲めにして松、楠、銀杏、柳、梅、櫻、杉、桐、檜、ポプラ等の大木の被害を到る所に目擊するところである。茲に二三の實例を引用すれば近畿地方に於ても南は和歌山縣下田邊扇ヶ濱の松林、和歌浦一帶の松並木は勿論、大阪府下の泉南、泉北郡一帶も被害多く就中濱田公園内の大松は悉く家白蟻の慘害を被むり其他阪神沿線、奈良、京都地方に於ても神社佛閣の境内の古木、名木は概ね其の侵害を被むり既に枯死せるもの多きを遺憾とするものである、又白蟻の被害は甘藷蔬菜等農作物にも及ぶものにして和歌山縣下に其實例を見る、然れども立木蝕害の白蟻は内地産としては只家白蟻一種あるのみにして他は老衰木枯木、腐木等の蝕害にして敢て怖るゝに足らざるものなり。

白蟻の豫防撲滅法

(イ) 白蟻豫防撲滅の基礎觀念

白蟻は建設物を侵す所の病原體であつて人體を侵す病原菌と何等異なつた所はない而も白蟻は非常なる繁殖力（一女王の一年間の産卵數は百萬乃至千萬個に達するものである）を有し主として建設物若しくは立木を蝕害し進んで隣家又は附近の樹木に傳播し或は群衆となつて他に移住すること恰も人體を侵す黴菌が他に傳染するのと全然同樣である。

故に白蟻が蝕害して居ると云ふ事が解つたならば直に之を撲滅しなければならぬことは恰も人體の病原を除く爲めに服藥し又は手術するのと少しも變りはない。

然らば病氣にかゝらぬ樣に即ち白蟻の侵入を豫防する事は出來ぬのであるかと云ふに勿論人體の病氣豫防が出來る樣に白蟻の豫防も完全に出來るのである、豫防して居なければ何時此れに侵されるか知れないこと人體と少しも異なつた事はない。

惟ふに木材壞滅を防止する觀念が今少しく發達したならば此れが原因の一つたる白蟻に對する世人の態度は今少しく變らなければならぬ、侵害を受けた家屋又は立木の持主は其の白蟻を撲滅して自ら害を免るゝと同時に他に被害を傳染させない樣に努めなければならぬのであつて、彼の傳染病に對する觀念と同一であるべき筈である。故に世の中が進み木材を

一層貴重視するに至らんか白蟻に對しては徹底的に法の威力を以て防禦を強制す可き性質のものであると考へるのである即ち被害者は白蟻の撲滅並に傳播の防止をなし被害なきものは豫め防禦の道を講じ置く事人體の傳染病に對する豫防注射の如く官憲の力を以てしても強要す可き性質のものであると思ふ。

（ロ）誤れる在來の驅除觀念

驅除なる文字に對する觀念は現在ついて居るものを追ひ除けると云ふ意味であるけれども現今は廣義に解釋されて白蟻を死滅させ或は追い除けて被害を除くと云ふ意味に用ひられ尙且つ寄せつけぬ豫防の意味迄包含されて居る。勿論在來白蟻驅除に用ひた藥劑は白蟻が觸れて死する性質のものであるから白蟻に注加すれば死滅する、單に此れだけの効能ならば何等價値はないのであるが從來の驅除劑は何れも白蟻の嫌忌する性質のものである。即ち此の性質を利用して此れを建物に塗布注入浸潤させて置いて白蟻を寄せ付けまいと云ふのである。それ故にその施行法が當を得れば白蟻を追い除け寄せつけない目的に適つて居るのであつて此の驅除劑を用いた場合建物自體から云へば目的を達した事になるのである、何故なればその白蟻を殺す事は出來なかつたけれども被害よりは免れたからである。併しながら此等驅除劑を使用して奏効した實例は稀である此れは白蟻の蝕害が巧妙であり驅除の方法が至難である事に基因するのである。

從來の白蟻防除の觀念は此の驅除の意味であつて白蟻を目付けたら流しかけて殺し又は被害を未然に防ぐ爲め即ち白蟻を寄せつけない目的の爲め白蟻の嫌忌する藥劑を塗布浸潤する爲めに造られた藥劑で即ち總てが接觸殺虫劑となつて居る而してその目的は或る程度迄は達して居るのである。必しながら斯くの如き事が國家的見地から見て幾何の價値あるであらうか白蟻が建物又は立木を侵すのは自己の食物を得んが爲めである故に一の建物に完全な驅除劑が塗布浸潤されて居ても其の建物を避けて他の侵入に安全なる建物を撰ぶのである白蟻には此れを鑑別する本能がある故に假令一の建物は被害から免れても他の建物が其の代りとして侵害を被るのである從つて此の被害から免れようと思へば總ての建物が此の惡臭甚しき驅除劑を充分に塗布浸潤せしめて置かねばならぬ事となる。斯くの如き事が實際問題として行はれるものであらうか、費用と勞力並に住宅的見地から見て何人も容易に不可能を斷言するであらう。而も費用と勞力を投ずるも僅かなる年月により再び白蟻の侵入を見るに至る事は白蟻が食物を得んとする白蟻生存の欲求として蓋し當然であらう（余は各地の建物で此等驅除劑塗布後一、二ヶ月で其の塗布した場所から白蟻が侵入して居るのを見受けた實例は稀ならずである）

白蟻を追い除け又は寄せ付けないと云ふ驅除劑の完成に努力する事は最も賢明な事であるけれども已に白蟻の分布繁殖が廣汎激甚なる今日に至つては最早や從來の驅除劑によりては其の目的を達し得ない、それ故に國家的に白蟻の被害から免れると云ふ上から見れば極めて不徹底な姑息な努力である而も從來白蟻防除の觀念は何れも此の不徹底姑息な驅除の觀念の下に研究せられたものであることは白蟻防除と云ふ事についての根本的觀念を誤つた白蟻の分布繁殖の狹少稀薄な過

去の時代觀念であるが故に是をしも有意義ならしめんと思はば尙研究に一歩を進めねば現狀では効果ないのである。されば完全に徹底的に白蟻の被害を防除せんと欲せば白蟻を追い除け拂ひ除け、若しも近寄つたら流しかけて殺すと云ふ從來の方法では結局不徹底であつて追い除け又は拂ひ除けるよりも寄せ集め誘ひ寄せて而して鏖殺すると云ふ所謂驅除又は撲滅の觀念に出立するに非ずんば國家的に白蟻の被害から免れることは殆んど絶體に不可能である。

以上の記述により白蟻の被害から免れんとすれば一般の被害者は元より之れが施工者又は研究者が先づ從來の白蟻驅除の觀念の誤れることを自覺し改めて撲滅驅除の觀念に出發することの必要を痛切に感ぜざるを得ない、余はその觀念に立脚して白蟻に好餌を提供し、之をその生活組織に合致せしめてその群團を蟻擧に滅殺する中毒殺虫劑の發明に成功したのである。即ち從來の白蟻の嫌忌するものを以て防禦或は逐ひ除ける不徹底の方法でなく白蟻に好餌を與へて誘集飽食せしめて一擧に之を鏖殺する方法である。

（八）余が創案せる白蟻集殺法

在來の白蟻豫防及驅除が徹底を缺き一時の氣安めに過ぎない事は前述の通りである。而して其の原因を尋ぬれば白蟻に關する知識と施工上の技量並に知識を缺き　藥劑其の當を得ないと云ふ事に歸するのである。私は白蟻を家屋又は立木から驅除する事を以て恰も人體の病氣を治癒する醫師の役目と同樣に心得て居るのである、即ち人體の病氣はその病源を極め投藥又は手術により其の病源を取り除くのであつて病源を極めて居なければ投藥も手術も出來ない等である故に完全に徹底的に治病の目的を達せんと欲すれば學識あり經驗ある醫師により其の適確なる診斷と優秀なる技能と合理的なる藥劑とに待たなければならぬのである。私の白蟻撲滅の根本の觀念は此れと同一である、從つて白蟻の實體（種類）を究明し此れに適當なる藥劑を發見し且つ其の藥劑の投藥が適確に行はれる所謂技術について多年の研鑽を重ねた次第である、而して既に確固たる自信を得て實行し完全に撲滅の目的を達し同時に將來の豫防を兼ねる方法として『集殺法』なるものを案出したのである、其の內容は左の通りである。

第一　白蟻の害に罹つたならば先づその白蟻巢窟の根本的撲滅法を講じなければならぬ。――之が爲めには先づ被害物件の白蟻群の巢窟を發見するか又は發見不可能の場合は其の幹線の蟻道を見出し其の內に余の發明に係かる白蟻集殺劑を適量に裝置して置くのである、斯くすれば白蟻巢窟中の幾百幾千萬の蟻群は旬日ならずして悉く斃死し茲に根本的撲滅を達成するのである。

若し白蟻巢窟を發見し此を發堀した場合と雖も其の發掘跡には必ず集殺劑を挿塡しなければ餘黨の完全撲滅は絶體に出來ない、此の場合若し前記の集殺劑を用ひず市販の白蟻豫防驅除劑と稱する『テルミトール』又は『クレオソリューム』『クームヒン』等の散布又は注入によりては餘黨の全滅は出來ない、何となれば此等の藥劑は悉く白蟻の嫌忌する接觸殺虫劑であるから之を嫌忌し危險視して直に其の巢窟から他に逃避し又巢窟外に活動して居る蟻群は再び其の巢窟に歸る事を止め他の安全なる場所に集まり、女王死滅せば補充女王を擁立

して繁殖を繼續するのである。私の發明せる集殺劑は白蟻の好物である、從つて巢窟内に置くも其の巢窟に歸つて來た白蟻は必ず好んで之を食するのである。其れ故に之の巢窟に屬する蟻群は悉く滅殺することが出來る。併しながら分巢を作り又は白蟻綠中(白蟻の通行する道)に移行して居るものを全部撲滅する爲めには次の施工の必要がある。

第二、被害物件中(建築物又は立木其他)に活動して居る白蟻は完全に撲滅法を講じなければならぬ。――此の方法は施工に當り稍や技能を要するものであつて、其被害狀況を精査しその要所蟻道に集殺劑を裝置し分巢あらば勿論その中にも集殺劑を挿塡して置くのである。之によりて建物又立木内部の蟻群を完全に撲滅する事が出來る。

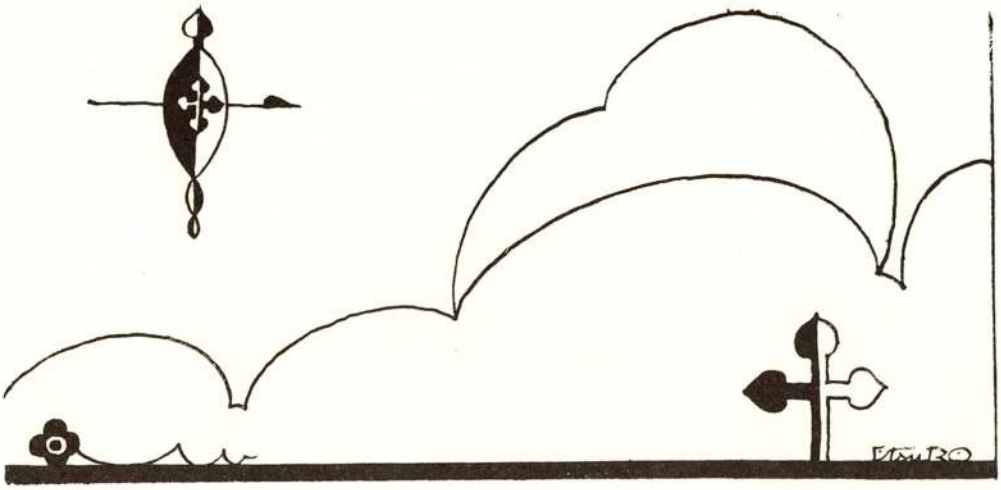
第三、次に撲滅後の豫防法も併用し置くこと。――

被害物件中の白蟻を完全に撲滅しても施工せざる部分に將來他より成虫(白蟻の生殖虫)が飛び來つて構巢産卵繁殖して再び蝕害を及ぼすことがあるのである、又他の系統の巢窟より侵害を被むることも多いのである。故に此等の塲合に豫め備ふる爲め建物の全部(床下及天井小屋組)に亘り要所々々に白蟻集殺劑を裝塵して置けばその目的を達する事が出來る。

以上は私が實行して居る豫防撲滅法(集殺法)である。而して今日迄の成績に徴し些の故障なく完全にその目的を達して居るのである。然し乍ら斯く完全に所期の目的を達する迄には白蟻の性狀を充分に會得し幾多技術的修練を經たる多年の努力の集積と及び私の發明に係かる集殺劑の力である事は勿論である。(完)

春の野に霞たなびきうらがなし

この夕影鶯鳴くも



民家の研究

津田鑿

一 各地の民家に就いて
一 地帯に就いて
一 分類に就いて
一 間取りに就いて
一 進化の順序に就いて
一 建築する材料に就いて
一 一致點に就いて
一 保存に就いて

各地の民家に就いて

各地民族の生活狀態と其の特徴を顯すものに種々なる事物が擧げられ且つ日常の生活に著しく其の國民性が窺はれる、そうして衣食住には又適切に考察資料がある自分は其の内住の方面即ち民家に就いて考へて見たいと思ふ。

有史三千年は永いようではあるが世界の民家の發達を調べて見ると又短いようにも感じられる其れは現在まだ殘つて居る蠻民の家を見る時に之れでも人類の住家かと疑れる程度のものが文化の進みし今日尙依然として原始時代其儘の有樣は全く數千年前と變化のない樣に思はれる最も既に滅亡したものは別として現存せる民家とても絶對に其の性質永久不變と云ふことは出來ないから必ずしも最初の形式であるか否かの斷言には多少、疑問の點はあつても先づ恐らく近いものと云ふことは出來よう其れ等の民家から順次と今日吾人の住居又は各地のものに至り相當の變化を考へて見ることは興味深いことである。

世界の各地に散在する民家は土地により種々異なつ

(一) アイヌの住宅



(二) アイメの住宅



（三）家の族ヤミヤミのヤリラオーストラ



る程度迄は是れを破壊することは困難であるのは其處に國民性の力が及ぼす偉大なることを示すと同時に其の土地に限られた特別の形式や構造を保ちつゝあるのは喜ばしい最も民家は公共的建造物の如く無暗と急速に時代の要求に隨ふ必要はなく祖先から受け繼いだものを又子孫に其儘傳へ多少の不滿には習慣の點より寧ろ古きを守るを好む傾向がある爲に自然永く舊態を保ち得らるゝのは研究者に取りては幸である。

民家の構造には氣候と建築材料及び民族發展の盛衰關係が重視さるゝ一例は現在或る國の茅葺屋根の先端はしまりなく無暗に垂れ下りなんとなくだらしない樣子を表して居る其の國は既に盛期を過ぎた樣に思はれ又或る國民のものは形態に構造に覇氣に滿ち如何にも旺盛を示し前とは反對の表徴がある斯く國民の思想一般が住に表はることは當然の事實である。

氣候は勿論甚大に影響する寒帶に建てらるゝ丸太小屋の防寒的家屋尚生息するに必要なる露西亞の「ペチカ」朝鮮の溫突の如き特種採溫設備た態樣を備へ其の國の生活狀態を有の儘に表現して居るのは面白い近代の文化は移動し且つ趨勢は共通に發達する傾向のあるにも不拘獨り民家の一部には何處の國でも殆んど昔と大差なく見受けらるゝものを殘しつゝあるのは全く傳統的風習の上に立つからで文化の力でも容易にあ

メランスラーに於ける

（四）家の上樹の爲めの人婦婚未





カルガリーインデヤン天幕生活（五）

裝置の發達は自然に研究されて起つた結果に外ならない「シリヤ」砂漠の中に丸い饅頭の様な家の散在するのは材料として石塊泥土より得られない結果之を捏ね上げて造らるゝものである。

同じく「埃及」「メキシコ」の如き熱帶地に土を塗り壁を厚くし日光の直射をなるべく避け降雨

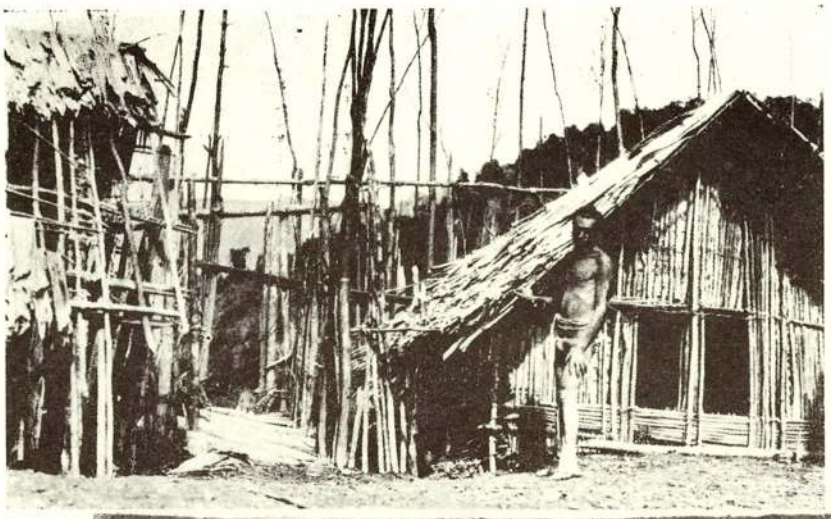


ツルラントに於ける小屋を作る處（六）

の關係から陸屋根の家、竹を多く用ひる「シヤン」南洋、臺灣の蠻民石塊を積み上げる北歐の家、僅に雨露を凌ぐに過ぎない熱帶住民の小屋掛け各地の天幕張りの民族或は半穴居又は樹上の小屋一時的なれども氷の住居等何れも氣候に適應することを證明する。世界の民家の内には時として不思議に同型のものが見出され簡易なる程度のもの特に蠻人のものに於いて尚更である其れは材料と氣候に重大なる關係に依るからであろう。



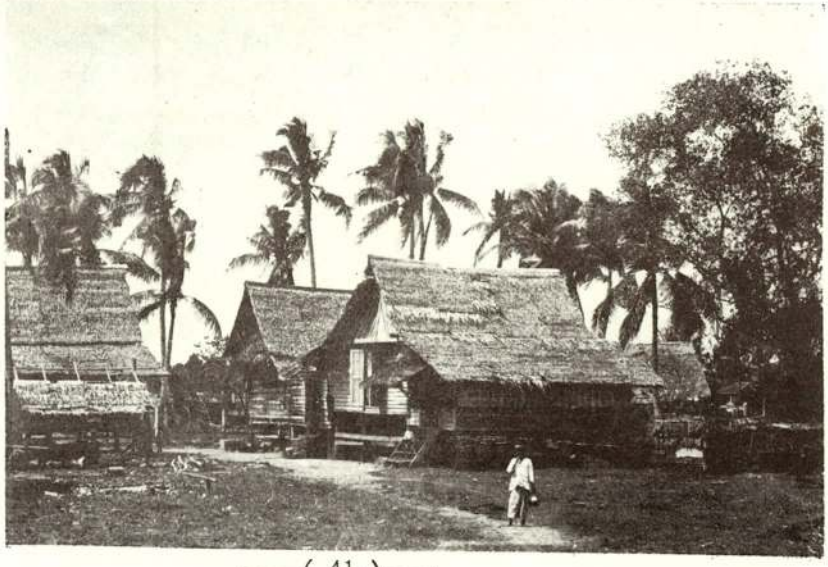
カルマック族の家（七）



ニューギニヤ（八）



南洋筏上の民家（九）



南洋（十）

（一十）青島の民家



地帶に就いて

今和次郎氏の系統別に倣ひ民家の散在する地帶を假りに左の如く七つに分類した尤も之は決して斷定的のものでないことを附加へて置く。

一、原始的の民家　大抵小屋に近い多くは各地の聲民住居で民家には相當距離かあるが

二、寒帶に屬する民家　露「シベリヤ」「スキツル」「アラスカ」グリーランド等の

三、砂漠地にあるもの　「アフリカ」の東北部から蒙古滿洲等其の他の砂漠地

四、山脈地にあるもの　到る處の著名なる山脈のある處

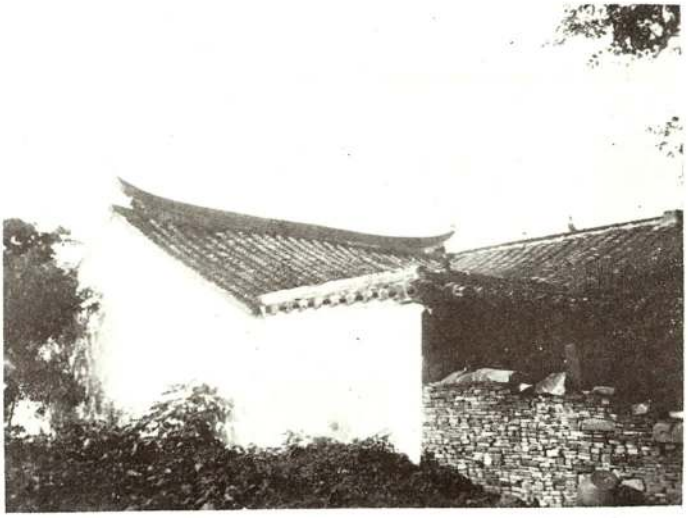
五、海洋線中にあるもの　海に面した暖國の民家

六、舊文化地にあるもの　北歐一帶に散在する民家

七、新文化地帶　歐洲の殖民地に本國の人により建てらるゝもの

分類に就いて

人類の安息所たる民家も地勢其他種々なる關係から三つに分類することが出來よう、即ち固定的のもの移動的のもの更に一定期のものに分つことすれば



蘇州（十二）



スイツル（十三）

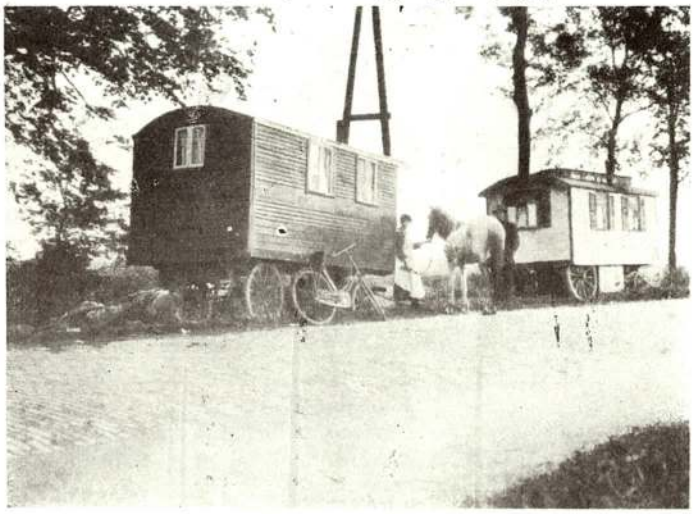


伊太利（十四）



フランス（十五）

（六十）家之ージフシ



（八十）部北ンデイスイ庫倉



（九十）家の住常び及所行苦ユデンヒ

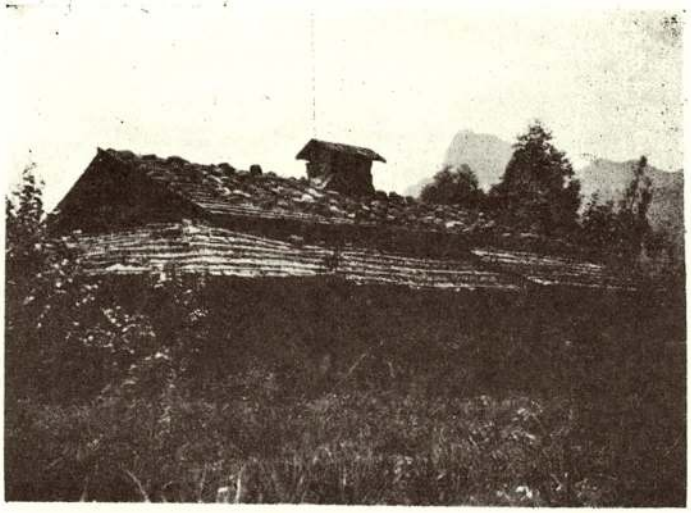


固定的のもの

- 樹上に造る家　南洋蠻民の内にある
- 水中に造る家　南洋其他にある
- 水邊に造る家　同上我國にもある
- 横穴、竪穴を家とするもの　歐洲にもあり我國にもある
- 橋上の家　印度「スリイナガル」「カシミヤ」の首府にある
- 地上の家　到る處に散在する



アイヌの民家（十七）



松井田附近の民家（二十）

移動的のもの

天幕生活者（エスキモー又はインデヤン）其他

居住車、牛馬其他動物に箱車を曳かしめるもの」ジフシイ」

大正十四年十月十六日朝日新聞夕刊にも其一例が記載されてある如き箱車を家とするもの

住居船　船を家とするもの各所にあり

筏上の家　支那鴨綠江をくだる材木筏上の家

尤も此れは半一時的のものに近い

一定期のものは

「エスキモー」氷の家が其れである

鐵道工夫が小屋を住居として鐵路により移轉するもの其他

間取りに就いて

民家の間取りは民族の性格により種々異なつて居る蠻民の内には丸い平面を持つのがあり「サモア」島南部アフリカ「カフア」族、臺灣「ツオリ」族等　其の他「テント」の中心に柱を建てる例に倣ひ我田舍家の一部土間式の大黑柱を建てたるものが應々ある。

同型を繰返すもの或は自由に各自が好む儘に建設するもの〻何れも千差萬別で生活程度の低い方が割合に一致した同型が多い長方形、正方形又は不規則に凹凸あるものより之れ等が變化して更に出窓或は多角形の平面を造る樣に進むのである。

我南部の曲家と俗に稱へられて居る矩の手形の平面は風致前庭の關係から同く同型で面積に大小の相違はあつても整然として一致した型に建て連ねられて美しい形である大島の民家は更に殆んど同一間取りを其儘に建てらるゝ例である其の他土地々々に依り何れも特色の間取りを持つことは爭そふことの出來ない其處に味ふべき點がある。

進化の順序に就いて

今日の民家に進みし順序はほゞ推察することが出來よう先づ最初は穴居でも別に周圍の關係が不自由を感じないものが相當年限の內に追々小屋掛の程度に進んだものであろう、其れより尙種々の不便を滿すかたはら實用以外の美と趣味を要求する樣に多少の向上を來し更に自衛の必要から床を高くする爲め柱を建て室の川途區別を始め彩光に窓の必要を生じ天井に壁に建具敷物の類迄を要求する樣に進化し又進んで文化設備を附け加へる迄には永い年月を費した事である最も現在こしても「テント」生活者或は「ジフシイ」の家の如きは昔こ差程の相違はない樣に思はるゝ階數は始めは勿論一階の平家建で充分のものが中二階こなり二階又は其れ以上、時こしては家根裏を利用するものがある。

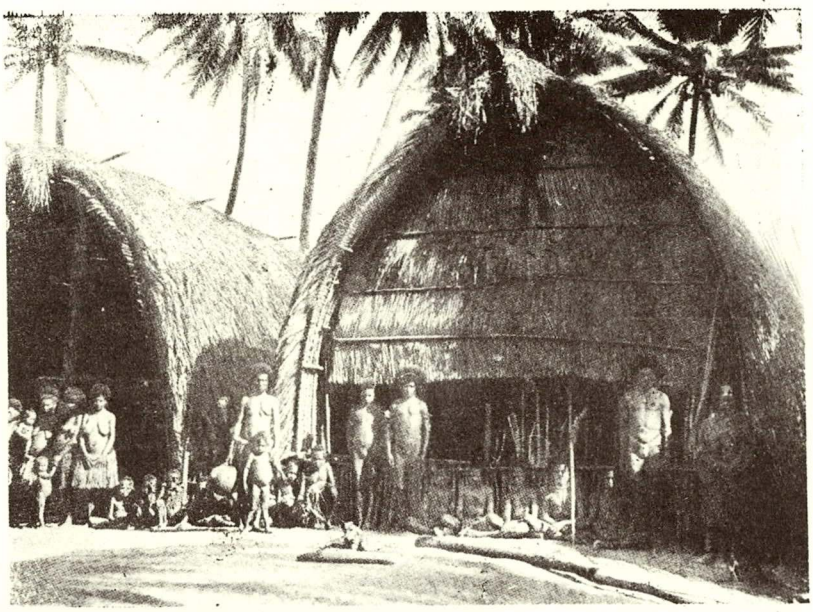
更に地下に逆戻りして地中室を使用する且つ最近の文化は設備こ構造に住居の平面を變更すべき要件が生ずる即ち彩光、通風、保溫、衛生に關し到底蠻人の夢想だに及ばざる事實を實現して居る。

(一十二) 家民ルツイス





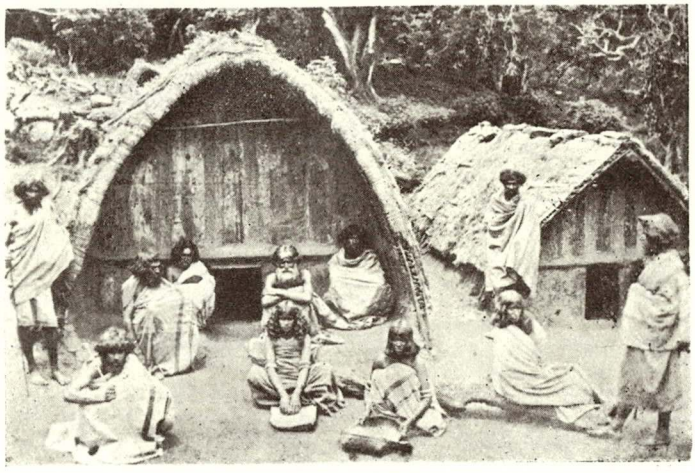
東京府下青梅町附近の農家(二十二)



パピヤン族民家（二十三）



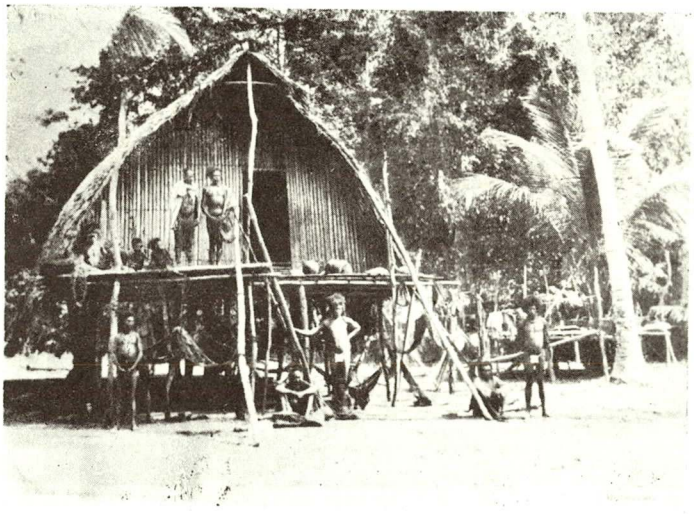
奈良新田（二十四）



マンドに於けるトーバの家（二十五）

建築する材料に就いて

何れの民家にも建築材料に苦心の跡が窺れる
木材に乏しい處には泥土を多く用ひ氷の外何物



パピアン族の家（二十七）

も得られざる北極には其の氷を壁こし獣皮を入口にたれ住居する樹木、石材、金属等の材料を容易に求めらるゝ地は自然の恩恵の偉大なるを感謝する次第であろう。

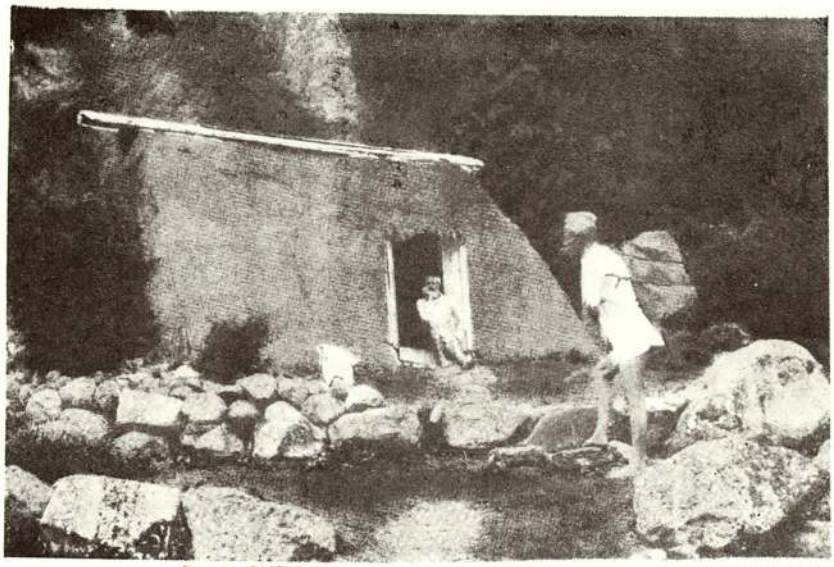
竹を屋根、壁、柱こし、或は蘆を束ねて泥を塗る「エジプト」如何に地勢氣候の關係の重大なるかは想像の外である普通に使用さるゝ主なる材料は次ぎの如きものであろう。

壁

丸太を横又は竪に使用するもの
板の類を竪又は横に張るもの
土塗り壁（骨は木又は竹又は石塊）
木又は竹に（あんべら）葦、莚、簾の如きものを張るもの
竹を竪に又は横に並べるもの
適宜の間隔に木の柱を建て其の間を壁にするもの

臺灣タパホ社蕃人之家（二十六）





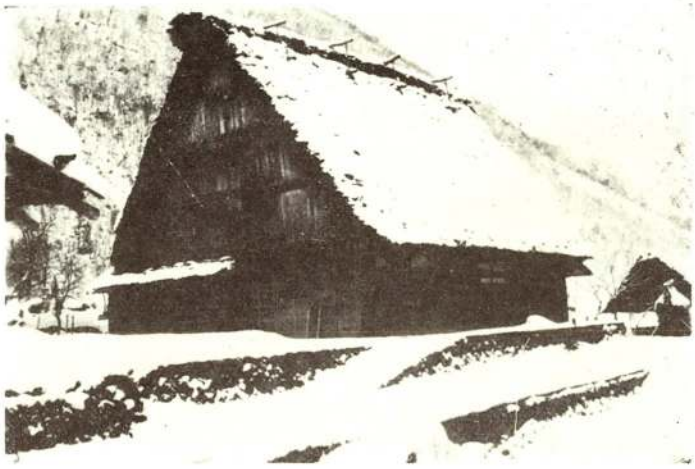
布哇の民家（二十九）



布哇土人の民家（二十八）



飛彈國白川村之民家（三十）



岐阜縣大野郡荘川村中野（三十一）

床
- 土間又は平地より床を上げたもの
- 板の間
  - あんべらの類を敷物とす
  - 中階二にして下は氣候の關係にて吹き抜きもの
- 疊其他平地より床を下げたもの

屋根
- 粗朶、竹
- 板の類
- 茅、藁、檜皮、蔗等
- 板石（スレート又は鐵平石の如き）薄く割りたるもの
- 柿板
- 瓦

樋
- なきもの
- あるもの

民家の一致點に就いて

如何に歴史的な名建築であつても其發達の根源に遡ればそこには民家がある民家は人口の增加と共に村は町となり町は更に都となり工業の發達科學の進歩が伴ひ自然美的建築や大建築が生れる譯である今後假りに此等の建築は終りを告げるとしても人類ある間住家は全く滅するこ



ニューカレトニア茅葺の家（三十二）



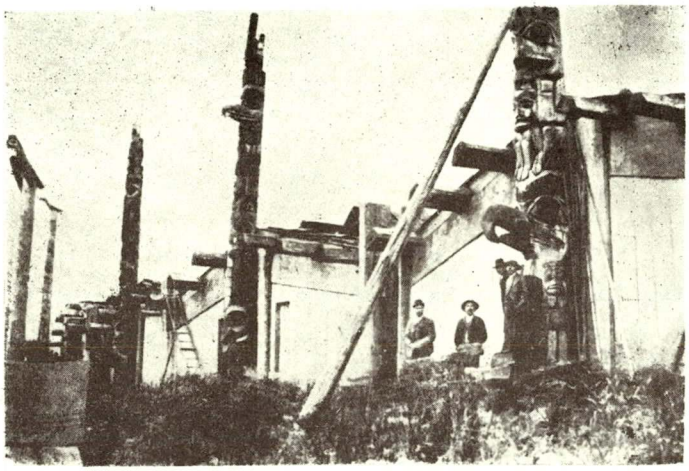
エスキモーの家（三十五）



メキシコの民家（三十四）



東部中央メキシコ（三十三）

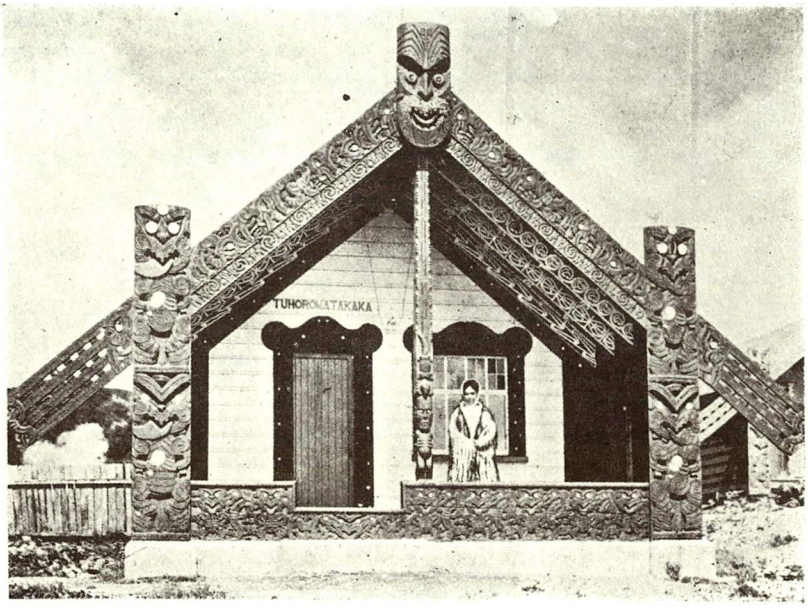


ヴアンクバー印度人村（三十六）

こはあるまい。

斯く貴重なる民家の内には質朴粗雑ではあるが其れが却つて雅致の存する點は各地の民家に共通に窺はれ且つ不思議にも同じ系統に屬するものが到る處に存在し材料の用途構成の手法が一致して居る事を見出すことは興味深いことゝいわねばならぬ今穴居時代から今日の民家に到る迄の經路の一つとして多くの資料の内から我國の分として飛彈白川村民家の如き例證を擧げることが出來る此れは多少の說はある樣であるか丁度天地乾元の宮造りに當て嵌められ丸太を交叉して妻から出入する具合は面白い。

又二夕柱に相當する臺灣蠻人の住家とバビヤン族の家に棟木を受けた樣子は單に遇然とのみ見逃すことの出來ない深い意味のあるものと考へられ「ドーバー」の家と奈良新田にある屋根の曲線は何を語るか此れ等は最も良く一致した形である北米「インデヤン」と「マオリ」民族の彫刻



マオリ（三十七）



シュワルツワルトに於ける田舎家（四十）

ドイツの民家（三十八）



仙台町ハヅレニ階家(洋風に近きもの)（三十九）





京都嵐山附近の農家（四十一）

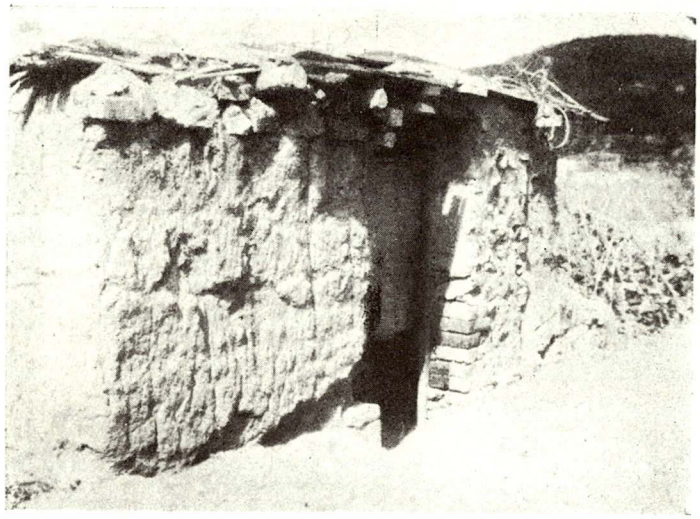
は多少似寄りの點があるらしく思はれ樋を突出した「メキシコ」の民族と「エスキモー」の其れと同じ心持らしい「スィツル」の丸多造りの壁柿板葺に石を載せた具合は或る部分は朝鮮の或は露西亞又ある個所は吾が輕井澤や中仙道の民家と合致して居る布哇土人の茅葺と「アィヌ」も同型に近く屋根を押さえる丸太を交叉する手法に「アィヌ」と臺灣人との間に似寄りの點がある。

大屋根の中に集合家族制らしい獨逸の民家と白川村の其れとは又全く一致した點が窺はれ只切妻と方形の差はあつても其の心持ちは動かし難い一致點ではなかろうか「スキデン」の板倉と「アィヌ」の藏の梯子の調子又朝鮮の藁葺屋根と「アィヌ」の其れと全く同じ形であることが判然と知ることが出來る。

民家に必要なる穀倉の構造は到る處殆んど同じ考へで床を高くし臺灣の如きは風候の浸入を防ぐに苦心され「スレート」丸形のものを床と柱の境に載せられて居る獨逸の田舍家や英國の其れともよく一致した樣子と吾が仙臺郊外の家とは面白い對照ではあるまいか「エジフト」の民家



飛彈國白川村御母衣遠山家の家屋（四十二）



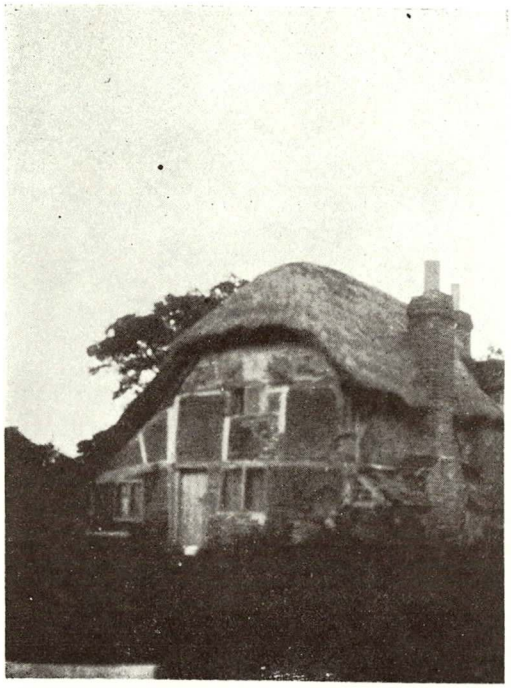
支那一部にある民家（四十三）

ミ支那の一部に見る是も同一法である。

木曾附近民家の長所或は上洲地方屋根の空氣抜きの佳致は抜目なく北米の「バンカロー」に甘まく取り入れられ主に加洲に於いて且つ特に「オークランド」附近に髣髴しい「スペイン」の塀に瓦を載せた形は吾が關西によく見受けらるゝ形であり琉球士族屋敷には尚更同形に近い斯く遠く離れたる國々に一致した點を見出すは驚嘆すべきことである舊文化地帯にも可なり似寄の點を示して居る我が農家に柱を三尺間に建て其の間土壁のものは英國の荒木造りの「ハーワ



（五十四）輕井澤附近の民家



（四十四）ロンドンの郊外

チンバー」型田舍家によく見受けらる。

尙思想の一致する例として「ベルサィユー」宮殿の庭先に一園ひの田舍家が建てられ田園生活の憧憬を滿すに殊更粗朴と自然に近く造られ其の技巧は華麗の宮殿に對して英傑の胸中聊か風



朝鮮の民家（四十七）

流氣のありしも面白い深川某邸に　廣大なる庭園中に現代式住宅の建築に對し一隅に特に田舍家を建て前庭の田には稻を植え秋の收穫を偲ばせて居る此等は東西の趣味にも民家の忘るゝべからざるを示す好例であろうと推察される。

保存に就いて

斯く史上大切なる各地民家が追次原形を變更され或は破毀の時其儘に打捨てられる恐れがあるのは甚だ遺憾のことでそれ等は出來得べくば相當の數を「ノルウエー」「マイパウケン」民家博物館の樣に保存したい最も其の內には都人の見る風佳な田舍家必ずしも茅、柿葺と限る譯ではないが其處には經濟上より起る亞鉛引鐵板に屋根を葺替え修理其の他の方法にも舊態を保存する上に一考の餘地あるべく悉くを其の儘と云ふ意味でなく一種又は特種の參考資料に値する分を殘したい飛彈白川村の民家は村會に保存されてあるか他にも夫々特有のものには相當の方法で舊態の儘にして置きたい。

盛岡附近の民家（十五）





ロシヤ民家（四十八）

一つである民家中には建築史を飾るに足る立派な保存建物の資格があるこ云ふても過言でない程のものが未だ到る處に散在する此れ等歴史的參考の實物こして其の形式を



ドイツの民家（四十六）



スイデン北部（四十九）

又或は時々野外實物博覽會こして適當の地に博覽會を催すのも必要であろうし模型こして其の鄉土及び適當の博物館に藏することも希望の永遠に最善の方法を講じて保存し研究者の資料に供したいものである。

江戸時代の建築

伊東忠太氏談

建築史上より見たる江戸時代とは何時から何時までのことであるかと云へば、これは歴史家と藝術家とによつて各々その見解を異にする。藝術家は元和元年——即ち大阪落城以前をその初まりとなすに反して歴史家は天正十八年——即ち家康入城後をその初めと見、私はこゝで歴史家の説に從つて家康入城後より明治初年までを江戸時代としてこの論を進めることにする。

日本の建築史を通つて見ると、所謂桃山時代以前は宗教建築がその主流をなしてゐた。ところが、世相の變遷につれて、宗教建築は漸次廢れ住宅建築がその主流をなすに至つた。江戸時代の建築を大別して前期と後期とに二分する。即ち七代將軍以前を指して前期とし、八代將軍以後を後期とする。この前期を二分して一つを寛永時代とし、他を元祿時代とする。後期は一括して單に後期の建築と名づけてよく、前期の中、寛永時代は創立時代であり元祿時代は修飾時代ともいふべきである。而して後期は一種の惰力時代に外ならない。

凡そ建築に限らずあらゆる藝術は常にその中に歴史の反映を止めてゐるものである。時代の歴史をひもとくことによつて、その時代の宗教、藝術、哲學その他あらゆる文化現象が如何なる内容を備へてゐたかといふことが理解出來る。これと反對にある種の藝術なり、または藝術史なりを通觀することによつて、その藝術の背景となつてゐたところの社會が如何なる情勢と過程とを經て來たかといふことを知ることが出來る。

江戸時代建築に就いて語るにあたつてもこれ等の建築とこの建築を生んだ江戸時代といふ一つの歴史的事實とを引離して、單に建築の巧拙を云々するのは無意味である。江戸時代建築は江戸文化の一つのシンボルである、さう考へることによつて、こゝにそれ等の建築が單に巧であるとかないとかいふ以上に深い意味をもたらすものである。

さて前期に於ける寛永時代の建築は如何なるものであるかといえば、それは力が其の基調をなしてゐる。天下を統一してまだその日淺く、あらゆる機關あらゆる制度、あらゆる文物を新しく創始しなければならない時代であつて、この時代にあつて最も必要なるものは、力と勇氣と進取の氣象であつた。その時代の精神の現はれとして、建築の上にも力の美が重んぜられたことは無理からぬことである。

即ちこの時代に於ては形式よりも内容が重要視せられたのである。それ故にこの時代の建築物を見ると、外觀の美しさよりも先その中に張りきつた力と精神とがこめられてゐるのが目につく、粗雜であるがつまりとしてゐる、それは決して宙に浮いてあるのでなくして、嚴然と地上に力強く根ざして聳えてゐる、同じく前期と雖も元祿時代の建築は、寛永時代と餘程趣を異にする。此時代の建築は主として優美に出來上つてゐる。それは内容よりも形式が重んぜられてゐる、これは何故であるかと云へば德川幕府、基礎も全く安定し凡ゆる文物制度も完備しそこに一つの餘裕が生じ内容よりも形式を弄ぶといふ時代精神の現れである。

後期の建築は所謂惰力にして、その形式に於ても内容に於ても何等の新味なく、ただ前期に於ける内容と形式とを單に繼承したと云ふに止まり、然も何等それ以上に出やうとする創始の工夫も見られない。これも前期に於ける寛永時代或は元祿時代と同樣に歴史的に説明出來るものであつて、即ち建築の上に現はれたる衰退の狀は同時に時代精神の墮落を無言に物語るものである。以上述べたるが如く一つの藝術はその時代と密接不離の關係にある。

藝術と時代との關係を果物に例えとつて説明すれば、最初は固く澁く力あり次は力衰へて光澤美しく最後は熟して地に落る。江戸時代の建築もこの一個の果物と同じプロセスを辿つてゐる。歴史眼より見れば然しそのどの時期にも意味が含まれてゐるのである。

以上前期後期の江戸時代建築を今少しく詳細に考察して、建築の種類が如何に時代と共に變化したかを述べて見やう。

第一は城である。これは敵を防禦するためと同時に、將軍の威嚴を示すために造られたものである。從つて云へば、先江戸城である。次に增上寺の山門があるそれから、二代將軍秀忠の廟、寛永寺の塔、芝の東照宮上野の東照宮、これ等が第一期の代表的建築である。第二期に於ける代表的建築物としては、日枝神社、淺草寺の伽籃護國寺、寛永寺本坊、湯島天神、根津權現、五代の將軍の廟等である。

後期のものとしては七代將軍の廟谷中天王寺の五重塔、湯島の聖堂、芝の五重塔、赤門、華族會館の門等である。

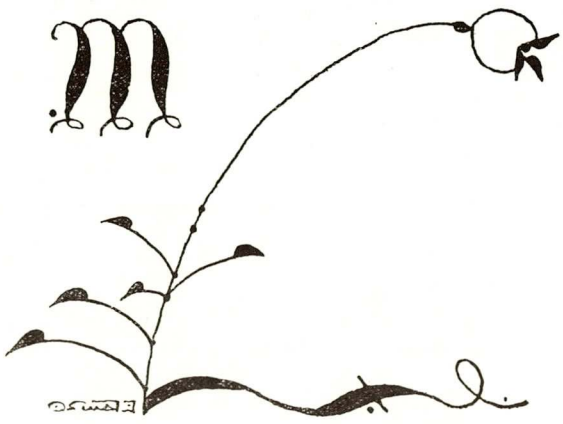
江戸を天下第一の都市とするためにあらゆる建築物を次から次へと築いて行つたがそれは主として將軍家の威嚴を保つための手段に外ならなかつた。

やがて實生活の必要より大名邸宅或は町人の住宅が盛んに建造されまた、江戸城鎭護のため神社佛閣等が多く造られた。また先祖の靈を祭るために廟が建られた。或は學問の爲に聖堂が建られた。この前期に於ける第一期は建設時代で、凡ゆることに忙しく活氣づき自然建築の上にも力の美が表現せられた所以である。

第二期は所謂安定時代にして、あらゆることに餘裕の生じた結果自然其の建築は娯樂に向ひ、先民衆の娯樂機關として各所に劇場が建設せられた。而して、劇場はその性質上、まづ外觀の美が重んぜられ、これが第二期に於ける代表的な建築となつた。また火災類繁のためにその防禦工事が完備された。

後期に入ると、かの八代將軍吉宗の緊縮政策の結果として宏大なる建築は禁止され、所謂文化文政の衰微時代を來した。それより、幕府の威勢も次第に下り坂となり財政の窮乏と材料の不足と相まつて建築界もだんだん衰退した。具體的の建築に就いて云へば、先江戸城である。次に增上寺の山門があるそれから、二代將軍秀忠の廟、寛永寺の塔、芝の東照宮上野の東照宮、これ等が第一期の代表的建築である。第二期に於ける代表的建築物としては、日枝神社、淺草寺の伽籃護國寺、寛永寺本坊、湯島天神、根津權現、五代の將軍の廟等である。

後期のものとしては七代將軍の廟谷中天王寺の五重塔、湯島の聖堂、芝の五重塔、赤門、華族會館の門等である。



都市と現代的墓地園

椎原兵市

▲都市計畫と墓地園の位置
▲現代的墓地園の面積
▲現代的墓地園の施設
▲米國に於ける墓地園の組織

墓地園は、靈魂の靜かに眠る場所で、人生最後の常住の靈域である。現世の人は故人の英靈を敬慕して、親しみと追憶の情を以て折り節し此の靈域を訪ずるべきであるが、それには我國の墓地は餘りに無秩序で蔭凄の氣が漲つてゐて、親しく參詣しても永く足を留めるものも少なき狀態にあるのも當然である。然るに伊太利、佛蘭西、獨逸等の墓地は、市民の散策の場所ともなり、遊歩地として公園的の意味を有するに至つたのも、畢竟設備の完備と園藝的施設の宜しきを得て更に墓石の建築的、彫刻的の美を與へる結果に外ならぬのである。

謂ふに我國一般市民は活生活を營んでゐる現世の爲めには萬端の注意を拂ひつゝあるが、靈魂に對しては餘りに疏ぜられてゐる嫌ひがある。しかも墓地園は一つの公共的施設で、社會政策的施設であると考へられぬことはないから、一層の注意を拂はねばならぬのである。歐米の都市ではモット生と死に對しての、見解が深刻で現今都市計畫の重大問題として研究されてゐるのである。以下歐米の墓地に基調を置き項を分ち卑見を述べて見やう。

都市計畫と墓地園の位置

墓地園が公園と同じく成功するか否かは、先づその位置や面積、施設の如何にあるのである。凡そ現在の墓地園が不合理の場所にあつて都市の發達を阻害してゐることは、我國の諸都市にもその實例を屢耳にする所である。そして、その障

害の程度が顯著になつて遂には他に移轉するの止むなきに到るのを稀に見るが、かゝる事は難事業中の難事業であり、又道義上からも避くべき事であらねばならぬ。一度設けられた墓地は、人間が作るものゝ中で最も永久的のものであると云ふても過言ではあるまい。卽ち墓地は靈魂を奉祀してあるものであるから、その英靈に對する敬虔の念からも、道義上からも又宗教上からも、之れを堀りかへる事は好ましからぬ事であらう。公共的建物とか鐵道とか、公園等は都市かよりよき機能を營む爲めには、容易に移轉する事が出來るのであるが、墓地園は上述の如く確固不拔のその土地に膠着性を有つてゐるから、一度之を設置したならば、その移轉は困難で且つ將來都市の發展に對して、大きな一つの脅威となることが多いのである。從つて都市計畫の見地から都市の內部又は近郊にこれを求める際には、爲政者は大いに考慮して恰適な位置と、如何なる樣式にすべきかに就て周到なる注意を拂はねばならぬ。

そも〳〵墓地の選定には唯々交通、地勢の如何によるのみならず、都市の發展の方向や地域制、風向、給水、土質、排水等に基調を置かねばならぬのである。例へば大阪の長柄墓地の如きは、最初から工業地として發展の運命を有つてゐた土地の風下にあるので、今日では林立せる煙突から吐き出す處の惡瓦斯と煤煙との被害で、墓地を美化し安靜と壯嚴を保持すべき役目を有する處の樹木は殆ど枯死に瀕し、鮮綠の芝草は褐色に變つて、基石は煤煙に包まれて甚しきは墓石に彫まれた文字さへも判然を欠くものもある。又神戶市の大倉山公園の如きは最初墓地であつたが、此の地は市の中央に位しまさしく保健の爲めに公園として必要であると云ふことを、近年に至つて痛切に考へられて埋葬された死屍を他の場所に移されたのであつて、これは我國に於ける、墓地が公園になつた一つの實例で兩者とも墓地選定を誤つた實例である。

都市が墓地に禍される主な點は、主要通路や商工業發展の障害となり、從つて市民は不便利と時間の損失とを來し、これを金錢に換算する時は長年月の間に莫大の額に上るであらう。故に墓地は常に完全な道路によつて都と直接且つ便利よく連絡してゐねばならぬ、それがためには都市の放射線路と放射線路の中間にその位置を置き、しかも一般に墓地の地域は正方形よりも短形がよし、その長邊を此の放射線路の方向に置く事が理想であるのである。もし主要な放射線路が制定されてゐない場合は、墓地を決定する前に都市計畫によつてこの主要道路を定めねばならぬ。猶主要通綱たる鐵道線路、操車ヤード、高速電車の障害の地や商工業に向つて發展膨脹する方向卽ち苟も都市の活動や、生產能力の要素たるべきものと無意味に交錯して設けては絕對に不可である。

次に墓地選定を地域制から云ふと、住宅地域でなるべく近郊に望むは人情なれども、餘りに近くにありて都市の急速發展の場合に、忽ち現生の人が故人に苦しめられ、生存の場所を塞がれて他に移轉せねばならぬ時機に遭遇することは免れない。之れに反し墓地が必要以上に遠く離れると云ふ事は、時間、勢力、金錢の浪費となり、之を請算する時は莫大の額となるのである。米國の大都市の實例を見ると、特に指定したる地域の外市の境界內に埋葬を禁じてある都市も尠くないそれで墓地は市の中心から五哩の距離を適當として定められ

て居る。然しカンサス市の公園技師ハー・バート・ヘヤ氏は曰く『市の中心から五哩の距離は、我國の大都市には餘りに近に失し又小都市には遠すぎる』と我が國の大都市に於ても近來途中行列が既に廢された結果、今後の墓地は、交通機關の備つてゐる方面では市の中心から大略、四五哩離れてもさしたる不便も感ぜられぬであらう。市街から離れる事は一面に於ては土地を安値に求められ、且つ理想的の場所を選定され得る機會も多いのである。又交通機關と云へば完全なる放射路線の近くにあることは前にも述べたる通りであるが、市街電車・高速交通機關及郊外電車等相當高速にして且つ廉價なる賃金の機關が是非必要である。先進國では葬儀列車、葬儀電車等も用ひてゐるが或る都市では補助金を交通機關に支給してゐる墓地も澤山ある由である。

次に墓地園に適する地形、地質等を簡單に述べると。なだらかな起伏を有する土地は往時は餘り悦ばなかつたが近來風致に重きを置く様になりて以來大に之れを利用されてゐる。又或る場合は餘り嶮阻でなし岩石の多からざる限り起伏地は平坦地に比し幾分道路築造費及維持費に經費を要すべきも却つて風景美を作り得、また用地買收に際し安値に買收することを得てこれ等の不利は償はれるものである。凡て斜面地は南面がよろしく、北面は雪霜の害を受けること及び樹木の成育に好ましからぬものである。次には地質樹木灌木、其他草木の成育に適する沃土を理想とし、又輕砂土は粘土、砂利等よりも掘鑿に易きを以て好ましいものである。最後に自生する植物の問題であるが、墓地園の植物は園の閑靜と神祕な崇嚴を形成するに欠くべからざるものゝみならず、植物の根は地中の水分と鑛物質とを分解吸收して土地を乾燥し屍體の分解を促進する利益があるから、自生してゐる樹木が道路や墜地を設けるに大した邪魔のない程度に生じた土地が理想である。その樹種に胡桃、松等の如く木の葉から落ちる雫が紀念碑や墓碑を汚染するが如き樹種は避くべきである。

（つゞく）

頭街に美を探す

都市病患者

×

都市を眞實に都市として樂しむことの能きないのは、第一にその都市自らにとつても、大いなる不幸であります。

『ゴオド・ラッシュ』を二度も見にいつたといふ『文藝春秋』の某記者ほどのキチマ狂では私はありませんが、私も所謂あちらものゝキチマは大變好きで、時々は見にゆくのであります。が、チヤプリン氏もフエアバンクス氏もリリアン・ギッシュ嬢も、私にとつてはまるで他人であるに過ぎません。私は彼等を見るのではないからです。所謂人情劇も探偵劇も私には問題ぢやありません。私はキネマのストオリイを樂しみにゆくのではないからです。多分キチマ通からは邪道だといつて叱られるでせうが、私はその背景となるところのあちらの都市だけを見にゆくのであります。

即ち、それが實際あるところの都市であらうと、唯こしらへものゝ大袈裟をネットであらうと、兎も角も、街といふ街、都市といふ都市であればいゝのであります。キネマのストオリイそのものも、いつでも新聞廣告の十分の一程のねうちもないものであり、ロケエション等の實際の空虚さを幾分でも知つてゐます私にとつては、キネマそのもので所謂第八藝術の藝術的感興を覺えることは至つて少く丁度現今流行ものゝ大衆文藝とかいふものをお義理によまされた時のやうなバカらしさをだけ感ずるのでありますが、たゞ、その背景となつて現はれる、街々、通りの一場面一場面には、非常な興味を感じさせられるのであります。全くあちらの街は、それが戀人同志の樂しんで歩く芝生のある街にしても、惡漢が惡魔のやうに逃げてゆく裏通りにしましても、あちらの街々は、何と、美しい魅力に富んでゐるではありませんか！

單に異國の街々だからといふだけではなくたしかに、どうしてだか、人に迫らないではをかないだけの或る一種の魅力的な雰圍氣が

そこにあるのを感じないではをれないのであります。もとより、アメリカの街にはアメリカ流の安つぽさもあり、氣障さもあるにはありますし、所謂ビルデイング街のラッシュ・アワアなんかを見せられると、異國情緒も全く艶消しで、やつぱり奈良と京都の日本がいゝと思ふのでありますが、何といつても、あちらの街はじつに魅力的です。單に手際よく整頓してゐるといふだけではなく、如何にもその整頓のしたが魅力的であり、また藝術的であるとしか考へられないのであります。いかに名優ナジモヴア夫人の美しい姿が出て來ましても、その背景が、大阪驛頭や三越前や中ノ島公園ぢや、じつに慘めなものではありませんか。高島愛子も大阪圖書館位の前に立つて洋裝してゐたんぢや、はじまりますまい。立派な都市をもつてゐないといふことは、じつにその都市の居住者だけの損失ではないやうに思はれます。建築物だけを、兎も角も一列に並べてをけば、それでもつて立派な街ができあがると思はれてゐるやうでは全く困るのであります。言ふまでもなく、都市は一つの活きたる機能として、現代の社會へ大いなる力をもつて働きかけつゝあるものであります。その機能が單に經濟的機能のみに限られ、それがほんとうの意味に於ける生活的機能として働かないならば、その都市が完全な働きをしてゐるとは言へないのであります。都市が都市全體として統一されてないといふことが、その都市の文化に、その居住者の精神的生活に如何に、喜ばしくない影響を強ゐるものであるかといふことは、今更ら詳論の要もありますまい何等の人間的魅力のない人間が私たちにとつて少しも有難くないやうに、何等都市的魅力のもたない都市はちつとも嬉しくないわけであります。街へでるとうるさくてしかたがない、と言ふ風な感じを抱かせるやうな街は、街としてのねうちがあるとは申されません。都市の魅力を唯その騒がしいところにのみあると考へることは、大いなる謬見でありませう。

×

古いキネマに『カリガリ博士』といふ可成り有名だつたのがあります。そのセットは所謂表現派のもので、今から考へれば、表現派としても可成り單純な、あまり優秀ではないセットでありますが、私から言はせてもらひますと、將來、五十年先き百年先きの都市をいくらか暗示してくれるものとして、仲々興味もあり忘れられなくもあるのであります。勿論街の通りがあんなに狹くて曲りくねつてゐるやうでも困りますし、警察署への階段があんなに狹くて歪んでゐて長くては全く役に立ちませんが、將來の都市は、必ず、いくらかでもあゝした表現をもつに至るだらうと考へられるのであります勿論、このキネマに表はれてゐる時代は自動車の發明される前の時代でありますから、街の狀態が自動車一臺のことでもつて、非常に變化するだらうことはよりの話であります。百年後の自動車が、果してどんな樣子で街を走ることになるだらうかは、一臺今は見當を付け兼ねますしかも、現代のこの所謂ビルデイング建築でもつてうづめられつゝある都市が、遠からず行きづまるだらうことは目に見えてをります。かう申しますと如何にも暴論のやうでありますが、今日までの人類文化史上の種々の世態の變轉を見て來ますと、速斷ではありますが、かう考へないではをれないのであります。人類の藝類的敎養も漸進的ではありますが、追

々所謂大衆のうちにもゆきわたりつゝあることは眼前の事實であります。この藝術的敎養が、果して百年後のビルデイング式の都市を、眞の『我等の都市』として是認するかどうかは實に疑問です。第二の世界大戰とも言ふべき大慘虐事變が再び惹起されゝば又別問題ですが、このまゝの世界平和が兎も角も長く繼續されてゆけば、世界の文化は兎も角も益々輝かしくなりませうし、從つて都市といふものが現今よりも尙一層の大いなる社會性をもつて人類を支配するに至るでありませう。都市は、現在のまゝでは、いかにその地域を擴張しましても、その組織に進轉のない限り、或るところまでゆけばそれ以上は進めなくなるでありませう。

藝術革命は、今度は都市革命とでもいふべき形式でもつて、世界名地に起るに違ひありません。追々現代の都市からは失はれつゝある藝術性、或はある傾向にのみ統一されつゝある藝性に、將來の人類があきたらない感じを抱くに至ることは目に見えてゐます。都市はビジチスのためのものではなく、生活のためのものであり、ビルデイングのためのものではなく、我等の生活のためのものであることを絶叫する天才が各地に起るに至るに違ひありません。大衆は應じて都市を我等にかへせと叫ぶでせう。交通機關の發達やラヂイオの發達、社會組織の發展などから推量しますと、將來の都市は決して現今のやうな密集的狀態を採る要はなく、反つて分散的に發展していつて然るべきではないかと考へられるのであります。街頭に美を求める聲も起るでせう。都市全體が、生きたる藝術であらねばならぬことを說く社會學者も生れ來るでせう。街の通りが唯もう眞つ直ぐでなければならぬと考へるのがすでに立派な意見だとは申せません。まつ四角なビルデイングだけが建築だと思ひ込むのと同樣であります。電車通りに圓形の美術的大建築が建てられていけない法はありません電車線がすべて地下線か高架線かになつた曉にはもとよりのことです。ビジチスだけが生活だと考へる人は別ですが、都市が單にビジネスの場所であるだけではなく、人間的な全的生活のホームであると考へる人々には、都市全體にもつと藝術的な色彩、人情的な柔かさがほしくなるのは當然であります。せめてはもう少し街頭のあらゆる存在物が感覺的なデリケエトなものとならないではなりません。强ゐて表現派風に街の建築物を歪める要はもとよりないでせう。が、街路樹の一本、街燈の一基にも、せめてはいくらかでも思索的な考慮が拂はれたいものと思ふのであります。

×

紳士となるには是非とも長靴をはかなければならぬ、といふのが最近の東京に於ける一つの常識となつてをります。外國では(即ち歐米では)長靴をはくのはよほど草深い田舍の所謂土百姓か、よほど身分の卑しい男に限つてゐますにかゝはらず、大帝國日本の大首府では、その長靴をはくことが一つの紳士の誇りとなつてゐるから大變です。即ち、あの膝から下を妙な恰好のもので包み、四五寸もあると思へるあの有名な泥濘の中を、これ見よがしに平然と闊步するのが尊敬さるべき紳士であり、オオヴア・シュウズもはかずに、より少い泥濘を選り乍ら、ひよこん〳〵と步いてゆくのが安月給取りだといふことになつてゐるのであります梅雨期にでもなれば、そこに歷然たる階級的差別が、長靴一つでもつて現はれま

す。從つて、快晴の日にも長靴をはいて街を歩くのは即ち氣が利いてゐる紳士諸氏であることを意味します。

こゝでお斷りしてをきますが、筆者には決して長靴諸氏を笑はうといふ惡氣の毛頭ないことであります。即ち、申すまでもなく、これは長靴諸氏がいけないのではなく、大東京そのものがなつてないのであります。かく大東京の街路のわるいのは即ち誰がわるいのかは存じませんが、兎も角も、もう少し長靴を買べない人にも歩き易い街路が早く作られるといゝと思つてゐるのは、あながち私一人ではございますまい。自動車がその付けてゐるどろよけのために運轉の自由を失ひ轉覆して負傷者を出したといふ事實が、最近あつたやうですが、どうも、惡路もこゝまで念が入れば世界的に有名になるのも無理はありません。

一體、我國人ほど、街路といふものに對する智識の缺けてゐる國民は、やくざな三四等國ならいざ知らず、セネバア會議へその代表を送る程の各國中では稀に見るところでありまして、その設備の不完全で一時的であるのは、どうも一般人のその點への理解のない結果だと見るより他に考へやうはありません。單に大東京とのみ言はず、日本内地の各都市にしてせめてその街路の一分の一だけでもが兎にも角にも鋪裝されてゐる都市が、果して一都市でも見當りませうか。日本の殖民地の都市に一度び住めば、内地の都市が汚くて住めないとの嘆聲は、時々聞くところであります。その殖民地の美しい都市にしろ、歐米の一小都市の設備にも及ぶか及ばないかの有樣であるのは事實でありますから、抗議の申しやうもありません。單にその設備の不親切さだけではなく、私たちの常に最も痛感しますのは、都市人一般の街路道德の皆無といつていゝ位であることであります。

ところかまはず唾を吐き飛す。煙草の吸殻を投ける。鼻紙を棄てる。立小便をする。自動車の上からお調子乘りが政談演說會のビラをひつ摑んで泥濘の上へまき散らす。あんぱんの食ひあまし、みかんの皮をまき棄てる。猫の死骸をほうり出す。一時やかましかつた左側通行も、今ぢや全くかへり見られず、今は交通巡査も平然と右側をゆき、からうじて、『進め』『止れ』の四辻だけでその面影を殘してゐるだけであります。車道も人道もあつたものではなく、自家の前の人道をまるで自家の所有地か廣場かの如く勝手に利用して荷箱をつみあげ、自轉車を並べ、藁を焚いてお尻を温めてゐます。全くこれでは道路問題も何もあつたものではありません。自動車が硝子屋のショウウキンドウに飛び込む位は所謂朝飯前の仕事です。タクシをたま〳〵呼んでも向うへ着くまでには胸がわるくなつてしまつて、たしかに二三百目は體重も減つてしまつてゐます。加ふるに瓦斯會社の掘りかへしてやうやう埋めたあとを、水道線のために又掘りかへし、下水のために掘りかへし、煉瓦を敷くために繩張りをし、少時して今度はアスファルトに、又木煉瓦にやり代へるといふ程、研究心に富んでゐますから、貴族院議員だらうが博士だらうが、大都市の眞ん中で、崖から墜落して横死するといふことになります。

希くば、雨の日の度毎に外から歸つてくる家族の者のはねの手入れに數時間も費さなければならぬ主婦の苦痛も少しはお互が考へることにし、一日も早く、一坪でも二坪でも、立派に鋪裝された街路を有ちたいものであります。長靴一足で

もつて、いつまでもヤンキイ共から排日運動を喰ふやうな田舎者となつてゐるのは、どうも、近代的ではありません。

×

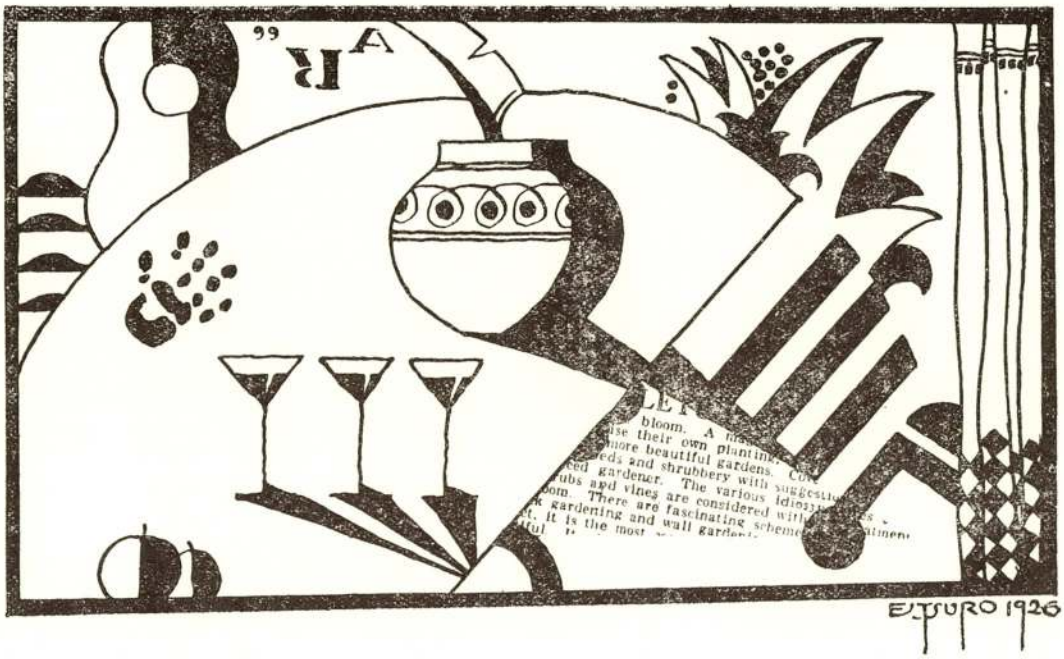
都市の統一的美觀といふものに、決定的な交涉をもつてゐるのは、何といひましても、その都市を形成してゐる主要なる建築物であります。建築物の建築たる價値は、言ふまでもなく、それをそれ自體一個の製作品として鑑識された場合に云々さるべきでありますが、それが相寄つて一群となり、一個の建築街なる一有機體となつてゐる以上は、それが一つの機能として相互に働きかけないではゐられないといふことは當然でありまして、こゝに建築物の社會性といふことが非常に高く評價されるわけであります。即ちそれが自ら一個の美を表現し、獨自の効用的價値をもつてをりましても、それが茫大なる建築叢中の一草にすぎないことを思へば、自らその置かれた環境に準じて、相應の社會的斟酌が加へられなければならない筈のものであります。都市の都市としての美觀は、單に或る建築物一個一個によらず、むしろその建築物との相反照する輝きの度合、相誘曳する角度の具合、相混交する色彩の配合等によることはすでに衆知の事實であります。

このことから引いて考へられますのは將來の大都市に於いては、あまりに美しくない建築物の所有者はその都市の一般人から相應の制裁を受けるやうになるだらうといふことであります。即ち、某氏はその隣家の某々氏の建築物のあまりにも反美觀的であるのを見れば、公人としての權利でもつて、その建築物を今少し美しく建てなほすか、でなければ撤廢せしめるかするため、正當の裁判を仰ぐことが能き、その訴訟事件の解決は主として專門の建築家美術家の鑑定の結果にまつといふ風になるだらうといふことであります。

都市計畫法が着々としてその効を奏しそれについての市民の理解と熱心も加へられた曉には、以上の言も必ずしも奇嬌の言ではなくなるだらうと考へるのであります。都市は即ちその都市居住者すべての有でありまして、一個人のものではないと同じく、その美觀も單に一個人の都合に依つて左右されるといふことなく全部の市民がその美的施設の業にも關與するだけの熱意と權利とを有つに至る時代の早く來らんことを希ふわけであります。

夜間の照明問題にしても、單に二三の計畫者のほしいまゝにすべき性質のものではなく、新聞紙其他の方法をもつてその計畫を全市民に圖り、全市民の希望に沿うやう、施設すべきものであらうと考へるのであります。都市計畫も單に少數者の都市計畫であるのはどうも面白くありません。一個人所有の建築物すら、すでに都市そのものゝ有であります。都市に於けるあらゆる社會的施設についてはその着手に先つて、先づ全市民にその一切を公表してその自由なる論議にかけ、然る後その計畫を進涉さすべきものにあらざるかを思ふのであります。都市のことをたゞ市會議員にだけまかせてをくのは、現在の有樣ではどうも不安です。都市を、市民全部の、樂しんで生活し得べきホームとなしたいものであります。

×



「火事」の裁判

芳野　薫

本稿は米國國民火災防止協會刊行の防火週間敎範中に揭げられた（TheTrial of Fier）の概要を譯したものである。

幕……判　廷

舞臺の一方に判官席を設け、その机を椅子とは判官の威嚴を示すにふさわしいものとします。それから裁判書記の机も用意し、判官席の傍には證人席と十二人の陪審官席を、その前方には傍聽人席を總て型の如く設ける、各被告は火災の原因を示すに適した扮裝をするのであるが、その衣裳はカード紙や布片などで容易に作ることが出來る、そして各自の首に自分の名を示したビラを掛けてゐなければならない。

登場人物

裁判官、裁判書記、辯護士、檢事、廷丁、陪審官、被告（火災原因の主なるもの即ち、『石油』『破損煙突』『煙草』『ガソリン』『燐寸』『雷電』『電氣』『花火』『塵埃』『瓦斯』『自然發火』及首魁の『不注意』の十二名

各被告が廷丁に導かれて入廷、つゞいて裁判官は一同を伴うて入廷する、この時在廷の一同は起立する。

書記（起立して）『この神聖なる法廷で裁かるべきお前達に若し嘆願すべ

き事があるならば只今嘆願書を提出しなさい、(誰一人動く者がない、そこで彼は言葉を續けて)、『豫審調書に現はれて居る第一の事實はお前達即ち火災の原因となるものである』

判官『總べて型の如く調べられたであらうな』

書記『ハイ、左樣であります』

判官『辯護士諸君、裁判の準備はどゝのうて居るだらうな』

檢事『ハイ、被告はすべて揃つて居ます、各被告は前年來收容されて居るのであります』

判官『被告の辯護士は誰れですか』

辯護士、(起立して敬禮し)、『本件の關係被告は總べて十二名であります、どうか各被告に辯明の機會を與へるれんことを希望致します』

判官『よろしい、始めませう(調書を見ながら)、『石油』は今年ある子供達を死に致らしめてその家庭の平和を破つたやうな獰惡憎むべき火災の原因であるやうだな、書記!被告を呼べ!』

書記(呼上げて)『石油』よ、被告席に着け!』

判官『石油』よ、お前は自分の嫌疑について何か聞いて居るだらう、辯解はどうたね』

『石油』「私は何等罪を犯した覺にはありません」

判官「それには何か證據があるかね」

『石油』「私自身が證人であります」

判官「書記!宣誓せしめなさい」

書記「お前は本當の事實を申立てることを誓うことが出來るかね、又すべて眞實以外に、眞實はないといふことを神に誓うことが出來るかね」

『石油』「ハイ、出來ます」

判官「お前自身で何か話したいことがあるかね」

『石油』「では、どうしてこういふことになつたかをお話申上げたいと存じます」

判官「よろしい、話して見なさい」

『石油』「私はいつもの容器に容れられてその使はれるのを待つて居たのであります、そしてその間誰にも害を加へるやうなことはありませんでした、ところが、あの死んだ少女が臺所へ出て來て私を取上げ、そして焜爐に注ぎ入れたのであります、ところでその時はその少女もよもやあんなに早く火事にならうとは思つて居なかつたのでありませうがしかし、それは私の過失でも怠慢でもありません、私は爲すべき仕事は何もなくたゝ臺所に置かれてあつたばかしであります、又その子供が私を動かすことの出來たのも私の過失ではありません、私が火焰に觸れたときには最早私自身も助かることが出來なかつたのであります、無論私は跳ねかへりました、そして罐を破つて燃えました、そしてその少女を殺すに至つたのでありますが、尙その近くで遊んで居たその少女の兄をも燒殺しました、しかし家族の人達がよく注意し、そして子供等が火弄りの出來ないやうにして置けば決して火事にはならなかつたのであります」

判官「私はお前の供述は正しいと認める、それで本件は棄却としやう(『石油』は元の席に復す)

判官「次はどんな事件かね」

書記「閣下、矢張り前の事件に關連して居ります、次の被告

は『煙草』であります」

判官「關係被告が多いやうであれば一時に宣誓さしてはどうだね」

書記（一同を見渡して）、「お前達は本當の事實を申立てることを誓うことが出來るかね、又すべて眞實以外に眞實はないといふことを神に誓うことが出來るかね」

一同「ハイ、出來ます」

書記『煙草』よ、被告席に着きなさい」

判官「どんなことが起つたのか正しく述べて見よ」

『煙草』「私は倉庫の中で人のポケットの中に居たのでありますが、ところがその倉庫には危險な化學藥品が貯藏されて居たのでありますが、その人間はそのことを知りながら規則を犯して私を喫んだのであります、大方喫んでからその人は私を床の上に捨てたのでありませう、それでその附近に散らばつて居た化學藥品に燃えうつつて、遂に倉庫全體が爆發するに至つたのであります、そしてその損害は二百萬弗に及びましだが、それは私の過失でも怠慢でもありません、私は不注意な人が私を喫んだときだけ火災の原因となるのであります」

判官「他の被告の供述が聽き終るまで着席して居なさい」

書記「『マッチ』は出廷して居ますか」、（『マッチ』は進み出て被告席に着く）

『マッチ』「誰かゞ私を床の上に捨てたのであります、そして子供が私を見付けて私が危險なものであることを知らないものですから、私を弄んだのであります、そして最初に窓際のカーテンを燒いて、つゞいてその子供の着物に燃え移つたのであります、家族の人達はすぐその女の子か病院へ擔ぎこみましたので多分癒つたでせう、しかし、もしさういふことをすれば恐らくその命を失うに至つたのでありませうが、別段私のやり方が惡くてそんな罪を作つたのではありません、たゞ小さい子供の手の屆かない所に私を置いておけば、こんなことは起らなかつたのであらうと思ひます」

判官「私共が殘りの被告達から聽取り終るまで着席して居なさい、書記！次の被告を呼びなさい」

書記「『電氣』、被告席に着きなさい」

判官「調書によるとお前は惡い方だね、『電氣』、お前はその奉公中機會ある毎に大勢の人命を奪つて居る、しかしお前は北米合衆國での火災原因の主要なものになるまでは犯人であつたやうだ、お前は毎年何百弗といふ財産を燒盡して居るが、その理由はどうだね」

『電氣』「閣下、私の生ひ立は極めて賤しいのでありますが、甚だ恐しい力を持つて居ます、ではありますが、私を普通に使用して且つ普通に待遇さへして呉れゝば決して害を與へるものでありませぬ、私は器物や建築と接觸しないやう又、その電線にあまり荷をかけないやうにして貰ひたいのであります、閣下、私は只今、電氣アイロンを過熱してそれが爲に新しい建物に火をつけたといふ理由でこの判廷へ拉致されて居るのであります、そして私は同樣の方法で殆ど毎日、家を燒いて居ますが、それは決して私の過失ではありませぬ、私は一度使はれますとスイッチの切られるまではつゞいて働いて居るのでありますのに、世間の人々は

その使用した電氣アイロンやその外の加熱器具を取外すことをよく忘れます、それでこれらの電氣器具は段々熱くなつて來て遂には附近の可燃性物を燃燒せしめるに至つて火事になるのであります、そしこういふことは、往々夜間に起りますので人命をそこなうことがあるのでありますが技術家達は働力用であらうと燈火用のものであらうと私といふものを普通にさへ取扱へば最も安全であるといつて居られます、でありますから世間の人達が私といふものゝ取扱によく注意さへして呉れましたならば、たつたそれだけのことで人を告發するといふやうな必要はなくなるのであります(『電氣は壇下に下りてその席に着く)

書記「閣下『塵埃』も被告の一人であります」

判官「よろしい、『塵埃』を呼び給へ」(書記が手招きすると『塵埃』は椅子の所まで進む)

判官『お前は何年も薄暗い所に居るものだから、遂、ならず者になつて居ることを知つて居る」

『塵埃』「閣下、生意氣なやうでありますが私は元々有爲有能の士でありましたが今では零落して見る影もない者になつて居ます、そしてあちらこちらと流浪うて居ますが、自分の意志といふものはもう持合せて居ませぬ、で世間の人達が私といふ者が火花で燃え出すことや又往々自然發火するものであつて如何に危つかしい者であるかといふことを認めてくれゝば、決して私をそのまゝ打棄てゝ置けない筈であります、しかし不注意な者ですと、寢室や穴藏の中へ私を動かさないで打やつて置くことを知つて居ます、つまり私は火のつくまで其處へ置かれて居るわけでありまして甚しいときには五年も六年も置かなます、ところがよくしたことには私は古いほどよく燃えるのであります、がさういつて私には何等の過失もありません、そのわけといふのは私は自身で動くことが出來ないのですもの」

判官「仲々うまく言つたね、だが總ての場合必ずしもさうではあるまい」(書記の方に向いて)……「次の被告を呼び給へ」、(『塵埃』はその席に着く)

書記「『瓦斯』!着席」

『瓦斯』「閣下、私はこく簡單に申上げたいと存じます」

判官「よろしい、はじめなさい」

『瓦斯』『閣下、私といふ者が世の中へ出るまでは、世間の人達は蠟燭の火を使つて、眼を惡くしたり或は石油ランプがこわれてよく人を殺したものであります、その時分の石油はまだ充分精製さなて居なかつたものですから、よくランプが爆發して多數の人命を奪つたり、澤山の財産を失はせたりしたのです、それでありますから私がこの世に現はれたのは、確に世間の人達の幸福でありました、しかし私は怒りぽい生れつきでありますから、よく注意して取扱つて貰はなければなりませぬ、このことは自分も充分知つて居ることでありますし、又世間の人達も承知して居るのであります、ところが世間の人達は私をストヴへ送るのに硬い鐵パイプを使はないでゴムパイプでつなぐのであります、それで破損が大きくなりますと私は空氣中に逃出して爆發や發火の原因となるのであります、又パイプの破れ孔から部屋の中に洩れることがありますが、それを探すのに燭蠟の火とかマッチの火とかの裸火をつかふといふやうな極め

て危険な人命にかゝはることを平氣でやる人があります、勿論さうすせば洩れて居るところはわかるでありませうがそんなことをすれば飛んで火に入る夏の蟲でありまして自分の命を失うばかりでなく、いろ〳〵に財産を燒いてしまうといふものです、ですがよく注意すればこのやうな災難は結構防ぐことが出來るのであります」(『瓦斯』は後ずさつて元へ着席する)

判官「『破損煙突』は火災の原因に密接な關があるばかしでなく、その被害を大きくするものであらう、彼は何處に居るかね」(書記は『破損煙突』を手招きする)

判官「お前が不注意のために起る多くの火災原因であるといふことを私のよくわかるやうに話して貰ひたい」

『破損煙突』「ハイ、畏れ多いことでござりますが、それでは申上げます、大抵の請負師は私を普通に建てないのでありまして、ある場合には地上に建てる際に他の物に私をもたせかけて置きます、又ある場合には煉瓦一枚積でその場を揃へないで非常に拙く建てますので、その結果、私はその裂目を見付けて火の粉を吹き出させますから火災の原因となるのであります、又こういふこともよくあります、屋根に火の粉が落ちたときにその屋根板が一枚であると直ぐに火災になります、又ある場合には煙突の裂目が屋根の下にありますと火の粉は屋根部屋にはいることがありますが、この屋根部屋といふのは火災の危險を多く伏藏して居る所であります、閣下　標準建築法に示されたやうな注意深い構造で私を建てるといふことは私が原因となる火災を絶滅する唯一無二の救濟策であります。(『破損煙突』は元へ着席する)

判官「次は『ガソリン』と稱する者だが―」

書記「閣下、ハイさやうであります、私が呼びませう」(被告席に居る『ガソリン』を手招きする)

判官「『ガソリン』よ、お前も隨分いゝ仲間にはいつてるね、お前もよく火災の原因となるね」

『ガソリン』「ハイ、閣下、御尤様であります、しかしそれは一般市民が私の存在を認めないから起ることであります、無論私は大勢の人々を殺しました、又幾千といふ火災を起しましたが、それは私の生れつきが揮發し易いのであつて一寸した刺戟でゝも直ぐ燃える爲であります、世間の主婦達はその家庭で私を垢抜きに使ひますが私は氣體になりますと身體が自由になるものですから、その家の附近に火の粉とか火焰がありますと直ぐそれにくつゝきます、又私はよく爆發の原因となります、ついこの間もカリフォルニア州でその絹胴衣を拭うて居た一婦人を殺したことがありますが、それは絹を摩擦したときに出た火花が原因になつたのでありまして、この火花といふのが私にとつては極めて必要なものであります、又何所の道にも自働車が通つて居ますが、それらの自働車では私を水かなんどのように取扱つて居ます、甚しいのになると注油所の傍で煙草を喫むものがあります、そして火災や爆發がどうして起るのかと不審さうに恐れて居ます、私も人道のためには隨分働いて居るのであります、それで私を普通にさへ待遇すれば私とてもそんなに亂暴なことは出來ないのであります、閣下、私は虐待されますと持前の癇癪を出すからダイナマイトより

も危險であります、私は一寸した火花ででも直ぐ爆發します」

書記「『雷電』！席に着きなさい」

判官（被告席に居る『雷電』に向つて）「雷電」よ、お前は女や子供を一人前の人間のやうに打ちのめしてそれらの家庭にいろんな悲劇を起さして居るさうだね、我々はお前の行ひについて聞くも恐しい報告に接して居る、それに對して何か辯解の言葉があるかね」

『雷電』「ハイ、閣下、私は大氣の都合によりましてある時期に空中に生れるものでありますけれども、生れつき下界が戀しくてならないのです、それで最も簡單な方法で下界に降りやうと試みます、それで世間の人間がその建物に普通の避雷針を裝置して置けば私は之を傳つて下界へ旅することが出來るのでありますが、それが爲にそれらの人々に何等の損害をも與へませぬ、しかしながら多くの場合に建物にはこの保護設備が充分でありません結果、私は私として最善の方法を盡さねばならないのであります、私は又、旗竿や尖塔や煙突を利用する場合がありますが、それは建物のどの個所よりも一番私に都合がよいからであります、しかしそれらは電導體でありませんから私はあまり好まないのであります、又私は時には山火事の原因となることがありますが、畢竟する所、私といふ者はこの世界が永續する防り世間の人達が大に考慮しなければならない暴力その者でありませう、しかし世間の人達は自分自身を保護する道はある筈であります」

判官「そりやお前の立場としては尤なことだが、もしお前が避雷針を用ひなかつたならば、お前といふ者は臺なしになつてしまうからぬ、書記！次の被告を叫び給へ」

書記「次は『花火』であります（『花火』は階段を上つて被告席に着く）

判官『花火』よ、お前は子供達仲間の賣れつ子であるのに時々謀叛心を起して、彼等を傷け、又時に殺すこともあるといふことだか、之は本當のことかね」

『花火』「閣下、大人が子供のやうに私をよく玩具にするのです、それで屢々財產だけでなく命をも失うことがあるのであります、私は之より危險な者であります、そして、廢物を取除く時以外は稀に必要な者でありますが、しかし私は火花を散らさないやうに束縛して置かなければなりませぬ、アラバマといふ所に一人の人がありまして、その人は私の性質を忘れて、ある風の强い日に古い鷄舍と廢物とを燒く爲に私に火をつけたのであります、所が其の近くに木製の垣根がありまして、私が其處へ達する迄に百九十一の建物がこわされてしまひましたのであります、兎も角、私には何の罪咎もないことを申上げます、何故ならば不注意な人達が私をいぢめさへしなければ私は火事を起さないのですから（元の席に復す）

書記「閣下、もう一人被告が殘つて居ます、それは『自然發火』といふ者であります（『自然發火』は被告席に着く）

書記「お前は外の者達と一緒に宣誓したね」

『自然發火』「ハイ致しました」

判官「話をすゝめなさい」

『自然發火』「閣下、多くの人達は私を怪物であると思つて居

ます・又火災原因の主要なものであると思つて居ます、しかし私は周圍の事情が私に都合のよい時に獨りで發火するものであるといふことを知つて貰ひたいと思ひます、世間の人達は亞麻仁油其の他の植物性油脂の滲みこんだ古い襤褸を部屋の隅つこの方へ積みつばなして置きます、こんなことをして置きますと私は化學作用によりまして非常な熱を出しまして遂に火を出すに至るのであります、又私は積上げられた油氣のあるものを燒くことがありますから、石炭殊に瀝青質の石炭が貯藏して居る人達は私をよく注意しなければなりませぬ、去年中に私がこの國で燒盡した價格は壹千萬弗に及んで居ますが、尙私といふものゝ存在を欺つて居る人があります」

判官『お前は、自分に罪のあるといふことを話して居るのかね」

『自然發火』『閣下、イヤ〳〵どう致しまして、私はたゞ〳〵どうすれば自分自身を救うことが出來るかと思つて申開きして居るのであります、化學作用は私の主人公に當りますそして不注意な人達が居るといふことが私といふ者の存在する重要な理由になるのであります」

判官「元の席に戻つてよろしい」（彼はその通りにする）、（判官は書記の方を振向いて）「もう被告は居ないかね」

書記「ハイ、閣下、もう居ません」

判官（檢事の方に向つて）、起訴の理由を述べ給へ」

檢事「判官諸公、これらの各被告は、自分の行についてそれ〳〵申開きしたことをお聞になつたでせう、彼等は自分達が特別の異つた犯罪に關係のあることも、亦恐しい幾千の災害に關係あることも承認して居ます、そして彼等は少しも悔悟して居ませぬ、又彼等が自分の行であるところの破壞的習慣を改めようとする何等の意志表示もして居りませぬ、判官諸公、これらの火災兇の申開きは却つて彼等達を自ら論難して居るかの觀があります、又彼等は如何に自分達が危險なものであるかといふことをしきりに申立てゝ居ますが、もし彼等がこの兇暴を益々逞しくすればこの非常に進歩したわが合衆國も遂には滅亡するかも知れませぬ、我々は彼等を看過して、この上彼等の跋扈跳梁による財貨の燒失をつゞけさすことは到底出來ませぬ、閣下、あなたがこれらの事實をよく御考慮になれば我が國の大なる脅威を除くがために、これらの被告を無罪にせられる筈はないと私は深く信じて疑はないのであります、彼等を矯正せしむる場所は牢獄より外にはありませぬ」、（席に復す）

判富「被告の辯護士は檢事の論告に對して何か反駁するであらうな」

辯護士「閣下、私は先づ本件は却下すべきものであると提議したいのであります、その理由といふのは檢事の有罪論の論據は薄弱であつて到底被告達を承服せしめ難いからであります、閣下、これらの各被告は大抵器具でありますし人間のための無心の器具でありまして、これらを用ひますと非常に役立つものであります、何故ならば、彼等は總べて力でありますから、しかしこの役立つ力には又害が伴うものであります、これらの被告の申開きは要する所最も完全な無意識犯であることを示して居るものであると私は主張致します、彼等は何時ものように働いて居たのであり、又

かような狀態では何時も意識があると同じように働くものであります。

世間の人達は彼等の天性をよく知つて居ます、又深く考へないで彼等に機會を與ればその結果はどうであるかといふこともよく知つて居ます、それにもかゝはらず、只彼等被告達が直接自發的に世間へ何等の貢獻をしないと云ふ理のみで非難するのは非難する者の心事を解し兼ねる次第です。又我々の火災の大部分に關係のあるたゞ一人の責任者であるところの『不注意』を何故裁判所に喚問しないのであらうか、又全國を通じてこれらの被告が兇暴を働く原因となるこの有罪者を何故この判廷の被告席に着かしめないのであらうか、彼の惡い感化さへなければこれらの被告はたゞの人類の奴婢に過ぎないでありませう」

判官「裁判所は今の論旨を採用したいといふ意見である、『不注意』こそ被告となるべきものであつて、彼等十一名はさうでない、檢事！『不注意』は何處に居るかね、この判廷はすべての火災の大部分の原因であるところの大罪人を檢事が見落したことは檢事の怠慢の然らしむる所であるといふ意見である（廷丁は步を移して檢事に注意書を與へる）

檢事「閣下、私は『不注意』を探して參ります、彼は今裁判所へ連行されて控室に居るといふことを聞きましたから」、

判官「彼を引入れなさい」（『不注意』はつぎはぎのみすぼらしい粗服を纏つて廷丁にあら〳〵しく扱はれながら判官の前へ引出される）

判官「本件に關し本廷で示された證據によると、『不注意』と稱するお前こそ正しく有罪人であつて、この判廷に引出さるべき者である、お前は年々歲々多くの人命をそこね、且つ數千萬弗に値する財物を燒盡したといふことであるが、何か辯疏する材料はあるかぬ」

『不注意』「閣下、私は亞米利加人の習慣に惡感化を受けたといふ以外に何も申上げることはありませぬ、私も子供の間は彼等の子供と一緒に遊びもしましたし、又生活も共にして今日に至つたのであります、外の國では私はあまり歡迎をうけませぬ、しかし、この合衆國では村でも、町でも到る處で老幼貧富の誰にでも大に歡迎さをたのであります、私は自分が危險であるといふことは充分認めますが、だといつて機會に乘じて不意に暴威を揮うことを好みませぬ」

判官「そりや單なる申譯に過ぎないから許すわけにはゆかぬ私は他の被告達の申立と、彼自身の承認によつてこの『不注意』こそ極刑に處すべきものであることがわかつたことを陪審官にお告げしたいのである」、（陪審官は着席のまゝ協議の上、陪審長は起立する）

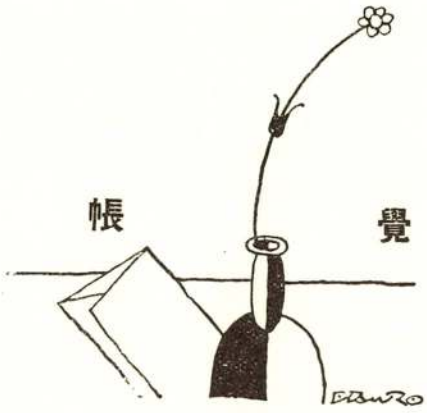
陪審長「閣下、我々も彼の有罪を認めます」

判官「お前は今の評決をきいたであらう。

次に私はその職務として正當の命令と一致するように茲に宣告を下すであらう、お前が有罪人であることは何等疑を挾む餘地がない、お前は市民の生活を脅やかし又市區の安全を破つたのである、お前は大勢の人を殺して居る、それで市中全體はお前の罪惡のために如何に恐怖を感じたかは思半ばに過ぐるものがある、お前は國中の幸福を破つて居る、お前は世間の人達の品性を時に傷つけ、能率を低め、又進步を阻止したのである、禁錮ぐらいはお前に取つては輕すぎる、その代りにお前の首にヒラをつけて、すべての人々がお前をよく知り、お前に近付かないやうにしてやらう、お前に遠島を申付ける、人の子一人居ないような國——何處の國でもお前を引入れ、又歡迎するやうな淺墓な人は居ないであらうが——わけてわが亞米利加は盡未來永久にお前を追放する

廷丁！彼を引出せ！そこで廷丁は彼を判廷から連出す）

判官「公判は次回へ延期する」　幕



建築法規の話

建築法規研究會（寄稿）

はしがき

我々は勿論建築法規に關しては、これを專門的に考究してゐるものではない。たゞほんの素人に過ぎないのである。けれども我々仲間の仕事の上に市街地建築物法なるものが、歴然と存在してゐて、建築物の建築に際して或は地域制に、空地制限にと、又は構造制限にと、我々の頭上に脅威の及を振ひ、その設計の上に、施工上に色々と牽制されてゐる。現に我々が今建築しつゝある某學校々舍の設計も、道路關係と建物の高さの比が、規定に抵觸した爲め、建築出願しても許可にならず、然もこれを根本から設計を變更し、計劃を改めて、ヤット建築許可になつた樣な次第で、この建築法規は我々に對しては、重大なる問題を有すものである。

これは我々が餘りにこの法規なるものを輕視したために原因して、この重大なる結果が將來されたのである。これは我々が隣合掌や隅棰の向留のスミとほゞ同一に考へてゐたのが、そもそもの間違ひの元で、是等の木割法と決して同日に論ずべきではないと、しみ〴〵今度の失敗で體驗したのである。

そこで我々はこのにがい經驗に鑑みて、こゝに我々志を同じくするもの二三が相集まり今迄對岸の火事視してゐた、この建築法規を主題としての研究會を作り、我々の不明を補ひ、未知を尋ね、この法規のために一層精進せん事を約したのである、その席上、關論された事、研究された事、決定されたことゞもの内、これを讀物として興味あるもの二三をこゝに揭載して、大方諸賢並に建築法規に關係ある當事者の一讀を乞ひ、我々のために可然指導を待つ次第である。

幸にして、我々のこの企てが靜池に投ずる一石となり、斯道諸賢の興味を得れば、我々の目的の大半はなしとげられたのであり、その上若しも我々に對して指導的意見の交換を得るならば、これまた望外の賜である。望むべくんば、宜敷く善導指示されん事を。

尙また我々が次々に發表することゞもが、不幸取締當局の事務處理上支障を來す場合、または或部分が、只我々のみの意見で、これは妄論たる際は、勿論我々は是等の總てを無條件で、撤去することに躊躇するものではない。

是等の事を本欄當初に明言して本稿を書綴らんとする。

（一四、一二、一五 陳）

防火地區内の建築物の變更工事について

問　防火地區内の建築物の新築とか改築の際は、その外壁や屋根は耐火構造にせねばならぬと云ふ事は覺悟してゐますが若しこの地區内の木造建築物の一部を大變更したり、または大修繕したりする場合でも、その部分を、或はその建築物全部を市街地建築物法施行規則第四章に規定された條例に縱されねばならぬと主張する人がありますが、若しもこの場合にそんな、難しい規則に寄らねばならぬのでしたら、今後防火地區内の建物の所有者は、何んの建築工事も出來ないと云ふ事になりはせないでせうか、如何なものでせうか。

以上の如き、防火地區内の木造建物の建築工事についての質問が出たのであつた。そこで我々はこれを題材として、研究會を催したのである。その結果として次の如き解答文を得たので諸君の批判を希ふ。

答　先づ第一に必要な條文を拔萃して說明を致します。

市街地建築物法施行規則第百十九條　甲種防火地區内ニ在ル建物ハ其ノ外壁ヲ耐火構造ト爲スヘシ

第百二十條　甲種防火地區内ニ在ル建物ノ軒、軒蛇腹、屋窓、裝飾塔ノ類ハ不燃材料ヲ以テ構成スヘシ

第百二十二條　甲種防火地内ニ在ル建物ノ屋根ハ耐火構造ト爲スヘシ

第百二十六條　乙種防火地區内ニ在ル建物ハ其ノ外壁ヲ耐火構造又ハ準耐火構造ト爲スヘシ

第百二十七條　乙種防火地區ニ在ル建物ノ軒、軒蛇腹、屋窓、裝飾塔ノ類ハ不燃材料ヲ以テ構成シ又ハ被覆スヘシ

原則として防火地區内の建物は規定に依りますと、大體その外壁を耐火構造或は準耐火構造及施行規則第四章に規定された條文に適合するものでなければなりませぬ、然し建築物法は既往に溯らない事を條件としてゐますから、さしすゝめその建築物を建築するに際して、この規定に當嵌めるより外に方法はありません。

そこでお尋れに依る既設建物の大變更或は大修繕について考へて見ますに、この工事はその建物を建築することにはして（大變更工事でも、大修繕工事でも）何等の變りはないのですから「その部分を建築するには、この建築の外壁を耐火構造、或は準耐火構造と

なすべし」と云つても決して間違つてゐないであろうと存じます。それ故、出來得る限りこの際都市災害防備のためこの建築物を規則第四章の規定に適合する様工事されるならば、防火地區設定の主旨にも叶ひ、又問題はないと存じます。一面法規上からも、斯くなさればならぬのであります。

然し、此にかう云ふ事も考へられます。その大變更なり或は大修繕工事が、ほんの局部的な工事ならば、云ひ換へると、一寸した變更なり修繕をした爲めに、大變更工事をせねばならぬ様な事になるのでしたら、それは餘りに法の解釋が冷酷である、餘りに條文に拘泥し過ぎだ、建築のなんたるかな心得ぬ世間杓定木な云ひ分でないかと思ひます、然しその大變更なり、大修繕が殆んど改築に近い様な工事ならば、極端な一例かも知れませぬが、ある人の話に「大變更を二度やれば、その建物は改築になる」と云つた者がありますが様に、その工事の大いさの程度によつて、それは勿論無條件に規則第四章の規定に適合せしめねばなりませぬが、ほんの局部的な工事を施工される程でしたらばたとへ規則第四章の規定に適合せなくとも、その儘で工事されても、次に述べる理由に依つて、規則上一向差支へないかとも我々は考へてゐるのであります。

其の理由とは、我々はこれを先づ根本の小さい問題から引き合します。即ち甲種防火地區でも、乙種防火地區でも指定されは敷地は、その都市に於て有數な(高價な)土地であり、その上に建設された建築物もその都市としては先づ第一流の建物でなければなりませぬ。社會的には如斯き主要道路の兩側の建物は、都市美觀上將來とも貧弱な木造建物では決して濟されない場所の建築物であり、一方經濟的方面から考へて見ても、是等の建物はいつでも耐火構造に改造し得る可能性のある人々の所有地或は借用地の地區を主として選んで、これを防火地區に指定されたものが多いと、我々は現在、當局が防火地區に指定された所の結果より見て、かく想像されます。又防火地區に指さ定れた場所は、火災に對して最も危險率の高い箇所でありますから、その建物が可燃性な木造では不安で、永久の使用建物とする事が出來ませぬ。

以上の様な理由に依つて、これに適合するところの建築敷地が即ち防火地區なのでありますから、その様な場所のその主要な建物を已むを得ず一部を變更したり、修繕したりすることは、將來何年か後には必ず全部改築する前提だと判定しても決して間違はなからうと思ひます。何んとなれば、その建築物を使用する上に於いて、そこに何か不便な事が起つて實際上已むを得ぬ爲めに、大變更工事をするのであり、また一寸柱とか梁とか屋根の一部が腐蝕したが爲めに、修繕工事をされるのであります。誰が物好きに毀したり、繕つたりする人がありませうか、その建物は現在のその使用者に取つては、決して完全無缺な建築物ではありません、不便を耐へたり、不愉快を忍んだりして、何かの都合上、日の苦痛を感じつゝも使用されてゐるのでありますから、ゆく〳〵はそれも最近に必ず、それを全部改築するに決まつて居ります。毎日感ずる不便な思ひは、規則第四章の防火地區の規定に依つて增加する建築工事費よりも甚しい筈でありませう。又これ立の事柄を證明するだけの實例を我々は市内に澤山持つて居ります。

それ故にこの建物に大變更をしたり、大修繕をしたりすることは、とりも直さず、その建物を一時の使用に供するものである。即ち將來全部改築する迄のほんの假の建物であると考へられます。一時の使用に供する建築物は、規則第百三十五條の二に依つて、規則第四章の規定に拘らず、必要な命令を發し又は處分をなす事を得とあります。云ひ換へると規則第四章の規定に適合させなくともよいと解釋されます。

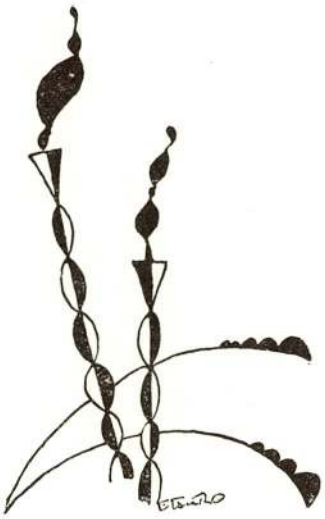
市街地建築物法施行規則第百三十五ノ二　地方長官ハ防火地區内ニ在ル建築物ニシテ一時ノ使用ニ供スルモノニ付第百十九條乃至第百三十五條ノ規定ニ拘ラス必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

この條例に依つて、その工事が、ほんの局部的な大變更工事なり、大修繕工事でありましたならばそれは、たとへ防火地區内の木造建築物であつても、規則の施行規定第四章に拘らず、木造の儘で建築しても差支へないと思ふのであります。

この結果より見て、同様な理由で一部の改築、一部の增築も同じではないでせうか、けれども、これは聊か疑問であります。

然し是等の事は我々が、只法文の條項に依つて解釋した我々の考へで、當局の防火地區に對する方針は我々には解り兼ねます。またその工事がたとへ局部的だと決めて居られても、當事者は何んと認定されるか、其の程度も不明でありますれば、木造で大變更なり、大修繕されても支障ないとは思ひますが、尙大事を踏んでこの様な場合には、即ち防火地區内の建物の建築工事をされる際には、一應その出來た設計圖を、出願される前に、先づ所轄警察署なり或は府の建築課へ持參されて、よく規則第四章の說明を求められ、その圖面に依つて相談される必要があると信じます

（この項終り）



俳壇

猫の戀
陽炎

齋藤溪舟選

猫の戀

猫の露路を鳴きつゝ戻りけり　白甫
あづま屋を離れてゆくや猫の戀　同
戀猫や出窓障子を震はせて　同
暗き庭を横ぎる白し戀の猫　同
戀猫の月の廂を鳴てゆく　未乾
戀猫のうつり行きけり庭續　同
戻りきて常のおもてや戀の猫　同
春猫のあほつ夜風や松の門　同
猫の戀日影の窓をすり〳〵に　月雨
戀猫のあるいてゆくや土の霜　同
灯影一つ冷き庫裡や猫の戀　同
猫の妻月の木蓮ちらしけり　朱廊
猫戀の鈴鳴し來し裏戸哉　同
戀猫の半身月を浴びてあり　同
猫の戀障子へだてゝ鳴にけり　保月
別れ猫また振返り鳴にけり　同
どうと落ちて左右に逃ぬ猫の戀　同
そのまゝに飯乾きけり猫の戀　朧月
庇蹈み外すかと思ふ猫の戀　同
戀猫やびかしてゐるトタン屋根　紫波
薄月の塀を戻りぬ猫の妻　同
紅梅の垣に來て猫は鳴にけり　麻宮
戀猫や雨の空地を斜かひに　同
戀の猫の隱れし處炭俵　九華
老猫や日の縁にゐて他の戀嘯　谷
猫の戀日に日に芽出し柳哉　同

陽炎

陽炎や海草砂に乾しひろげ　紫波
陽炎へる砂丘を越すや艪を肩に　同
寝そべればひろげし袖かげろへり　同
陽炎や支那藝人を取かこみ　同
陽炎や江に遙なる高榎　未乾
糸遊や松と櫟の山畑　同
浮木ある處かげろうお濠かな　同
講人や陽炎の畝またぎくる　同
山の尾の湯の町や山は陽炎へり　白甫
陽炎のもえてめぐりぬ大碑石　同
樋の上にもつれては消え糸遊す　同
陽炎へる中を馬牽き通りけり　同
陽炎や富士遠く見えて野の廣き　月雨
屋根草のかぎろひて日の眞晝哉　同
陽炎の立つ砂山をありきけり　同
しんし張れば搖れ動く布や陽炎へる　朱廊
積株天日にいきりかげろへる　同
馬盥に水を湛へてかげろへる　同
引上げてある磯舟やかげろへる　保月
陽炎や藥草探り〳〵ゆく　同
陽炎や人去りてのちの供養花　同
射撃場に燃ゆ陽炎や堤の松　眉山
鹽田にかげろう遠くありにけり　同
陽炎や藻草乾く香にひたりゐて　同
陽炎や廣き芝生の臥牛石　とは女
陽炎や淺川の水かちわたり　同
陽炎や晒布塲さむき磧風　綠川
陽炎や東寺の塔の歪むかと　同

俳句を歡迎す

―（奮つて投稿あらん事を望む）―

◇課題　『春の野』（野遊び、蹈青、青きを蹈む、青き蹈む）

『日　永』（遲日）　各題五句まで

各題別紙記す

◇期日　四月二十日限

◇屆先　大阪市堂ビル三階日本建築協會



〔俳　話〕

主観客観のはなし

舟溪

◎この間、私はある席上で俳句の話をした時に、居合せた一人から次のやうな問ひを受けました。

(一)「俳句といふものは、元來何の爲めに作るものですか」

(二)「俳句は作つて、それを何うしておくべきものですか」

◎この問者の心持は、作句の目的、作句の始末、この二つが分らないから説明してくれといふ點にあるのです。

◎私はこれについて次のやうに答へておきました。

(一)「何の爲に作るものでもありません、約りは我々の思想感情を發露するためです、これは他の詩歌や文章の目的と同じ事です。人間は詩がなくても活きてゐられないことはないでせう、しかし活きた人間には思想感情なしではゐられません、その思想感情の發露が、我々の人生を彩色して住みよく活きよくしてくれます、ですから句を作るといふこともつまりはその究極にあるわけです」

(二)「句が作れた、出來上つた、それで作句の目的は達してゐるわけです。必ずしもそれを他に發表しなければならないとか、書き遺して後世に傳へなくてはならないとかいふのは、第一の目的ではないでせう、善い句が作れて、そこに自分の思想感情がうまく盛られてあれば、それでその作句家の願ひが滿されたといふべきです、しかし、その句を人に示したり、研究したりすることはよいことでせう」

◎その席で私は、句の客觀、主觀といふことについても話しました。

◎客觀の句がよいか？主觀の句がよいか？句はよろしく自分を出さなくてはいけない、故に主觀の句でなくてはだめである、といふやうなことが此頃盛んに云はれてゐるやうです。成程さうかもしれないが、果して主觀の句がよいならば、客觀句などは作らずに主觀句ばかり作ればよいのですが、作句をするのに、そんな心持でゐたくはない、またそんな狹苦しいクギつたものではあるまいと思ひます。

◎主觀でも客觀でも、善い句は善いにきまつてゐます。

◎芭蕉は主觀で、蕪村は客觀です。むろんこれは大たいに於てです。

◎本誌の投句家の句には、よほど客觀のが多いやうです、つまり蕪村流の人が多いやうです。

◎蕪村の

春風や堤長うして家遠し

は純客觀です、つまり見たまゝを句に云現してゐます。芭蕉の

白魚に價ひあるこそ恨みなれ

といふ句は純主觀です、即ち白魚といふものは誠に美しい風雅な、俗氣のない魚であるが、こんな魚でも一合いくらとか、百目いくらとかいつて、價ひをつけて賣買してゐる、その價ひなどいふ俗なことのあるのが、如何にもざん念千萬であるワイと云つてゐる、その「あるワイ」といふ點が誰でも彼でもさう感じるものではない、芭蕉が特にさう感じて云つた處に「自分の了見」が出てゐる、即ちそこが主觀なのです。

◎もしこれも

白魚を價ひ定めて賣りにけり

とあれば客觀になります、何等そこに作家の「了見」も「批判」も出てゐず、見聞のまゝを句にしたからです。

◎ある人の句に

噺りや地球廻るとふと思ふ

これはチヨット突然の云ひ樣のやうにもきこえませう。けれども全く左樣ではありません。

◎噺りといふのは、寒い時分に、小鳥などが春を待つて、チユツ、チユツと鳴いて、本鳴きの前ぶれをしてゐるのが「噺り」です、作句者はその噺りの聲を聽いた瞬間、フト、この地球が廻つてゐると感じたといふのです。

◎ソンな馬鹿な事があるか、餘りベラボウだ、と人は笑ふかもしれませんけれども、それは笑ふ方がムリです。何故なれば、世界全體の人が「噺りをきいたつて、地球が廻るやうに感じられるものか」と否定してかゝつても、作句者只一人だけが、實際さう感じたならば仕方のない事です。

◎これはその意味に於て、立派な主觀の句です。

◎世界中の皆が否定しても、自分一人だけソウ感じたところの、立派な主觀句です。

◎しかし、如何に主觀の句に立派なものがあらうと、必ずしも主觀の句のみがよいワケはなく、客觀の句にも立派なのがある事は無論です、全體句を作るのに客觀のを作らうとか主觀にしてやらうとか、そんな事を目標に立てゝ作句するほどバカげた事はなく、主でも客でもその場合々々、捉まれずにやつてゆくに處句の妙味がある筈です。

◎主觀句でなければ思想感情が出ないワケではありません、前に出した蕪村の「春風や堤長うして家遠し」といふ句をよむと、たゞそれ丈けの景物が眼底に彷彿する丈けではありますまい。その景物の中に或る情緒がわいてきて我々の觀照はその景情をいろ〳〵に看廻します、そして心の働きが主になつたり、景情が主になつて心を動したりして、そこに主觀も客觀も働くワケです。我々の觀照心といふものは、單なる句面の文學のみコピりつくほど死物ではないのです。

會告

入會金免除の件

當協會本年二月例會幷通信決議に依り新入會者の爲に三月八日より五月末日迄（但し此期間中に當協會が社團法人設立の許可を得ましたれば定款により直に免除を廢します）入會金を免除することになりました此際奮て御入會を希望致します

尙會員諸君の新入會者御勸誘を切に御願致します

大正十五年三月

日本建築協會

會報

一、當分入會金免除の件

別項會告の通本年二月例會並に通信決議に依り會則第二十條第三項の入會金を當分免除することゝなりましたから會員各位の新入會者御勸誘を切に御願致します

一、都計委員會委員長其他委員會の件

都計委員會委員長は缺員でありました處去る三月十一日同委員會に於て安井武雄氏委員長に當選承諾を得ました尙今回津田敏雄氏に同委員を又山本久吉氏に構造計算調査會委員をお願ひ致しました

一、會員逝去の件

會員片岡勇夫君は二月十七日逝去の通知に接し洵に痛悼の至りであります本協會は早速弔狀を呈し哀悼の意を表しました

一、技術者資格檢定試驗制度設置の件

社團法人日本工業俱樂部より技術者資格檢定試驗制度設置に關し左記掲載方依頼かありました尙檢定試驗規則及細則は當協會事務所に備へ付けてありますから希望者は隨意御閲讀下さい

技術者資格檢定試驗

日本工人俱樂部で行ふ本邦唯一の技術家登龍門

學閥打破、社會的正義の確立を標榜して立つ日本工人俱樂部では多年の懸案であつた技術者資格檢定試驗を昨年五月その第一回先づ土木科第三種（工手學校程度）のみについて行つたが其結果は豫期以上の好成績を收めたので大に氣勢を揚げ本年は更に範圍を擴め土木科第二種（高工卒業程度）及同第三種（以上委員長茂庭博士）機械科（委員長丹羽博士）建築科（委員長内藤博士）應用化學科（委員長鴨居博士）の第三種（工手學校卒業程度）試驗を行ひ所期の目的に向つて邁進するそうである。此の試驗に合格した者は各科委員長は素より各委員は責任を以て社會に推薦し工人俱樂部の職業紹介機關と相俟つて就職の便宜を圖るといふから、家庭の事情や經濟的障害により正式に學校を卒業し得なかつたために不遇の地位に置かれ騏足を伸ばし得ない多數有能な技術家に取つては天來の福音と謂はねばならぬ。試驗は本年五月六日から別項の試驗規則及同細則に據り第二種は四日、第三種は三日間施行される。詳細は東京丸の内仲通六號館の日本工人俱樂部へ照會すれば親切に回答してくれるといふことである。

一、懸賞募集の件（二件）

A、神奈川縣廳舍建築事務所長より左の規程により廳舍設計圖案を懸賞募集せる旨申越して來ました尙添付圖面は當協會事務所に備へ付けてあります

神奈川縣廳舍建築設計圖案懸賞募集規定

第一條　神奈川縣廳は本規定により神奈川縣廳舍の建築設計圖案を募集す

第二條　審査の上當選者には左の等級別により賞金を交附す

一等賞	一名	金五千圓
二等賞	二名	各金三千圓
三等賞	三名	各金二千圓
等外佳作	若干名	各金一千圓

第三條　應募設計圖案は左記期限迄に到達する樣橫濱市岡野町神奈縣廳内廳舍建築事務所宛に提出すべし

大正十五年六月十日正午

第四條　應募設計圖案は左の事項を具備することを要す

一、配置圖　縮尺三百分の一
一、各階平面圖　同　二百分の一
一、立面圖（三面以上）　同　同
一、斷面圖（縱橫重要部分斷面二面）　同　同
一、主要詳細圖　同　二十分ノ一
一、透視圖　ワットマン全紙大
一、說明書　半紙判　大

第五條　圖面及書類の作成は左の方法に據るべし

一、各圖面は總て製圖原紙に墨を以て書き寸法は日本尺に依り記入すべし
二、圖面中の文字は邦文を以て明瞭に記載すべし但し寸法に限りアラビヤ數字を用ふることを得
三、圖面には陰影を附することを妨げず但し透視圖の外は着色することを得
四、圖面に記入すべき各室の名稱坪數等は直接其の位置に記入し番號符號等を用ひ他の位置に記載すべからず
五、配置圖に於ける建物平面は單に外線のみとし庭園道路等を現すことを要す
六、透視圖に於ける畫面（ピクチユヤプレーン）は建物の南隅と一致し且建物の東南正面と三十五度の角度を保たしめ其視點は建物の同一隅より二百五十尺の距離にして其水平線は地盤面上高十二尺の位置にあるものとす
七、說明書には設計要旨及材料構造の概略を簡明に記載すべし

第六條　圖面及書類には總て署名に代ふるに每葉暗號を記載し別に暗號のみを表記せる甲封筒内には應募者の住所職業氏名を明記せる紙片を封入し乙封筒内には還付を受くべきもの、住所氏名を明記せる紙片を封入して之を添附すべし暗號は文字に限る

甲、乙封筒は神奈川縣より之を交附す

第七條　設計圖面及書類は一括して堅牢なる器容に納め嚴封を施し表面には宛名、應募者の暗號及應募設計圖案たることのみを表示すべし

第八條　應募に關する費用は應募者の負擔とす

第九條　應募したる設計圖案は左記の審査委員之を審査す審査の結果に對しては說明を求め又は異議を申立つることを得す

工學博士　片岡安
工學博士　佐野利器
工學博士　大熊喜邦
工學博士　佐藤功一
工學博士　內田祥三
工學士　岡田信一郎
神奈川縣內務部長　小柳牧衞

第十條　審査は大正十五年六月三十日迄に結了するものとす

第十一條　審査の結果は官報を以て發表し且つ當選者に通知す

第十二條　審査に關與する者は募集に加り又は應募者に幇助を與ふることを得す

第十三條　左の各號の一に該當するものは之を審査せず

一、他人の意匠剽竊せりと認めたるもの

二、本規定に違背せりと認めたるもの

第十四條　當選設計圖案に付應募者の有する一切の權利は當選と同時に神奈川縣に歸屬す

第十五條　當選せざる設計圖案は神奈川縣の費用を以て之を還附す

第十六條　應募者は左に揭ぐる事項を承諾したるものとす

一、當選したる設計圖案と雖も實施の場合には之を取捨變更することあるへし

二、應募設計圖案は審査終了後暗號の儘公衆の展覽に供することあるべし

三、應募設計圖案の保管及還附に關し十分の注意をなすと雖も萬一損害を生じたる場合には神奈川縣は其の責に任ぜず

設計心得

一、建築敷地は橫濱市本町壹丁目に於ける舊縣廳跡にして添付敷地測量圖に示したる着色區域とす

二、敷地は商業地域、甲種火防地區內にあり

三、敷地は平坦にして周圍道路面より約一尺高し

四、敷地坪數は約三千四百十六坪とす

五、敷地は砂利層にして安全地耐力は一平方尺に約三噸となすを得べし

六、應募設計は市街地建築物法の規定に據るものとす

但し塔又は圓屋根頂の高さに就きては或程度迄市街地建築物法施行令第四條但書を適用するの餘地あるものとす

七、添付間取略圖は建物內に配置すべき各室の配列關係及大さを參考として示したるものなるにより應募者は必しも之に拘束せらるゝ要なきものとす、間取の計畫につきては充分なる研究を望む

八、應募設計圖案は船舶出入の際港外よりの遠望を考慮し成る可く縣廳舍の所在を容易に認識し得る意匠たることを望む

九、建物は耐震耐火構造とし建築材料は已むを得ざるもの、外本邦產を用ふべし

一〇、建物は東南面を正面とす

一一、建物は總延坪數を約五千五百坪とす

一二、建物總工費は二百十萬圓以內とす但し裝飾、煖房、電燈、排水、給水造庭、其の他附屬設備費事務費等を含まず

一三、電氣及瓦斯は外部より供給を受け煖房蒸汽裝置、通風は自然換氣、汚物は淨化裝置により處理するものとす

一四、懸賞募集に關する質疑は神奈川縣廳內廳舍建築事務所宛書面を以て問合すべし

一五、應募者の住所氏名變更したる時は其都度書面を以て通知すへし、但し封筒には「變更通知」の四字及暗號のみを記載すへし

一六、敷地は開放してあるを以て隨時視察することを得

一、文化創設會より左の規程により是亦住宅設計圖案を懸賞募集致して居ります御參考迄に

第參回住宅設計懸賞募集要項

本會は曩に貳回に亘り、住宅建築の設計懸賞募集を行ひました、何れも皆樣の御聲援に依り、非常なる成功を收め吾名古屋地方建築界に得る處又實に大なるものでありました

今回茲に第參回の住宅設計懸賞募集を行ひます、最早吾々は在來の文化住宅と言ふものにも倦怠を感じて來ました、內部にも外觀にも、そこに何かの新たらしい構想を望んで居るのであります。何卒此の機會を得まして皆樣が蘊蓄せられる御傑作を拜見吾々に近時代の新らしき何かを敎へて頂きたいと思います。

募集要項

壹、建設地　名古屋市郊外霞ヶ丘住宅地約貳萬坪のゆるやかなる丘陵地域

貳、敷地　約壹百坪前後

參、建坪　約貳拾五坪二階建（延坪參拾坪以內）

四、工費　坪當り壹百五拾圓以下

五、樣式　木造にて內部、外觀共自由、

六、瓦斯、水道、なき場所故、相等の設備を考慮する事

應募規定

壹、平面圖（縮尺百分ノ壹）壹枚
貳、正面圖（縮尺五拾分ノ壹）壹枚
參、側面圖（縮尺五拾分ノ壹）壹枚
四、斷面圖（縮尺五拾分ノ壹）壹枚
五、用箋寸法　原圖紙（尺七寸、二尺二寸）

六、仕上げ　墨入、鉛筆、彩色、何れも自由

七、說明書　簡單なる說明なれば圖

面に記入差支なし
八、應募圖面には暗號を附し、別箋暗號と住所姓名を記したるものを嚴封添付する事
九、入選圖面の權利は本會の所得とす
拾、選外圖面は希望者にのみ返却（但し送料御自辨）
◎締切り、大正十五年四月廿五日
◎審査の公平を期する爲、當選名發表以前に於いて當地適當なる所にて應募作品展覽會を催す
◎當選發表は大正十五年五月十五日發行本會雜誌（樂ある生活）にてなす
審査員　工學士　鈴木　禎次氏
　　工學士　佐藤　四郎氏
　　工學士　中澤誠一郎氏
　　工學士　土屋　純一氏
　　　　鷹栖　一英氏
　　　　桃井　保憲氏
◎審査の上優良のものには左の賞金を呈す
　一等　壹百圓　壹名
　二等　參拾圓　貳名
　三等　拾圓　參名
　佳作　若干名
◎應募場所
　名古屋市中區門前五丁目
　大須ビルヂング三階拾參號
　　文化創設會
　　懸賞係宛
一、新刊紹介
今回建築資料研究會より米國に於ける「スヰート、キヤタログ」に倣うて「第一回土木建築資料總覽」なる好書刊行され當協會へも壹部寄贈ありました
發行所　東京市赤阪區田町七丁目
　　三番地　建築資料研究會
定價　壹部金拾參圓　五年繼續講讀　壹部金拾圓

會合

緊急理事會

△日時　二月二十七日——正午二時三十分
△會場　大阪市中央公會堂地階大洋軒食堂
△出席者　園部理事長、和田理事、小川理事、澁谷理事、須川理事、光安理事、八木理事、古塚理事、酒井理事、
△議事　人事に關する件

構造計算調査委員會

△日時　三月九日午後六時——八時三十分
△會場　本協會會議室
△出席者　委員長　增田清
　　委員　青柳貞世　鹽路惣吉
　　　　渡邊圭吾
△記事　一、增田委員長より左の件に關する回答書に付朗讀報告あり
1、震災豫防調査會報告書購入に關する件
震災豫防調査會殘務係よりの回答書
2、各セメント會社最近試驗成績表取寄せの件
　大阪市立工業研究所よりの回答書
　商工省大阪工業試驗所よりの回答書
一、架構物の風壓に對する圖式解法に關する件に付質問書ありしを以て之に對する回答に付諮りし結果增田委員長に於て取調べ回答案作成のことに決す
一、本夕は出席委員少數に付調査研究を見合せ意見の交換をなし散會せり

都計委員會

△日時　三月十一日午後五時——九時
△會場　本協會會議室
△出席者　主査　池田谷久吉
　　委員　置鹽章、小川安一郎、加藤善古、谷民藏、安井武雄、古塚正治、宮本長治
△記事　一、池田谷主査より本夕當委員會開催の理由を述べ次で現時委員長欠員となり居るに付先委員長選擧の提議ありて互選の結果左の通決定せり
　　委員長　安井武雄氏
一、安井氏座長席に着き委員長就任の挨拶ありて後池田谷主査より左の件に付提議の理由說明ありて協議に入る
防火地區内に於ける壁面の位置指定に關する件
右協議の結果要するに時期を俟つことに決す
一、次いで本委員一名依囑方を理事會に要求すること及次回委員會の問題に付協議決定して散會を告げたり

定例理事會

△日時　三月十二日午後五時——九時三十分
△會場　本協會會議室
△出席者　片岡會頭、和田理事、小川理事、澁谷理事、須川理事、光安理事、酒井理事、
△報告　一、二月分會計報告
　二、安井武雄氏委員長に當選したる旨都計委員會より報告
△議事　一、三月例會に關する件
　三月例會に關し左の事項を議決せり
一、時　三月二十四日（水）午後六時
一、所　大阪市中央公會堂中集會室（北區中ノ島）
一、順序
1　講演　北米に於ける建築施行法の實狀に就いて　下浦光衞氏
2　報告　會務報告
3　實費精算式施工契約書及同規

定に關し臨時調査委員會設置の件

一、尙從來例會通知には往復端書を用ひ來りしが爾後回答を得て準備を要する場合の外は通知のみに止むることに決定

二、當分入會金免除に關する通信決議の件

當分入會金免除に關し左の通信決議を發したる結果次の贊否數を得て贊成者大多數に付可決せり

通信決議

會則第二十條第三項の入會金を當分免除するの件

御承知の通當協會の社團法人となることも追々近いて來ましたので此際前揭の入會金を免除して會員の募集を致したいと存じます

免除期間は三月八日より五日末日迄とし此期間中に幸社團法人設立の許可を得ましたれば直に免除を廢することに致します

右は二月例會に於て緊急に議題となり多數の贊成を得ましたが決議するに至らず通信決議とすることに決しましたので茲に御贊否を問ふ次第であります就ては來る三月七日迄に御回答を煩します

追て萬一右期日迄に御回答なき方は御贊成下されしことゝして採決致しますから左樣御了承を願ひます

大正十五年三月一日

日本建築協會理事長　園部文雄

右通信決議回答數

贊成數　一四六名
不贊成數　六名
贊否不明　二名
贊否回答なきもの　二三八名
會員總數　三九二名

三、其他左の諸件に付協議決定せり

1. 構造計算調査委員會より要求の件
2. 都計委員會より要求の件
3. 建築士法案調査委員會委員一名辭退の件
4. 實費精算式施工契約書及同規定草案に關する回答の件
5. 雜誌寄贈先取調の件
6. 雜誌に揭載方依頼に關する件
7. 會員證衡

新入會々員及贊助員

會員の部

松村　俊雄君　京都市東ノ洞院四條下ル西側
山本　久吉君　此花區春日町北港住宅方
一ノ一
山本　米一君　京都市下京區高倉通五條下ル
久留　弘文君　兵庫縣武庫郡魚崎町橫屋〇二
安藤伊右衞門君　港區市岡町二九三ノ二
松下　藤治君　東區北濱四ノ五〇宗建築事務所
片岡　長參君　此花區上福島北一ノ二九
前島　成之君　東區北濱四ノ五〇宗建築事務所

特別贊助員の部

菅野　久一君　天王寺區谷町九ノ三四

普通贊助員の部

由貝　基夫君　神戸市熊內町竹中工務店
石田　曾次君　神戸市莊田町三ノ四五ノ一一
內海常一郎君　港區大正通七ノ四九
田平　宗美君　京都府伏見町革屋佐藤方
小崎　春記君　岡山縣都窪郡倉町旭町
弓馬　重龜君　神戸高等工業學校建築科
寺田　熊雄君　浪速區木津川町二ノ八三
高野　又助君　東區今橋四ノ六建材社大阪出張所
上西　五郎君　同上
竹內　雄三君　同上
前田　立一君　本鄕區丸山福山町一八

退會々員及贊助員

會員の部

小林　東君　永田正雄君、近澤武男君

地方會員の部

後藤信勝君、宮本金七君

普通贊助員の部

金田秀政君牧、田暉君、竹內忠正君、熊野正八君、岡屋久吉君、木南文太郎君、中島壽人君、澤伊三萬君、池田熊太郎君吉村種敏君、西村圓二君、向井兼藏君、起田善吉君、越野忠一君、吉田安彥君、辻謙吉君、久米平藏君、川村秀介君、海津勝人君、森興助君、松宮幸輝君、守山雁三君、杉田新五郎君、松山寅雄君

住所及勤務先移動

會員の部

濱田　正三君　西成區粉濱町二二六
中島　智喜君　北區曾根崎中二大同病院建築寮
荒川　貫直君　西淀川區大仁町七〇大阪電球株式會社
神戸　重次君　此花區春日出町中一ノ一
簇原　太郎君　東洋紡社宅甲一六
近石　正義君　東淀川區十三東之弓二四
矢田　鐵藏君　港區八幡屋寶町四ノ一三
高橋　君三君　府下三島郡吹田町榮町一二四五
白水　進君　天王寺區小宮町四〇西山方
和田　信君　福岡縣筑紫郡春日村春日
兵庫縣大社村香櫨園彌生通根箭庭內

地方會員の部

羅本賢太郎君　神奈川縣鶴見町豐岡八〇
福永　茂明君　一石黑方
松野　彥一君　東京市赤阪區嬜南坂町九
神戸市阪口通七ノ三ノ五六
高松吉三郎君　福岡縣朝倉郡衣須村中牟田

本多　二郎君　東京府下杉並町阿佐ヶ谷二三一

木村　多喜君　東京府下杉並町阿佐ヶ谷原日向二〇八

時田泰三郎君　東區餌差町二〇五

特別賛助員の部

高橋　清光君　港區市岡町九四

普通賛助員の部

遠田　音吉君　大阪府下守口町士居瀧井四六四

古林　秀雄君　兵庫縣住吉村防ヶ塚四五八ノ一

伊藤　敏夫君　西成區紺濱町五五三ノ八

石田　敏樹君　港區五條通一ノ一二

井上伊佐武君　住吉區松原町四八

中野　利男君　神奈川縣川崎市南河原五九米田方

黒明　澄夫君　東成區今福町本通五一

木原　駒作君　兵庫縣西灘村稗田一ノ二四

倉崎太三郎君　東京市小石川區水道端町一ノ一一栗田組

酒井紋之助君　大阪府下豐中高砂通二ノ一〇四

今井　圀一君　岐阜縣惠那郡中津町横清水町

原田俊之助君　東京府下中澁谷神山七七一

井上　義一君　東京府下北品川町二一五保川方

山本　一善君　德島町海部郡牟岐町一二四

吉田光太郎君　東京市牛込區市ヶ谷加賀町大林組市ヶ谷出張所

中村　重壽君　西成區粉濱町七四一

小林市太郎君　奈良縣吉野神宮修築工務所

歸朝

下浦　光衛君

植賀宗三郎君

右兩君昨年來歐米建築界視察中の處執もこの三月無事歸朝されました。

役員及職員

會頭　片岡　安

副會頭　宗　兵藏

理事長理事園部　文雄

主記理事　和田貞治郎

同　理事　小川安一郎

庶務係

主計理事　澁谷　五郎

西谷　節

同　理事　須川廉太郎

鷹取　陽

編輯理事　古塚　正治

編輯係

同　理事　光安梶之助

江村　郊郵

同　理事　池田谷久吉

會計係

同　理事　八木幸次郎

大和　榮衛

同　理事　酒井勇三郎

山口　スエ

會員	三九〇	會員（地方）	一七五
名譽賛助員	七〇	終身賛助員	五三
特別賛助員	二六	普通賛助員	五〇〇
合計（三月二十日現在）	一二一四		

本誌定價表

本誌	册數	定價	郵稅
	一册	七拾五錢	貳錢
	十二册	九圓	貳拾四錢

大正十五年三月三十日印刷（毎月壹回）
大正十五年四月一日發行
發行兼編輯人　大阪市東淀川區中津町一九八番地　江村恒一
兼印刷人　大阪市東區内淡路町一丁目卅一番地
印刷所　大阪活版所　大阪市北區堂島濱通一丁目一番地堂島ビルヂング
發行所　日本建築協會　電話北四二九一番　振替口座大阪三九九七五
特約販賣店　大阪市西區京町堀羽子板橋北　柳々堂書店　電話（土佐堀二四四〇番）　振替口座二〇八四番

理想的屋根ノーレス形体



浅野スレート
日本石綿盤
朝日スレート
金剛スレート

品質堅牢
体裁優美

日本スレート販賣株式會社

本社　東京市京橋區三十間堀三丁目
電話銀座 1860・1861・1862番

支店　横濱市本町六丁目七十九番地電話本局(2)5406番
大阪市北區堂島ビルデング三階電話北(2)2918番
門司市東本町四丁目　電話(2)548番

出張所　名古屋・仙台・京城

●第九集　第四号　掲載広告一覧（掲載順）

大野正営業所
日本エレベーター製造
特許エレベーター製造
浅野スレート大阪出張所
永柳商店
東洋コルク工業
伊丹商店大阪出張所
カール・ツアイス
裳華房
大阪ビトロライト工事
南満鉱業
浅野物産
ベニス工房
木下商店
米本商店
田村商会
玲光社
ミノル屋
東亜鉄工所
大平工業所
油脂化工社
日本ホロタイル

KENSEISHOKAI
平岡襖紙店
浅野スレート販売
鈴鹿工務所
原田商会
日本セメント防水剤製造所
岡本好文園
日本洋瓦大阪出張所
金剛商会
大阪陶業
大坪電気工業所
浅海商店
BUILDING EQUIPMENT
山中商会
阿部鉄工所
大森油脂工業所
日本工剤
岡田建築材料店
日本建築紙工
島田硝子製造所
日本ペイント会社
宍原商会大阪支店

中村グラニット商会
三菱造船神戸造船所
シーベル・ヘグナー商会
森川組
田中昌司商店
大福海上火災保険
伊奈製陶
HANKEN SEISAKUSYO
三井物産
小野田セメント製造
城口研究所
出浦建築事務所
新海建築工務所
大阪建築相談所
池田建築事務所
小笠原建築事務所
岡部建築事務所
大阪建築所
和田建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所

宗建築事務所
国枝工務所
野村、橋本建築事務所
安井武雄建築事務所
柳下建築事務所
増田清建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
遠藤於菟
設楽建築工務所
西原衛生工業所大阪支店
大阪窯業
池田勘蔵
大倉土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯組
野村組
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組

松村組
藤木工務店
正木工務店
岡本工務店
鴻池組
有山組
駒井喜商店
安藤組大阪出張所
辰巳吉之助
森本建築社
清水組大阪支店
銭高組
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
大阪耐火リノリウム工業
須賀商会
栄進社
松尾鉄骨橋梁
新田ベニヤ製造所
大阪青写真調製所
山本窯業商店
常盤貿易商会
高島屋呉服店
東洋建材工業所

日米建築資料社
河村青写真調製所
デウエット商会
萩原煖房工務所
東洋リノリユーム
田中源太郎商店
建築金物商会